

## 参考資料（調査結果詳細）



## 参考資料（調査結果詳細）

### － 目 次 －

I	アンケート調査の方法・調査項目 .....	1
◇	アンケート調査実施概要 .....	1
◇	アンケート調査の対象 .....	1
◇	アンケート調査項目 .....	2
1.	回答者の属性 .....	2
2.	死に対する意識 .....	6
3.	生前準備に関する意識と行動 .....	9
4.	遺言等に関する意識 .....	11
5.	人生の終末期に関する新たなサポートについて（実際・ニーズ） .....	14
II	アンケート調査結果 .....	18
1.	アンケート実施概要 .....	18
2.	アンケート結果概要 .....	18
(1)	回答者属性 .....	18
(2)	死に対する意識 .....	30
(3)	生前準備に関する意識と行動 .....	46
(4)	遺言等に関する意識 .....	59
(5)	人生の終末期に関する新たなサポートについて（実際・ニーズ） .....	71
III	ヒアリング調査結果 .....	76
1.	事前準備期のサポート .....	76
2.	高齢期のサポート .....	80
3.	終末期のサポート .....	84
4.	死別後のサポート .....	88
5.	その他のサポート .....	91



# I アンケート調査の方法・調査項目

## ◇ アンケート調査実施概要

幅広い年齢階層を対象としたアンケート調査を実施する。短期間に約 4,000 件の回答を得るために、WEB アンケート調査を実施する。

調査対象は 30 歳以上の者とし、年齢階層や居住地域、性別、暮らしぶりの実態に応じてカテゴリー化し、カテゴリー別に、ライフエンディング・ステージに関連してどのようなニーズがあり、どのようなニーズが実現しているのか（していないのか）、どのような準備が必要なのかを分析する。

また、特に「サポートを受けたいと思っているが、なんらかの要因で実現が困難なこと」を明らかにし、その潜在市場を具体的に探るとともに、具体的にどのような環境が整えば、国民がサポートを享受できるのかを検討するための基礎資料とした。

### WEB アンケート調査画面イメージ(例)

**Q3** あなたの現在の家族について、当てはまるものをすべてお選びください。  
 ※別居しているご家族も含めてお答えください。  
 ※ご自身の続柄からみてお答えください。  
**【必須入力】**

- 1. 配偶者
- 2. 子供
- 3. (自分の)父親
- 4. (自分の)母親
- 5. 配偶者の父親
- 6. 配偶者の母親
- 7. (自分の)祖父
- 8. (自分の)祖母
- 9. 配偶者の祖父
- 10. 配偶者の祖母

## ◇ アンケート調査の対象

約 4,000 件のサンプルを収集する。年齢階層、地域性による特徴などが把握できるよう、以下のような属性を目標とし、アンケートを回収する。

	30代		40代		50代		60代		70歳以上		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
北海道	20	20	20	20	40	40	40	40	40	40	320
東北	30	30	30	30	60	60	60	60	60	60	480
関東	50	50	50	50	100	100	100	100	100	100	800
中部	30	30	30	30	60	60	60	60	60	60	480
近畿	40	40	40	40	80	80	80	80	80	80	640
中国	30	30	30	30	60	60	60	60	60	60	480
四国	20	20	20	20	40	40	40	40	40	40	320
九州・沖縄	30	30	30	30	60	60	60	60	60	60	480
合計	250	250	250	250	500	500	500	500	500	500	4,000

※ なお、研究会における意見を踏まえ、「婚姻経験の有無」、「介護経験の有無」、「親の看取り経験の有無」などは、本調査の回答に大きな影響を与えるとともに、ライフエンディング・ステージに対する関心も異なるため、予めプレ調査において、それらの経験率を把握した上で、一定のサンプルを収集できるような対応を行った。

◇ アンケート調査項目

1. 回答者の属性

※以下の質問については、モニター属性として予め把握されている。

【属性1】：性別 (SA)

【属性2】：年齢 (NA)

【属性3】：居住地：都道府県 (SA)

【属性4】：婚姻状況 (SA)

※以下の質問については、事前実施のプレ調査において把握

【プレ調査1】家族との死別経験 (SA)

	死別した経験はない	1年以内	2年以内	3年以内	4年以内	5年以内	6年以内	7年以内	8年以内	9年以内	10年以内	それ以前
1. 配偶者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2. 子供	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3. (自分の) 父親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4. (自分の) 母親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5. 配偶者の父親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6. 配偶者の母親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7. (自分の) 祖父	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
8. (自分の) 祖母	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
9. 配偶者の祖父	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
10. 配偶者の祖母	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
11. 孫	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
12. 兄弟・姉妹	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

【プレ調査2】家族の介護経験（SA）

	介護した経験はない	1年以内	2年以内	3年以内	4年以内	5年以内	6年以内	7年以内	8年以内	9年以内	10年以内	それ以前
1. 配偶者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2. 子供	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3. (自分の) 父親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4. (自分の) 母親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5. 配偶者の父親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6. 配偶者の母親	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7. (自分の) 祖父	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
8. (自分の) 祖母	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
9. 配偶者の祖父	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
10. 配偶者の祖母	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
11. 孫	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
12. 兄弟・姉妹	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

※以降、本調査で把握。

問1 職業（SA）

1. 公務員	4. 自営業	7. パート・アルバイト
2. 経営者・役員	5. 自由業	8. 学生
3. 会社員	6. 専業主婦	9. その他

問2 収入・貯蓄（SA）

	200万円未満	200～400万円未満	400～600万円未満	600～800万円未満	800～1000万円未満	1000～1200万円未満	1200～1500万円未満	1500～2000万円未満	2000万円以上	わからない、答えたくない
1. 個人年収（手取り）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
2. 世帯年収	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
3. 貯蓄額	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

問3 現在の家族構成（別居も含む、存命の家族）（MA）

1. 配偶者	7. (自分の) 祖父
2. 子供	8. (自分の) 祖母
3. (自分の) 父親	9. 配偶者の祖父
4. (自分の) 母親	10. 配偶者の祖母
5. 配偶者の父親	11. 孫
6. 配偶者の母親	12. 兄弟・姉妹
	13. 上記に該当する家族はいない

【問3で、1, 3, 4に○を付けた回答者のみ】

問4 配偶者、(自分の) 父親、(自分の) 母親の年齢（NA）

①配偶者	歳
②(自分の) 父親	歳
③(自分の) 母親	歳

問5 現在同居している家族（MA）

1. 一人（単身）	6. 配偶者の父親	10. 配偶者の祖父
2. 配偶者	7. 配偶者の母親	11. 配偶者の祖母
3. 子供	8. (自分の) 祖父	12. 孫
4. (自分の) 父親	9. (自分の) 祖母	13. 兄弟・姉妹
5. (自分の) 母親		

【スクリーニング1で、複数の選択肢に○を付けた回答者のみ】

問6 過去5年以内に家族と死別した経験のうち、自分にとって心理的に最も影響があった死別経験（SA）

1. なし	6. 配偶者の父親	10. 配偶者の祖父
2. 配偶者	7. 配偶者の母親	11. 配偶者の祖母
3. 子供	8. (自分の) 祖父	12. 孫
4. (自分の) 父親	9. (自分の) 祖母	13. 兄弟・姉妹
5. (自分の) 母親		

問7 今後、(自然な流れとして) 自分が介護を行う可能性が高いと思われる家族（SA）  
最も直近で発生する可能性が高い家族を一つ選択。

1. 配偶者	5. 配偶者の父親	9. 配偶者の祖父
2. 子供	6. 配偶者の母親	10. 配偶者の祖母
3. (自分の) 父親	7. (自分の) 祖父	11. 孫
4. (自分の) 母親	8. (自分の) 祖母	12. 兄弟・姉妹
		13. いない、わからない

問8 現在、住んでいる家の種類 (SA)

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 持ち家</li><li>2. 借家</li><li>3. その他 ( )</li></ol> |
|---|

問9 家族等も含め、日常的に話す人や相談できる人の有無 (SA)

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 日常的に話したり相談する人はいる</li><li>2. 時々話したり相談する人はいる</li><li>3. 話したり相談する人はいない</li></ol> |
|--|

問10 日頃の宗教的行動について、あてはまるもの (MA)

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 年に1回以上は墓参りをする</li><li>2. 知人の葬儀には、他の予定より優先して参加する</li><li>3. 日常的に、仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする</li><li>4. 魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身の回りに置いている</li><li>5. 決まった日に神社仏閣などにお参りに行く</li><li>6. 定期的に教会に礼拝に行く</li><li>7. 聖書や教典など宗教関連の本をおりにふれ読んでいる</li><li>8. 普段から礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこないをしている</li><li>9. あてはまるものはない</li></ol> |
|---|

## 2. 死に対する意識

【下記、②、③、④は、問3で、1、3、4に○を付けた回答者のみ】

問11 希望する自分自身の寿命、両親や配偶者の寿命 (NA)

①自身は何歳まで生きたいと思うか	歳くらい
②(自分の) 父親には何歳まで生きて欲しいか	歳くらい
③(自分の) 母親には何歳まで生きて欲しいか	歳くらい
④配偶者には何歳まで生きて欲しいか	歳くらい

問12 「死」に関連する意識について、それぞれあてはまる感覚 (SA)

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
①死ぬのがとてもこわい	1	2	3	4
②死についてほとんど考えたことがない	1	2	3	4
③人々が死について話すのを聞いても気にならない	1	2	3	4
④手術が必要になるのではないかと考えると恐ろしい	1	2	3	4
⑤癌になることを特に恐れてはいない	1	2	3	4
⑥死について考えても、けっして思い悩まない	1	2	3	4
⑦苦しんで死ぬのがこわい	1	2	3	4
⑧死後の世界で自分がどうなるのかと、とても悩んでいる	1	2	3	4
⑨心臓病の発作が起こることを非常に心配している	1	2	3	4
⑩人生がどんなに短いかということをよく考える	1	2	3	4
⑪死体を見ると非常にこわい	1	2	3	4

問13 仮に、自分自身が最期を迎える場合、希望や不安・心配についてあてはまるもの (MA)

<p>&lt;最期を迎える場合の希望&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ある日突然、苦しまずに死にたい</li> <li>2. 病気などで多少寝込んでもいいから、少しずつ死に向かっていきたい</li> <li>3. 痴呆になって、自分では分からないうちに死にたい</li> </ol> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>&lt;最期を迎える場合の不安・心配&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 家族が看取ってくれるかということ</li> <li>5. 葬儀は誰が行ってくれるのかということ</li> <li>6. 納骨を誰に託せばよいのかということ</li> <li>7. 病気の悪化に伴い、痛みや苦しみがあること</li> <li>8. 家族や友人と別れなければならないこと</li> <li>9. 残された家族が精神的に立ち直れるかということ</li> <li>10. 残された家族が経済的に困るのではないかということ</li> <li>11. 自分のやりたいことができずじまいになること、やり残した仕事があること</li> <li>12. 自分の存在がこの世から忘れられてしまうのではないかということ</li> <li>13. 誰にも気づかれずに一人で死んでいくのではないかということ</li> <li>14. 職場や周りの人が仕事や業務のことで困るのではないかということ</li> <li>15. 財産がどうなるのかということ</li> <li>16. 不安・心配なことについて相談する相手がいないということ</li> </ol> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>17. 特に、上記のような希望や不安・心配はない</p>
--

【問3で、1に○を付けた回答者（配偶者がいる）のみ】

問14 仮に、配偶者があなたより先に最期を迎える場合、希望や不安・心配についてあてはまるもの (MA)

<p>&lt;最期を迎える場合の希望&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心筋梗塞などで、ある日突然苦しまずに死を迎えて欲しい</li> <li>2. 病気などで多少寝込んででもいいから少しずつ死に向かって欲しい</li> <li>3. 痴呆になって、自分では分からないうちに死を迎えて欲しい</li> </ol> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>&lt;最期を迎える場合の不安・心配&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 配偶者を看取ってあげられるかということ</li> <li>5. 配偶者の葬儀を自分がしてあげられるのかということ</li> <li>6. 配偶者の納骨を自分がしてあげられるのかということ</li> <li>7. 病気の悪化に伴い、配偶者に痛みや苦しみがあること</li> <li>8. 配偶者と別れなければならないこと</li> <li>9. 残された自分自身が精神的に立ち直れるかということ</li> <li>10. 残された自分自身が経済的に困るのではないかということ</li> <li>11. 配偶者のやりたいことができずじまいになること、やり残した仕事があること</li> <li>12. 配偶者の存在がこの世から忘れられてしまうのではないかということ</li> <li>13. 配偶者が、誰にも気づかれずに一人で死んでいくのではないかということ</li> <li>14. 配偶者の職場や周りの人が仕事や業務のことで困るのではないかということ</li> <li>15. 配偶者の財産がどうなるのかということ</li> <li>16. 配偶者が心配なことについて相談する相手がいないということ</li> </ol> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>17. 特に、上記のような希望や不安・心配はない</p>
--

【問3で、3、4に○を付けた回答者（両親のどちらかが存命）のみ】

問15 仮に、あなたが御両親と死別した場合、困ると思うことはなんですか (MA)

1. 親戚関係が不明	6. 葬儀の方法
2. 友人関係が不明	7. お墓の準備
3. 財産処理の方法	8. その他 ( )
4. 財産や遺品の所在	9. 特に困ることはない
5. 遺品の整理	

【問3で、3、4に○を付けた回答者（両親のどちらかが存命）のみ】

問16 仮に、あなたが御両親と死別した場合、家族以外で悩みなど相談するであろう人、頼るであろう人は誰ですか (MA)

1. 医療関係者（医師・看護師など）
2. 介護関係者（ホームヘルパー・ケアマネージャーなど）
3. 弁護士、司法書士、行政書士など
4. 公認会計士、税理士、ファイナンシャルプランナーなど
5. 金融機関、保険会社
6. 臨床心理士、カウンセラーなど
7. 葬祭業者、葬祭関連サービス業者
8. 宗教関係者
9. 行政機関
10. 家族の代わりに支援する団体等の担当者、相談員など
11. その他 ( )
12. 相談したい人、頼りたい人はいない
13. わからない、考えたことがない

問17 ①自分自身の最期をどこで迎えたいと思いますか (SA)。また、②実際には、自分はどこで最期を迎えたいと思いますか (SA)。

	病院	自宅	老人ホーム等の施設	その他	わからない・考えられない
①自分自身の最期をどこで迎えたいと思うか	1	2	3	4	5
②実際には自分はどこで最期を迎えたいと思うか	1	2	3	4	5

3. 生前準備に関する意識と行動

問18 自分自身が最期を迎える前に、具体的にどのような「生前準備」が必要か、理解していますか (SA)

1. ほとんど理解していると思う	3. あまり理解していない
2. ある程度は理解していると思う	4. ほとんど理解していない

問19 自分自身が死を迎える時に備えての、生前準備の実態。(SA)

	既に準備している	現在準備中である	準備していない	準備すべきと感じるが、準備していない	準備すべきと感じない	わからない、考えたことがない
①財産、(現金、預貯金、不動産、負債、保険、年金) 整理しておくこと	1	2	3	4	5	
②遺産などの相続方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	
③遺影写真を撮影しておくこと	1	2	3	4	5	
④葬儀の事前準備をしておくこと	1	2	3	4	5	
⑤お墓の準備をしておくこと	1	2	3	4	5	
⑦納骨や埋葬の方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	
⑧自分史を作成しておくこと	1	2	3	4	5	
⑨自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと	1	2	3	4	5	
⑩自身の情報(日記、携帯、ホームページ他)の処分方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	
⑪延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと	1	2	3	4	5	
⑫その他 ( )	1	2	3	4	5	

【問19で、3を選択した項目についてのみ表示】

問20 準備しておくべきと感じているのに、準備していない理由 (MA)

	う	まだ先のことだと思	間がない	準備をするための時	金がない	準備をするためのお	ない	準備の方法がわから	る人がいない	準備を手伝ってくれ	特に理由はない
①財産、(現金、預貯金、不動産、負債、保険、年金) 整理しておくこと	1	2	3	4	5	6					
②遺産などの相続方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	6					
③遺影写真を撮影しておくこと	1	2	3	4	5	6					
④葬儀の事前準備をしておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑤お墓の準備をしておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑦納骨や埋葬の方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑧自分史を作成しておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑨自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑩自身の情報(日記、携帯、ホームページ他)の処分方法を決めておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑪延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと	1	2	3	4	5	6					
⑫その他 ( )	1	2	3	4	5	6					

- 問21 ①自分自身が死の直前にしておきたい、備えておきたいと感じることはなんですか (MA)、  
 ② (今後介護等が発生しそうな家族に対して) 死の直前にしてあげたい、支援してあげたいと感じることはなんですか (MA)

	心の準備をしておくこと	身の周りの整理をしておくこと	やりたいことをやること	会いたい人に会うこと	伝えたいことを伝えること	家族のために役に立つこと	人生を振り返ってみること	残された日々の過ごし方を考えること	その他 ( )	特になし
①自分自身が死の直前にしておきたい、備えておきたいと感じること	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
②今後、自分が介護等を行う必要がある家族に対して、死の直前にしてあげたい、支援してあげたいと感じること	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

- 問22 ①自分自身の葬儀についてどちらに近い希望を持っていますか (SA)、②今後、自分が介護等を行う必要がある家族に対する葬儀についてどちらに近い希望を持っていますか (SA)

	Aに近い ← → Bに近い				
	A: 本人の希望を尊重して実施される葬儀				B: 慣習や習俗に従って実施される葬儀
①自分自身の葬儀に関する希望	1	2	3	4	5
②今後、自分が介護等を行う必要がある家族に対する葬儀に関する希望	1	2	3	4	5

#### 4. 遺言等に関する意識

<いわゆる「エンディング・ノート」について>

問23 自分自身の万が一に備えて治療や介護、葬儀方法などの希望を予め書いておく「エンディングノート（遺言ノート、マイライフノート等とも言う）」を知っていますか（SA）

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1. よく知っている    | 3. 名前は聞いたことがある |
| 2. なんとなく知っている | 4. 知らない        |

【問23で、1～3を選択した場合】

問24 エンディングノート作成の経験や作成意向（SA）

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. すでに書いてある    | 3. 書くつもりはない     |
| 2. いずれ書くつもりである | 4. 考えていない、わからない |

【問24で、1を選択した場合】

問25 エンディングノートの作成のきっかけ（MA）

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 家族の死去や病気、それに伴う相続   | 5. 書籍や雑誌、テレビなどで存在を知って |
| 2. 身近な事故や災害等          | 6. その他（ ）             |
| 3. 病気等で自身の健康に不安を感じたから | 7. 特に理由はない            |
| 4. 家族や知人からの薦め         |                       |

<「任意後見制度」について>

問26 自分自身が、将来、認知症などによって判断能力が不十分になった時の後見事務やそれを託す人を事前に決めておく「任意後見制度」を知っていますか（SA）

- |               |                |
|---------------|----------------|
| 1. よく知っている    | 3. 名前は聞いたことがある |
| 2. なんとなく知っている | 4. 知らない        |

【問26で、1～3を選択した場合】

問27 任意後見制度活用の有無や活用意向（SA）

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1. すでに活用している     | 3. 活用するつもりはない   |
| 2. いずれ活用するつもりである | 4. 考えていない、わからない |

【問27で、1を選択した場合】

問28 任意後見制度活用のきっかけ（MA）

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 家族の死去や病気、それに伴う相続   | 5. 家族や知人からの薦め         |
| 2. 身近な事故や災害等          | 6. 書籍や雑誌、テレビなどで存在を知って |
| 3. 家族が認知症になったから       | 7. その他（ ）             |
| 4. 病気等で自身の健康に不安を感じたから | 8. 特に理由はない            |

<いわゆる「遺言」について>

問29 5年以内の家族からの相続の経験 (SA)。

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1. 相続を経験したことがある | 2. 相続を経験したことはない |
|-----------------|-----------------|

【問29で、1を選択した場合】

問30 相続を経験した際の、遺言の有無 (SA)。

- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 1. 遺言はなかった    | 4. その他の遺言があった      |
| 2. 自筆証書遺言があった | 5. 種類はわからないが遺言はあった |
| 3. 公正証書遺言があった | 6. 遺言があったかどうかわからない |

問31 自分自身の「遺言」作成の有無、今後の希望 (SA)。

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1. すでに作成している     | 3. 作成するつもりはない   |
| 2. いずれ作成するつもりである | 4. 考えていない、わからない |

【問31で、1、2を選択した場合】

問32 いわゆる「遺言」作成のきっかけ (MA)

- |                       |               |
|-----------------------|---------------|
| 1. 家族の死去や病気、それに伴う相続   | 4. 家族や知人からの薦め |
| 2. 身近な事故や災害等          | 5. その他 ( )    |
| 3. 病気等で自身の健康に不安を感じたから | 6. 特に理由はない    |

【問31で、1、2を選択した場合】

問33 作成した (作成する予定の) 「遺言」の種類 (SA)。

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 自筆証書遺言 | 3. その他 ( )  |
| 2. 公正証書遺言 | 4. 種類はわからない |

問34 法的効力が及ぶ「遺言」についての理解 (SA)。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1. よく理解している   | 3. あまり理解していない |
| 2. だいたい理解している | 4. 全く理解していない  |

(参考) 遺言書は、遺言者の真意を確実に実現させる必要があるため、厳格な方式が定められています。その方式に従わない遺言はすべて無効となります。遺言の内容についても、法的効力が及ぶ範囲は、以下のような内容に限られます。

- ①相続に関すること (相続分の指定など)
- ②財産の処分に関すること (寄付行為など)
- ③身分に関すること (子供の認知、後見人の指定など)

問35 遺産相続（財産や住居）の考え方（MA）

1. 老後の世話をしてくれる人（子ども・その他）に、財産を多く残したい
2. 家業を継いでくれる人（子ども・その他）に、財産を多く残したい
3. （状況に関わらず）子どもに財産を平等に残したい
4. 法定相続人ではない別の人に財産を残したい
5. 自分の財産は、なるべく社会・公共の役に立てたい
6. 自分の財産は、なるべく自分のために使いきりたい
7. その他（ )
8. 財産は全く無い、財産より債務の方が多い
9. 特に考えていない

5. 人生の終末期に関する新たなサポートについて（実際・ニーズ）

問36 自分自身のために、人生の終末期（死後・死別後を含む）に使ってみたいと感じている新たなサポート（SA）

	使ったことがある	利用を検討している	興味はある	必要は無い	わからない
①生前準備の必要性や方法を理解してもらうために、エンディングノートの作成や相続対策などの方法をセミナー形式などで教えるサポート	1	2	3	4	5
②保険制度ではカバーできない日常生活の支援や最期の時を迎える支援をするために、高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート	1	2	3	4	5
③自分の人生を振り返り、遺したい話などを遺すために、高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート	1	2	3	4	5
④高齢者の親をもつ人が抱える介護等の悩みや疑問に応えるために、あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサポート	1	2	3	4	5
⑤介護が必要な高齢者が旅行に行きたいという要望を叶えるために、介護付きの旅行を提供してくれるサポート	1	2	3	4	5
⑥介護が必要な高齢者が家族の冠婚葬祭等に参加できるように、疑似参加を可能としたり、介護付きで参加させてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑦人生の最期を暖かい空間で過ごしてもらうために、必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート	1	2	3	4	5
⑧終末期の最期の願いに応えるために、医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑨宗教者によるスピリチュアルケア（精神的なケア等）を可能とするために、僧侶が常駐する医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑩死亡時に必要となる煩雑な各種手続きを簡素化するために、行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート	1	2	3	4	5
⑪自分自身の希望に応じた葬送を行うために、葬送の形態を事前に相談し、その形態を叶えてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑫遠くに先祖のお墓があり、墓参り等が容易に出来ない人のために、本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート	1	2	3	4	5
⑬死亡後に遺された家族の生活を守るために、遺された資産などを守り、家族の生活等に併せて交付する信託サポート	1	2	3	4	5

問37 今後、自分が介護等を行う必要がある家族が、終末期（死後・死別後を含む）に使って欲しい具体的なサポート（SA）

	使ったことがある	利用を検討している	興味はある	必要は無い	わからない
①生前準備の必要性や方法を理解してもらうために、エンディングノートの作成や相続対策などの方法をセミナー形式などで教えるサポート	1	2	3	4	5
②保険制度ではカバーできない日常生活の支援や最期の時を迎える支援をするために、高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート	1	2	3	4	5
③自分の人生を振り返り、遺したい話などを遺すために、高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート	1	2	3	4	5
④高齢者の親をもつ人が抱える介護等の悩みや疑問に応えるために、あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサポート	1	2	3	4	5
⑤介護が必要な高齢者が旅行に行きたいという要望を叶えるために、介護付きの旅行を提供してくれるサポート	1	2	3	4	5
⑥介護が必要な高齢者が家族の冠婚葬祭等に参加できるように、疑似参加を可能としたり、介護付きで参加させてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑦人生の最期を暖かい空間で過ごしてもらうために、必要ときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート	1	2	3	4	5
⑧終末期の最期の願いに応えるために、医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑨宗教者によるスピリチュアルケア（精神的なケア等）を可能とするために、僧侶が常駐する医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑩死亡時に必要となる煩雑な各種手続きを簡素化するために、行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート	1	2	3	4	5
⑪自分自身の希望に応じた葬送を行うために、葬送の形態を事前に相談し、その形態を叶えてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑫遠くに先祖のお墓があり、墓参り等が容易に出来ない人のために、本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート	1	2	3	4	5
⑬死亡後に遺された家族の生活を守るために、遺された資産などを守り、家族の生活等に併せて交付する信託サポート	1	2	3	4	5

【問 36 または問 37 で、1 を選択した項目について】

問38 実際にサポートを受けてみての、サポート内容に対する満足度 (SA)

	満足	やや満足	やや不満	不満	わからない
①生前準備の必要性や方法を理解してもらうために、エンディングノートの作成や相続対策などの方法をセミナー形式などで教えるサポート	1	2	3	4	5
②保険制度ではカバーできない日常生活の支援や最期の時を迎える支援をするために、高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート	1	2	3	4	5
③自分の人生を振り返り、遺したい話などを遺すために、高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート	1	2	3	4	5
④高齢者の親をもつ人が抱える介護等の悩みや疑問に応えるために、あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサポート	1	2	3	4	5
⑤介護が必要な高齢者が旅行に行きたいという要望を叶えるために、介護付きの旅行を提供してくれるサポート	1	2	3	4	5
⑥介護が必要な高齢者が家族の冠婚葬祭等に参加できるように、疑似参加を可能としたり、介護付きで参加させてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑦人生の最期を暖かい空間で過ごしてもらうために、必要ときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート	1	2	3	4	5
⑧終末期の最期の願いに応えるために、医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑨宗教者によるスピリチュアルケア（精神的なケア等）を可能とするために、僧侶が常駐する医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑩死亡時に必要となる煩雑な各種手続きを簡素化するために、行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート	1	2	3	4	5
⑪自分自身の希望に応じた葬送を行うために、葬送の形態を事前に相談し、その形態を叶えてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑫遠くに先祖のお墓があり、墓参り等が容易に出来ない人のために、本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート	1	2	3	4	5
⑬死亡後に遺された家族の生活を守るために、遺された資産などを守り、家族の生活等に併せて交付する信託サポート	1	2	3	4	5

【問 36 または問 37 で、3 を選択した項目について】

問39 興味があるにもかかわらず、利用しない理由 (MA)

	将来的な利用は考えたい	利用方法や存在を知らない	価格が高い	期待に応えてくれるか不安	わからない、理由はない
①生前準備の必要性や方法を理解してもらうために、エンディングノートの作成や相続対策などの方法をセミナー形式などで教えるサポート	1	2	3	4	5
②保険制度ではカバーできない日常生活の支援や最期の時を迎える支援をするために、高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート	1	2	3	4	5
③自分の人生を振り返り、遺したい話などを遺すために、高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート	1	2	3	4	5
④高齢者の親をもつ人が抱える介護等の悩みや疑問に応えるために、あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサポート	1	2	3	4	5
⑤介護が必要な高齢者が旅行に行きたいという要望を叶えるために、介護付きの旅行を提供してくれるサポート	1	2	3	4	5
⑥介護が必要な高齢者が家族の冠婚葬祭等に参加できるように、疑似参加を可能としたり、介護付きで参加させてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑦人生の最期を暖かい空間で過ごしてもらうために、必要ときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート	1	2	3	4	5
⑧終末期の最期の願いに応えるために、医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑨宗教者によるスピリチュアルケア（精神的なケア等）を可能とするために、僧侶が常駐する医療機関・介護施設等のサポート	1	2	3	4	5
⑩死亡時に必要となる煩雑な各種手続きを簡素化するために、行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート	1	2	3	4	5
⑪自分自身の希望に応じた葬送を行うために、葬送の形態を事前に相談し、その形態を叶えてくれるサポート	1	2	3	4	5
⑫遠くに先祖のお墓があり、墓参り等が容易に出来ない人のために、本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート	1	2	3	4	5
⑬死亡後に遺された家族の生活を守るために、遺された資産などを守り、家族の生活等に併せて交付する信託サポート	1	2	3	4	5

問40 自分や家族が、人生の終末期（死後・死別後を含む）を迎えるにあたって、あったらよいと感じているサポートなどを自由に記載してください (FA)

(200 文字以内)
------------

## II アンケート調査結果

### 1. アンケート実施概要

- ・調査期間：平成24年1月14日～1月17日
- ・調査対象：国内に居住する30歳以上の者
- ・調査方法：モニターを活用したWEBアンケート調査
- ・回収数：4,181件

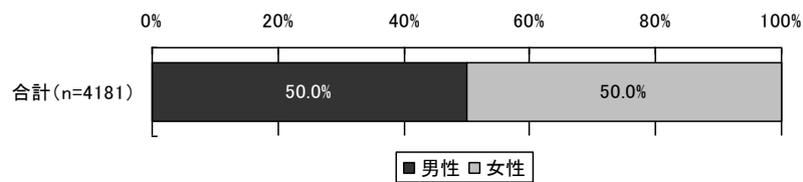
### 2. アンケート結果概要

#### (1) 回答者属性

##### ①性別

回答者の性別を見ると、男女比は半々となった。

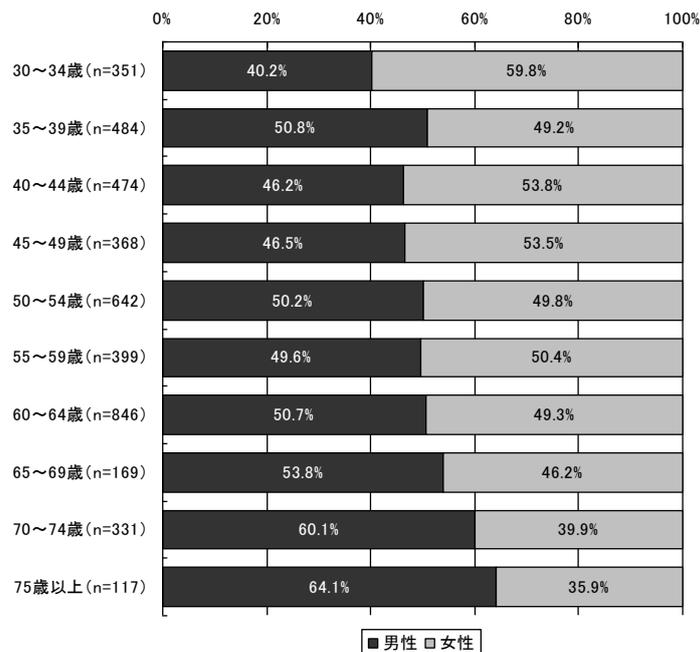
図表Ⅱ-1 性別



##### ②年齢

回答者の年齢を見ると、年齢が高くなるにつれ男性の割合が増えていっている。

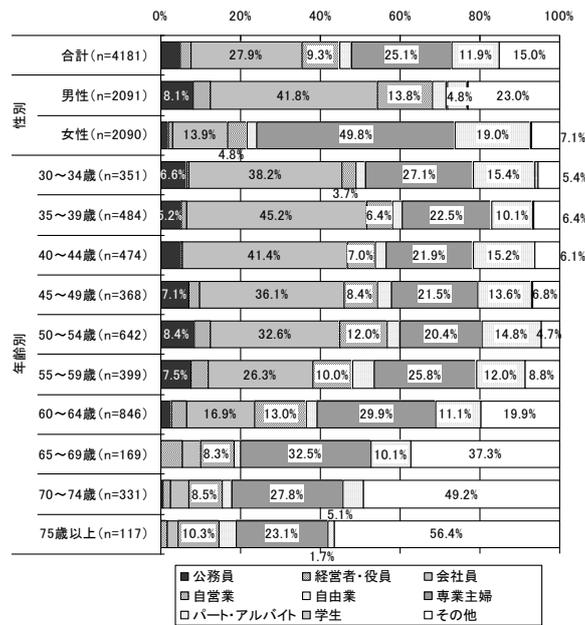
図表Ⅱ-2 年齢



### ③職業

回答者の職業を見ると、男女別では、男性が「会社員」（41.8%）、「自営業」（13.8%）、「公務員」（8.1%）、女性が「専業主婦」（49.8%）、「パート・アルバイト」（19.0%）、「会社員」（13.9%）の順となった。年齢別では、55～59歳までは「会社員」が最も多く、60歳以上は「専業主婦」が全体の3割を占めるようになっている。

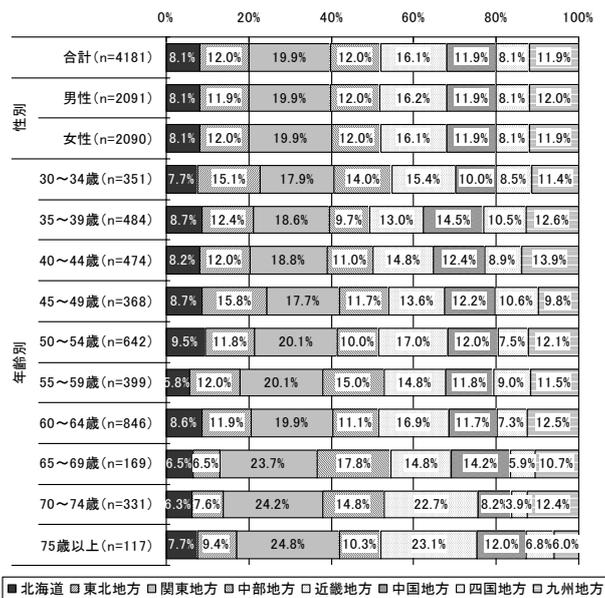
図表Ⅱ-3 職業



### ④居住地

回答者の居住地をみると、男女別・年齢別ともに「関東地方」と「近畿地方」が2割前後の割合となっている。70歳以上は特にその傾向が強い。

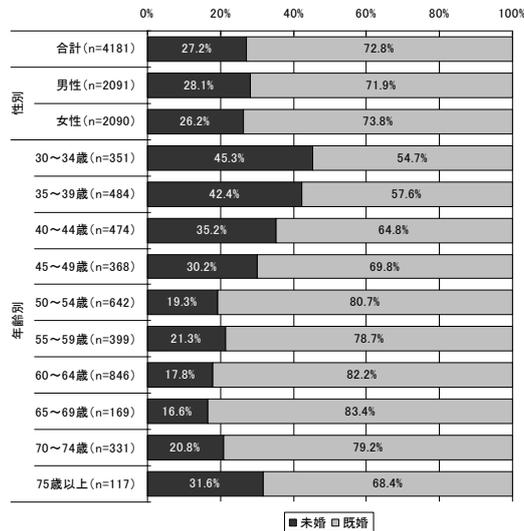
図表Ⅱ-4 居住地



### ⑤未既婚

回答者の未既婚を見ると、男女別では、ともに「未婚」が約3割、「既婚」が約7割となった。年齢別では、年齢が高くなるにつれて「既婚」が高くなるが、75歳以上では「未婚」が3割を超えている。「未婚」の中には配偶者との死別も含まれるものと考えられる。

図表 II-5 未既婚

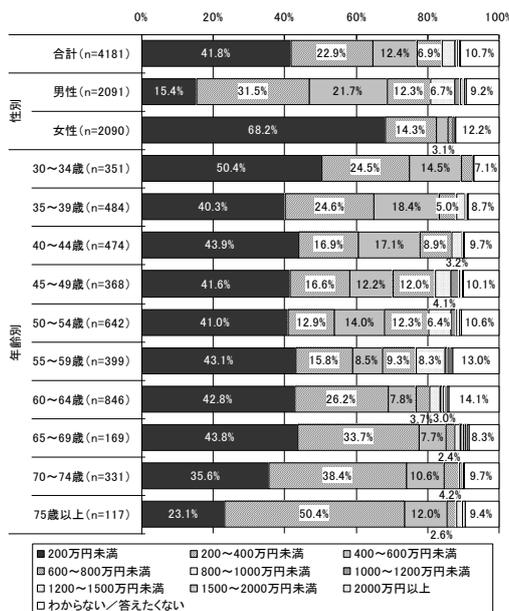


### ⑥個人年収（手取り）

回答者の個人年収（手取り）を見ると、男女別では、男性では「600万円未満」が約7割、女性では「200万円未満」が約7割となった。

年齢別では、いずれの年代においても「200万円未満」が約4~5割と最も多い。「400万円以上」の割合は55~59歳が最も低く、これは専業主婦の割合が高くなる（職業の項目より）ことによると考えられる。

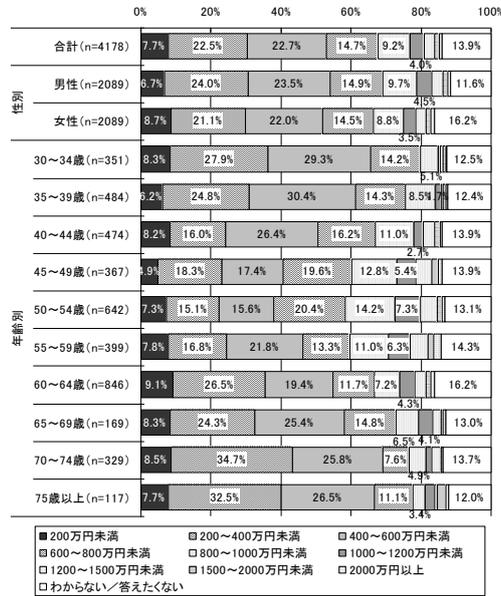
図表 II-6 個人年収（手取り）



## ⑦世帯収入

回答者の世帯収入を見ると、45～49歳をピークに、山なりの形となっており、特に45～59歳までは「1,000万円以上」の高額所得が多くなっている。

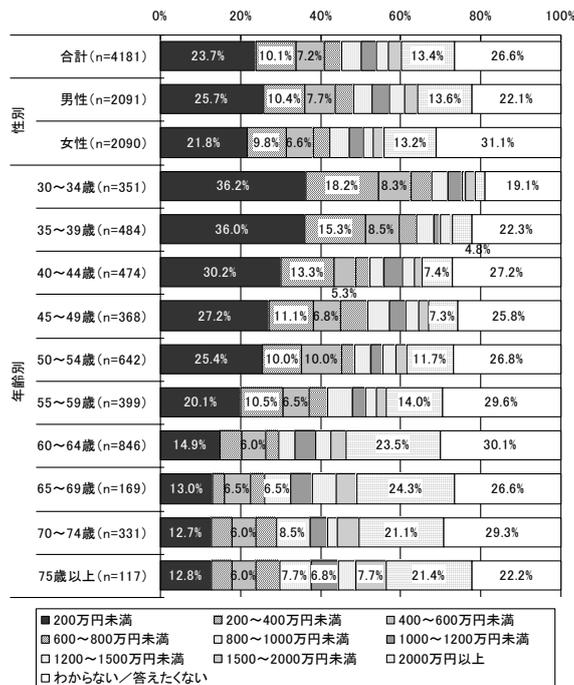
図表Ⅱ-7 世帯収入



## ⑧貯蓄額

回答者の貯蓄額を見ると、年齢が高くなるにつれて高額になっており、特に60歳以上では「2,000万円以上」が2割を超えている。

図表Ⅱ-8 貯蓄額

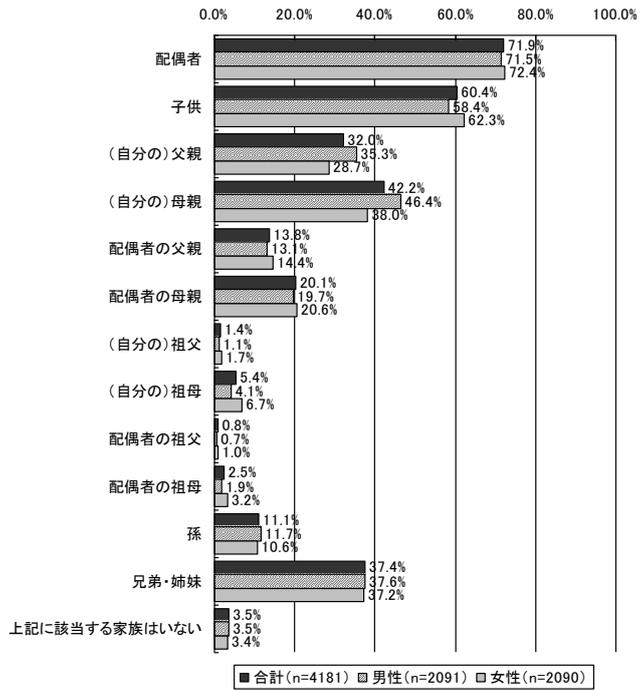


### ⑨家族構成

回答者の家族構成を見ると、男女別では、男女ともに「配偶者」が約7割、「子供」が約6割となっている。また「(自分の)母親」も4割を超えている。

年齢別では、30～39歳では「配偶者」よりも「(自分の)母親」の方が若干高く、50～54歳では「子供」が、65～69歳では「(自分の)母親」が他に比べて高くなっている。

図表Ⅱ-9 家族構成



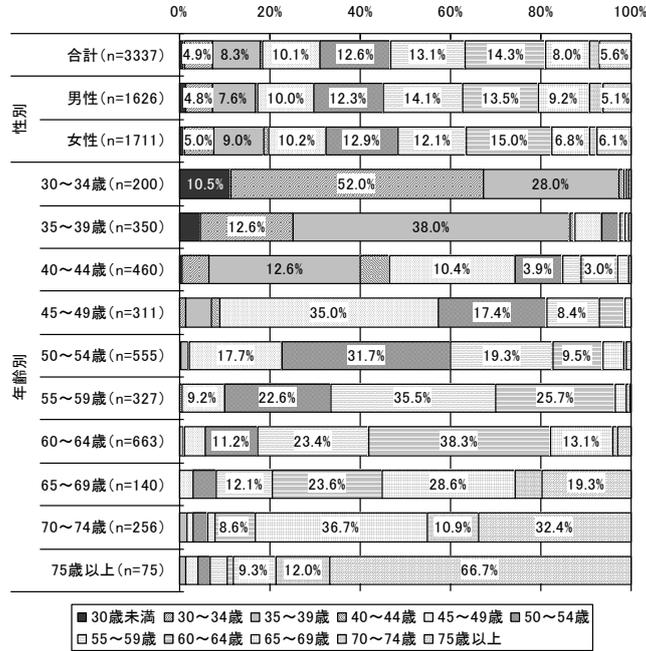
図表Ⅱ-10 家族構成 (年齢別)

年齢別	合計	配偶者	子供	(自分の)父親	(自分の)母親	配偶者の父親	配偶者の母親	(自分の)祖父	(自分の)祖母	配偶者の祖父	配偶者の祖母	孫	兄弟・姉妹	上記に該当する家族はいない
合計	4181	3008	2524	1339	1765	575	842	58	227	34	105	465	1563	145
30～34歳	351	193	155	171	199	74	73	29	95	15	36	0	169	14
35～39歳	484	281	219	212	289	115	131	23	82	10	39	0	248	15
40～44歳	474	307	261	214	271	98	119	4	36	3	14	0	215	11
45～49歳	368	253	228	127	169	67	96	1	8	3	10	2	135	13
50～54歳	642	519	453	226	296	104	169	0	5	2	3	29	224	16
55～59歳	399	308	259	91	142	43	72	0	0	0	0	2	40	117
60～64歳	846	690	544	255	323	56	142	0	0	0	0	0	185	268
65～69歳	169	140	114	26	41	10	19	1	1	1	1	1	57	54
70～74歳	331	245	213	11	26	6	18	0	0	0	0	0	106	101
75歳以上	117	72	78	6	9	2	3	0	0	0	0	0	46	32

⑩配偶者・(自分の) 父親・(自分の) 母親の年齢

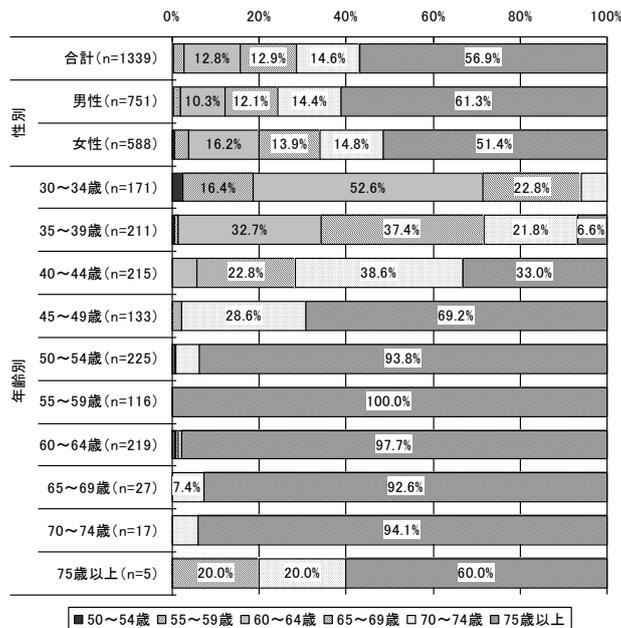
配偶者の年齢を見ると、いずれの年代においても同年代の配偶者の割合が多くなっている。

図表 II-11 配偶者の年齢



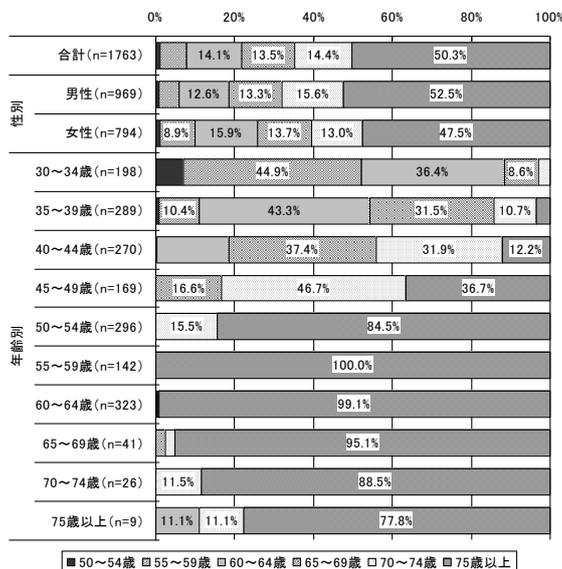
(自分の) 父親の年齢を見ると、30~34歳では「60~64歳」、35~39歳では「65~69歳」が最も多い。45~49歳では約7割、50歳以上では9割以上が「75歳以上」となっている。(自分の) 父親との年齢差は30~35歳前後となっている。

図表 II-12 (自分の) 父親の年齢



(自分の) 母親の年齢を見ると、30～34歳では「55～59歳」、35～39歳では「60～64歳」が約5割と最も多い。40～44歳では「65～69歳」が約4割、45～49歳では「70～74歳」が約5割であり、50歳以上では8割以上が「75歳以上」となっている。(自分の) 母親との年齢差は25～30歳前後となっている。

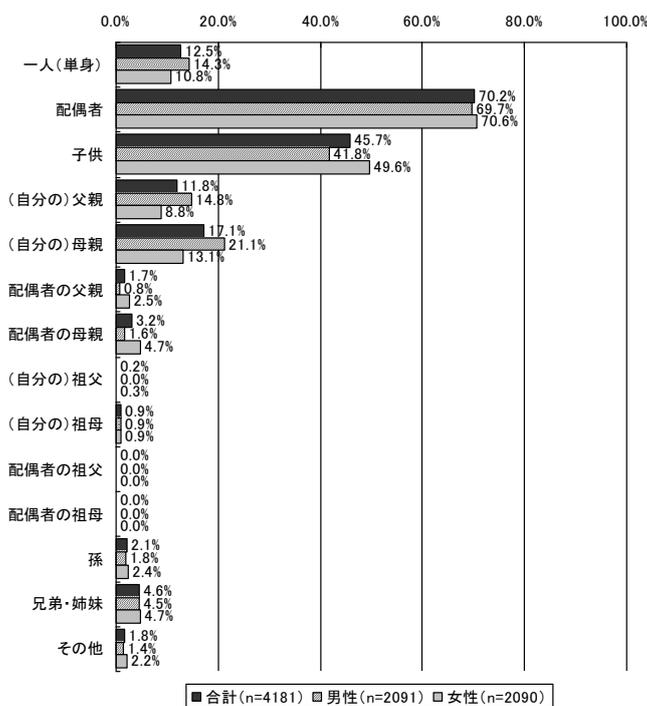
図表 II-13 (自分の) 母親の年齢



⑩同居している家族

同居している家族は、男女ともに「配偶者」が約7割、「子供」が約5割となっている。

図表 II-14 同居している家族 (性別)



同居している家族を年齢別に見ると、いずれの年齢においても「配偶者」が7割前後、「子供」が5割前後、「(自分の) 母親」が2割前後となっている。

なお、70歳以上も若干ではあるが「(自分の) 母親」と回答しており、高齢者同士の同居が見て取れる。

図表 II-15 同居している家族 (年齢別)

年齢別	合計	一人(単身)	配偶者	子供	(自分の) 父親	(自分の) 母親	配偶者の父親	配偶者の母親	(自分の) 祖父	(自分の) 祖母	配偶者の祖父	配偶者の祖母	孫	兄弟・姉妹	その他
	合計	4181	524	2934	1911	494	715	69	133	8	38	1	1	89	193
	100.0%	12.5%	70.2%	45.7%	11.8%	17.1%	1.7%	3.2%	0.2%	0.9%	0.0%	0.0%	2.1%	4.6%	1.8%
30~34歳	351	55	191	153	71	91	7	8	4	21	0	0	0	45	12
	100.0%	15.7%	54.4%	43.6%	20.2%	25.9%	2.0%	2.3%	1.1%	6.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.8%	3.4%
35~39歳	484	76	276	213	82	127	15	14	3	11	0	0	0	47	9
	100.0%	15.7%	57.0%	44.0%	16.9%	26.2%	3.1%	2.9%	0.6%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%	9.7%	1.9%
40~44歳	474	61	301	256	75	106	5	8	0	3	0	0	0	37	9
	100.0%	12.9%	63.5%	54.0%	15.8%	22.4%	1.1%	1.7%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	7.8%	1.9%
45~49歳	368	44	248	214	47	70	8	16	0	2	0	0	0	14	4
	100.0%	12.0%	67.4%	58.2%	12.8%	19.0%	2.2%	4.3%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	3.8%	1.1%
50~54歳	642	61	499	374	75	103	14	31	0	0	0	0	4	11	9
	100.0%	9.5%	77.7%	58.3%	11.7%	16.0%	2.2%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	1.7%	1.4%
55~59歳	399	42	301	203	35	63	11	20	0	0	0	0	10	11	7
	100.0%	10.5%	75.4%	50.9%	8.8%	15.8%	2.8%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	2.8%	1.8%
60~64歳	846	82	670	306	92	123	6	31	0	0	0	0	36	21	9
	100.0%	9.7%	79.2%	36.2%	10.9%	14.5%	0.7%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.3%	2.5%	1.1%
65~69歳	169	18	135	52	10	18	2	3	1	1	1	1	9	2	6
	100.0%	10.7%	79.9%	30.8%	5.9%	10.7%	1.2%	1.8%	0.6%	0.6%	0.6%	0.6%	5.3%	1.2%	3.6%
70~74歳	331	56	242	100	5	10	1	2	0	0	0	0	16	2	2
	100.0%	16.9%	73.1%	30.2%	1.5%	3.0%	0.3%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%	0.6%	0.6%
75歳以上	117	29	71	40	2	4	0	0	0	0	0	0	14	3	7
	100.0%	24.8%	60.7%	34.2%	1.7%	3.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.0%	2.6%	6.0%

⑪家族との死別経験

家族との死別経験を見ると、10年以上前に「(自分の) 祖父」「(自分の) 祖母」との死別経験を持つとの回答が約7割、「(自分の) 父親」「配偶者の母親」との回答が2割弱となっている。10年以内に家族との死別経験をしたことがある回答割合は少なく、葬儀の経験も少ないことがわかる。

図表 II-16 家族との死別経験

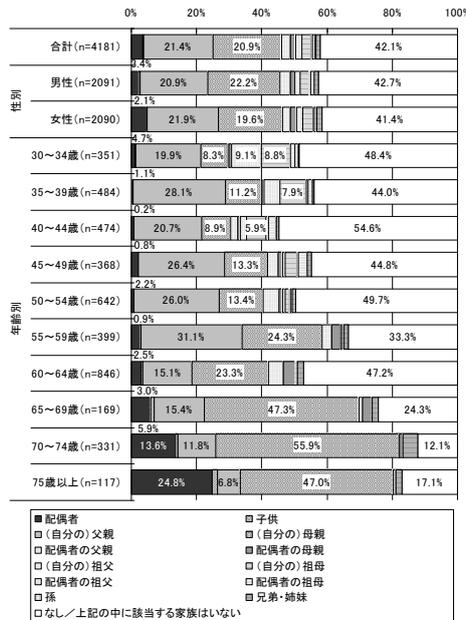
	全体	死別した経験はない	1年以内	2年以内	3年以内	4年以内	5年以内	6年以内	7年以内	8年以内	9年以内	10年以内	それ以前
配偶者	4181	3957	34	39	38	25	27	2	4	3	1	7	44
	100.0%	94.6%	0.8%	0.9%	0.9%	0.6%	0.6%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.2%	1.1%
子供	4181	4074	4	4	6	4	6	4	3	1	2	4	69
	100.0%	97.4%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	1.7%
(自分の) 父親	4181	2338	213	206	238	230	191	23	26	33	18	61	604
	100.0%	55.9%	5.1%	4.9%	5.7%	5.5%	4.6%	0.6%	0.6%	0.8%	0.4%	1.5%	14.4%
(自分の) 母親	4181	2900	205	199	222	191	200	14	18	15	5	23	189
	100.0%	69.4%	4.9%	4.8%	5.3%	4.6%	4.8%	0.3%	0.4%	0.4%	0.1%	0.6%	4.5%
配偶者の父親	4181	2477	71	72	67	52	62	46	77	53	32	137	1035
	100.0%	59.2%	1.7%	1.7%	1.6%	1.2%	1.5%	1.1%	1.8%	1.3%	0.8%	3.3%	24.8%
配偶者の母親	4181	2980	54	59	65	43	55	33	64	41	14	91	682
	100.0%	71.3%	1.3%	1.4%	1.6%	1.0%	1.3%	0.8%	1.5%	1.0%	0.3%	2.2%	16.3%
(自分の) 祖父	4181	619	39	35	34	27	61	28	41	24	20	206	3047
	100.0%	14.8%	0.9%	0.8%	0.8%	0.6%	1.5%	0.7%	1.0%	0.6%	0.5%	4.9%	72.9%
(自分の) 祖母	4181	560	72	64	70	41	69	39	65	38	22	222	2919
	100.0%	13.4%	1.7%	1.5%	1.7%	1.0%	1.7%	0.9%	1.6%	0.9%	0.5%	5.3%	69.8%
配偶者の祖父	4181	2130	17	19	12	9	29	17	15	10	7	69	1847
	100.0%	50.9%	0.4%	0.5%	0.3%	0.2%	0.7%	0.4%	0.4%	0.2%	0.2%	1.7%	44.2%
配偶者の祖母	4181	2059	35	33	22	17	42	26	20	18	16	85	1808
	100.0%	49.2%	0.8%	0.8%	0.5%	0.4%	1.0%	0.6%	0.5%	0.4%	0.4%	2.0%	43.2%
孫	4181	4040	1	2	1	2	2	2	0	3	1	0	127
	100.0%	96.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	3.0%
兄弟・姉妹	4181	3570	34	34	46	25	24	17	25	14	4	23	365
	100.0%	85.4%	0.8%	0.8%	1.1%	0.6%	0.6%	0.4%	0.6%	0.3%	0.1%	0.6%	8.7%

⑫心理的に最も影響があった家族との死別経験（過去5年以内）

心理的に最も影響があった家族との死別経験を見ると、30～59歳では「(自分の) 父親」が2割～3割と最も多く、65歳以上は「(自分の) 母親」が半数を占めている。

ただし、30～64歳までは「なし/上記の中に該当する家族はいない」4割前後あり、過去5年以内には全体的に家族との死別経験がないことが見て取れる。

図表 II-17 心理的に最も影響があった家族との死別経験（過去5年以内）



⑬家族の介護経験

家族の介護経験を見てみると、「(自分の) 父親」「(自分の) 母親」では8割以上、それ以外については9割以上が「介護した経験はない」と回答している。

「(自分の) 父親」「(自分の) 母親」においては、「1年以内」との回答がそれぞれ4.2%、5.2%となっており、今後は介護経験の増加が想像される。

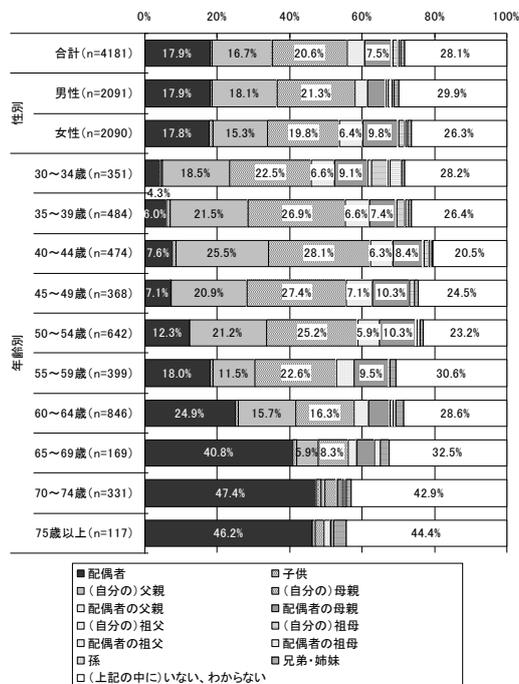
図表 II-18 家族の介護経験

	全体	介護した経験はない	1年以内	2年以内	3年以内	4年以内	5年以内	6年以内	7年以内	8年以内	9年以内	10年以内	それ以前
配偶者	4181	4050	28	16	20	12	12	5	3	4	1	6	24
子供	4181	4144	8	0	2	2	3	2	0	1	0	1	18
(自分の) 父	4181	3551	175	68	74	59	58	27	16	18	5	29	101
(自分の) 母	4181	3426	218	88	105	81	80	23	30	23	4	25	78
配偶者の父親	4181	3944	35	16	17	9	10	7	7	8	2	11	115
配偶者の母親	4181	3856	70	25	21	12	21	8	12	12	5	16	123
(自分の) 祖父	4181	4058	11	5	4	6	1	4	2	2	1	7	80
(自分の) 祖母	4181	3967	25	6	7	6	5	4	7	8	2	13	131
配偶者の祖父	4181	4151	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	25
配偶者の祖母	4181	4133	5	2	1	2	2	0	0	0	0	2	34
孫	4181	4164	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	12
兄弟・姉妹	4181	4135	10	3	5	3	3	0	0	1	1	2	18

### ⑭今後自分が介護を行う可能性が高いと思われる家族

今後自分が介護を行う可能性が高いと思われる家族を見ると、各年代ともに「(自分の) 父親」「(自分の) 母親」がそれぞれ2割前後と高い割合となっている。年齢が高くなるにつれて「配偶者」の割合が増加している。

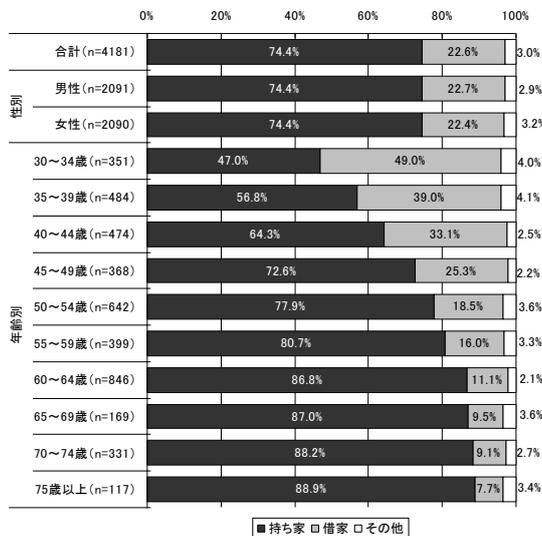
図表Ⅱ-19 今後自分が介護を行う可能性が高いと思われる家族



### ⑮居住形態

居住形態を見てみると、30~34歳では「持ち家」と「借家」が半々であるが、年齢が高くなるにつれて「持ち家」の割合が高くなっている。

図表Ⅱ-20 居住形態



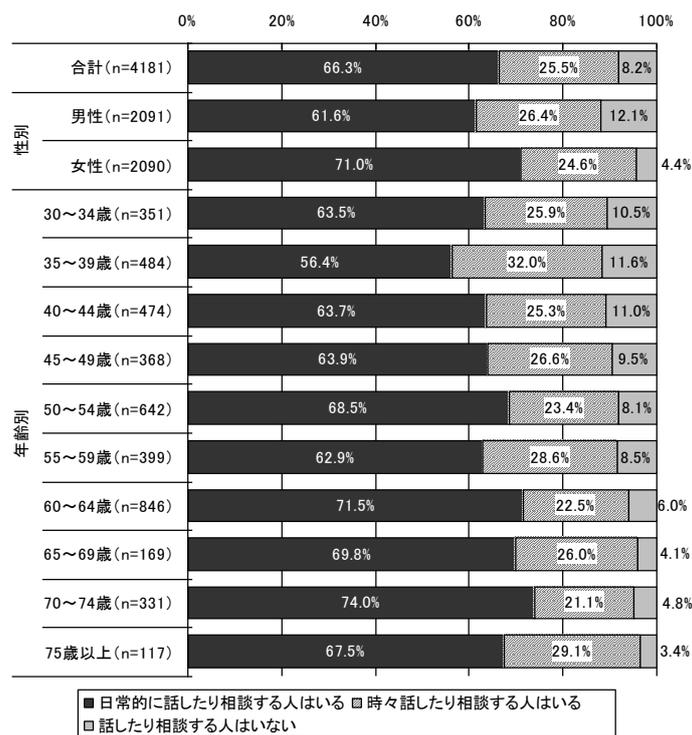
### ⑩家族を含め日常的に話す人や相談できる人

家族を含め日常的に話す人や相談できる人を見ると、ほぼ7割前後が「日常的に話したり相談する人はいる」と回答している。

男女別に見ると、「日常的に話したり相談する人はいる」との回答は、女性の方が男性より10ポイント近く高い割合となった。

年齢別に見ると、35～39歳では、他に比べて「日常的に話したり相談する人はいる」と回答した割合が若干低くなっている。

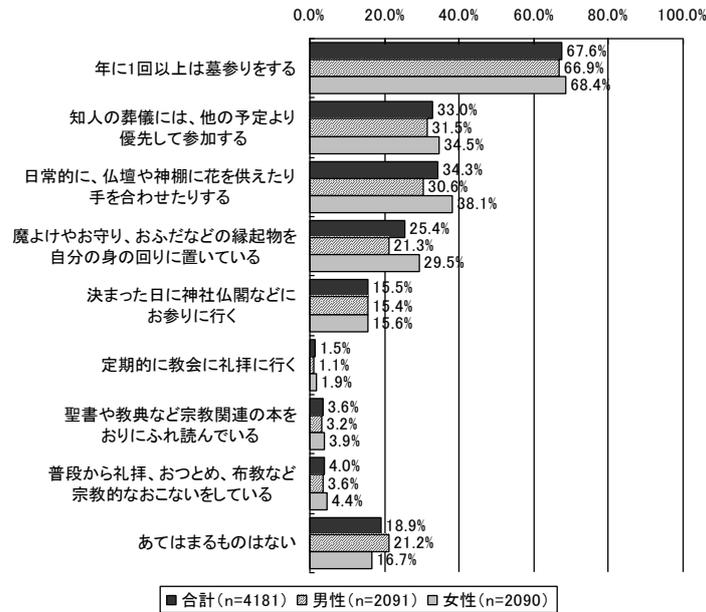
図表Ⅱ-21 家族を含め日常的に話す人や相談できる人



### ⑰日頃の宗教的行動

日頃の宗教的行動を見ると、男女別では、ともに「年に1回以上は墓参りをする」が約7割、「知人の葬儀には、他の予定より優先して参加する」「日常的に、仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする」が約3割となった。

図表Ⅱ-22 日頃の宗教的行動（性別）



年齢別では、30～49歳が「年に1回以上は墓参りをする」が6割前後、50～74歳が約7割、75歳以上が約8割となっている。45歳以上では「日常的に、仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする」が3割以上となり、35～44歳では「魔除けやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身の回りに置いている」が他に比べて若干高くなっている。

図表Ⅱ-23 日頃の宗教的行動（年齢別）

年齢別	合計	年に1回以上は墓参りをする	知人の葬儀には、他の予定より優先して参加する	日常的に、仏壇や神棚に花を供えたり手を合わせたりする	魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身の回りに置いている	決まった日に神社仏閣などにお参りに行く	定期的に教会に礼拝に行く	聖書や教典など宗教関連の本をおりにふれ読んでいる	普段から礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこないをしている	あてはまるものはない
		合計	年	知	日	魔	決	定	聖	普
合計	4181	2828	1381	1435	1061	650	63	149	169	792
	100.0%	67.6%	33.0%	34.3%	25.4%	15.5%	1.5%	3.6%	4.0%	18.9%
30～34歳	351	229	92	64	91	42	7	8	6	83
	100.0%	65.2%	26.2%	18.2%	25.9%	12.0%	2.0%	2.3%	1.7%	23.6%
35～39歳	484	287	131	110	135	59	6	13	14	122
	100.0%	59.3%	27.1%	22.7%	27.9%	12.2%	1.2%	2.7%	2.9%	25.2%
40～44歳	474	278	125	118	142	76	11	18	17	113
	100.0%	58.6%	26.4%	24.9%	30.0%	16.0%	2.3%	3.8%	3.6%	23.8%
45～49歳	368	226	116	122	96	51	4	9	9	94
	100.0%	61.4%	31.5%	33.2%	26.1%	13.9%	1.1%	2.4%	2.4%	25.5%
50～54歳	642	443	214	208	163	108	4	17	21	123
	100.0%	69.0%	33.3%	32.4%	25.4%	16.8%	0.6%	2.6%	3.3%	19.2%
55～59歳	399	294	144	162	92	71	5	21	29	51
	100.0%	73.7%	36.1%	40.6%	23.1%	17.8%	1.3%	5.3%	7.3%	12.8%
60～64歳	846	609	305	316	212	125	9	30	34	132
	100.0%	72.0%	36.1%	37.4%	25.1%	14.8%	1.1%	3.5%	4.0%	15.6%
65～69歳	169	128	71	82	40	33	4	7	10	20
	100.0%	75.7%	42.0%	48.5%	23.7%	19.5%	2.4%	4.1%	5.9%	11.8%
70～74歳	331	242	129	175	61	64	6	17	16	42
	100.0%	73.1%	39.0%	52.9%	18.4%	19.3%	1.8%	5.1%	4.8%	12.7%
75歳以上	117	92	54	78	29	21	7	9	13	12
	100.0%	78.6%	46.2%	66.7%	24.8%	17.9%	6.0%	7.7%	11.1%	10.3%

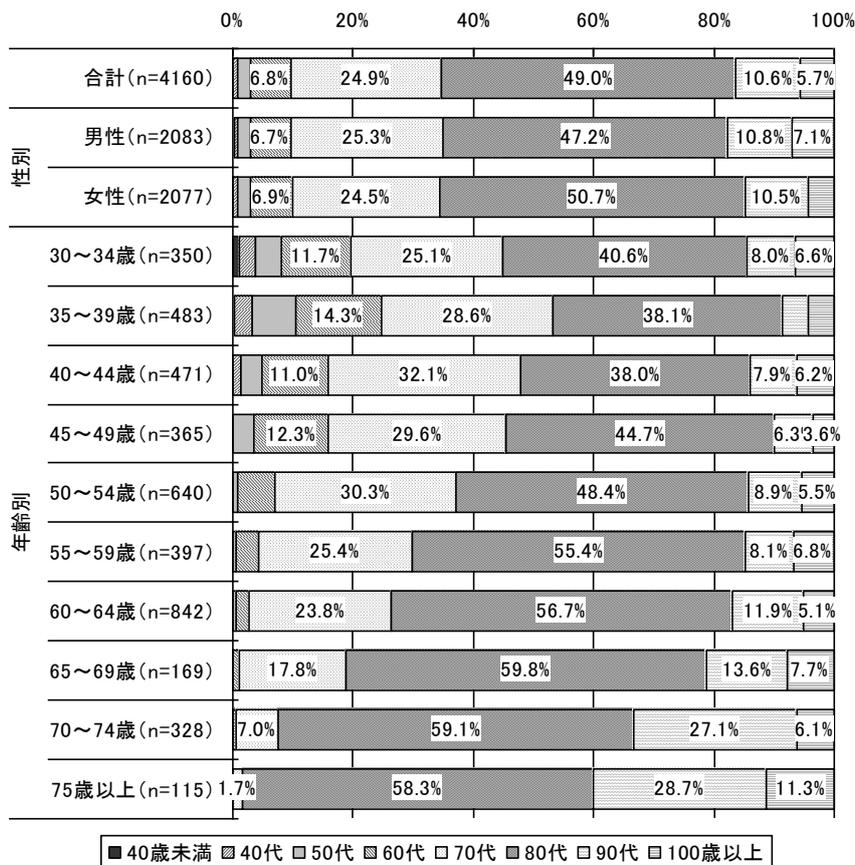
(2) 死に対する意識

①希望する自分自身の寿命、両親や配偶者の寿命

希望する自分自身の寿命を見ると、男女ともに「80代」が半数を占め、「70代」が2割強、「90代」が約1割となっている。

年齢別に見ると、どの年代においても「80代」が最も多く、次いで「70代」となっているが、年齢が高くなるにつれて希望する寿命も延びていっている。

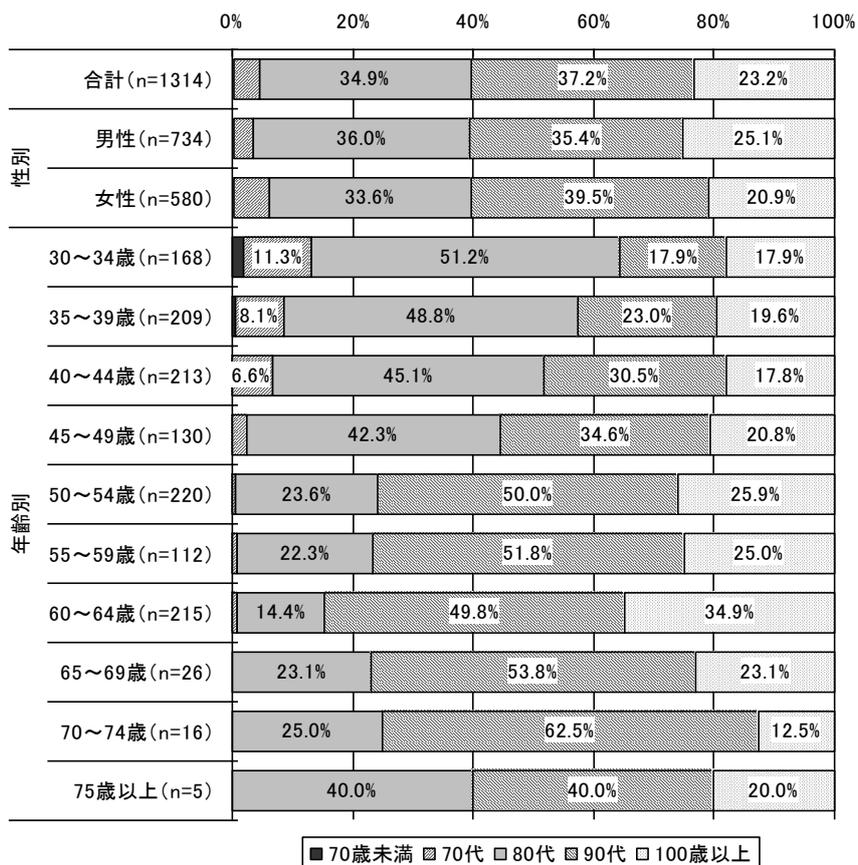
図表Ⅱ-24 希望する自分自身の寿命



(自分の) 父親には何歳まで生きて欲しいかについて見ると、男女別では、男性が「80代」(36.0%)、「90代」(35.4%)、「100歳以上」(25.1%)の順、女性が「90代」(39.5%)、「80代」(33.6%)、「100歳以上」(20.9%)の順で、男女ともほぼ同様の回答となった。

年齢別に見ると、30～49歳では「80代」「90代」「100歳以上」の順だが、50～74歳までは「90代」が10ポイント以上の伸びを示している。

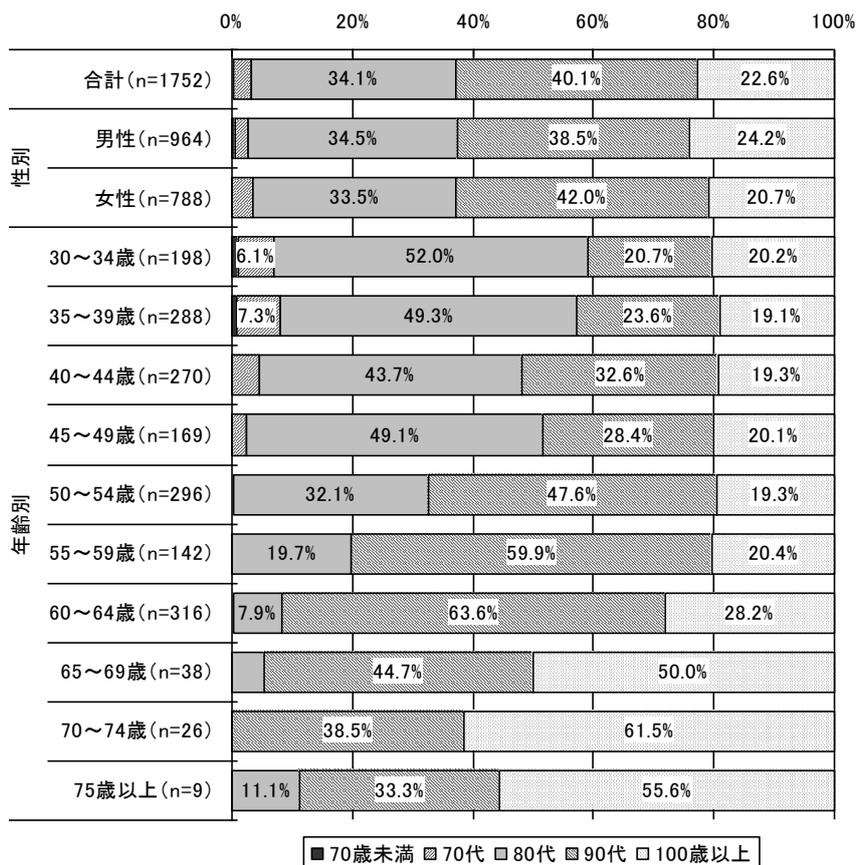
図表 II-25 (自分の) 父親には何歳まで生きて欲しいか



(自分の) 母親には何歳まで生きて欲しいかについて見ると、男女別では、ともに「90代」が約4割、「80代」が約3割、「100歳以上」が約2割となった。

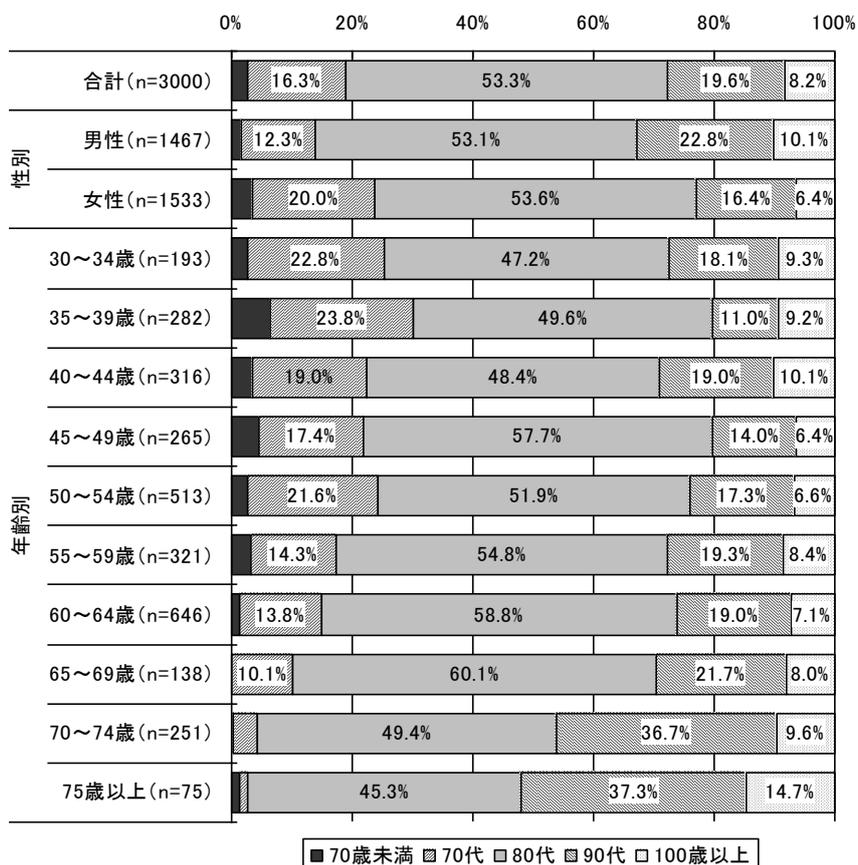
年齢別に見ると、30～34歳では「80代」が52.0%と半数を占めているが、年齢が高くなるにつれて「90代」「100歳以上」の割合が高くなっている。特に65～69歳と30～34歳とを比べると、「90代」「100歳以上」とともに2倍以上の割合となっている。

図表Ⅱ-26 (自分の) 母親には何歳まで生きて欲しいか



配偶者には何歳まで生きて欲しいかについて見ると、男女別ではともに「80代」が最も多く、それぞれ半数を占めているが、次点では男性が「90代」（22.8%）であるのに対して、女性は「70代」（20.0%）となっており、男性の方が配偶者に対して長寿を望んでいる傾向がみえる。

図表Ⅱ-27 配偶者には何歳まで生きて欲しいか

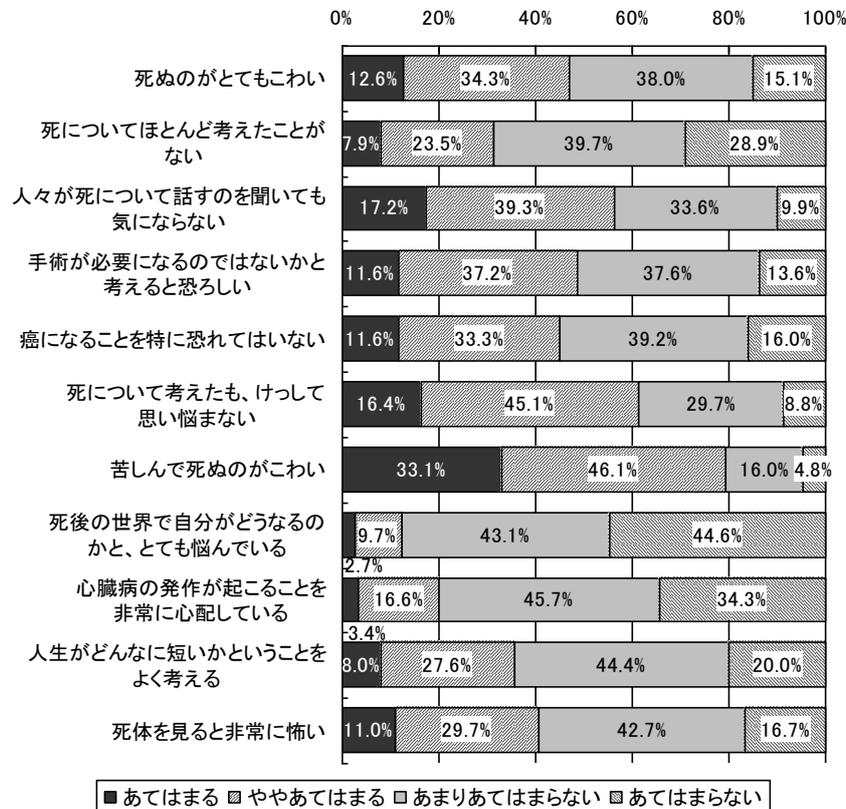


## ②死に関連する意識

死に関連する意識を見ると、あてはまる（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）との回答が多いのは、「苦しんで死ぬのがこわい」（79.2%）、「死について考えても、けっして思い悩まない」（61.5%）、「人々が死について話すのを聞いても気にならない」（56.5%）の順となっている。

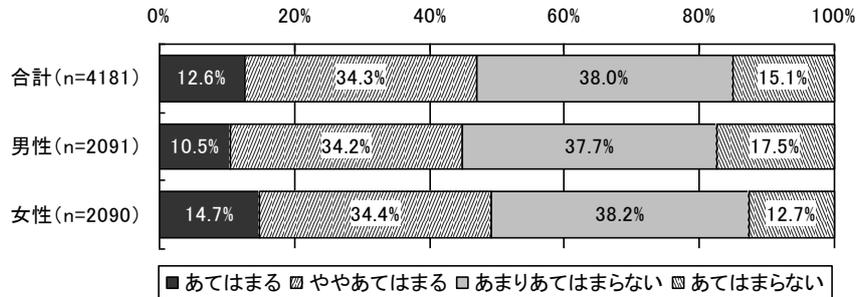
また、あてはまらない（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）との回答が多いのは、「死後の世界で自分がどうなるのかと、とても悩んでいる」（87.7%）、「心臓病の発作が起こることを非常に心配している」（80.0%）、「死についてほとんど考えたことがない」（68.6%）、「人生がどんなに短いかということをよく考える」（64.4%）「死体を見ると非常に怖い」（59.4%）の順となっており、全体的には死を必要以上に深刻に捉えてはいない傾向がみえる。

図表Ⅱ-28 死に関連する意識



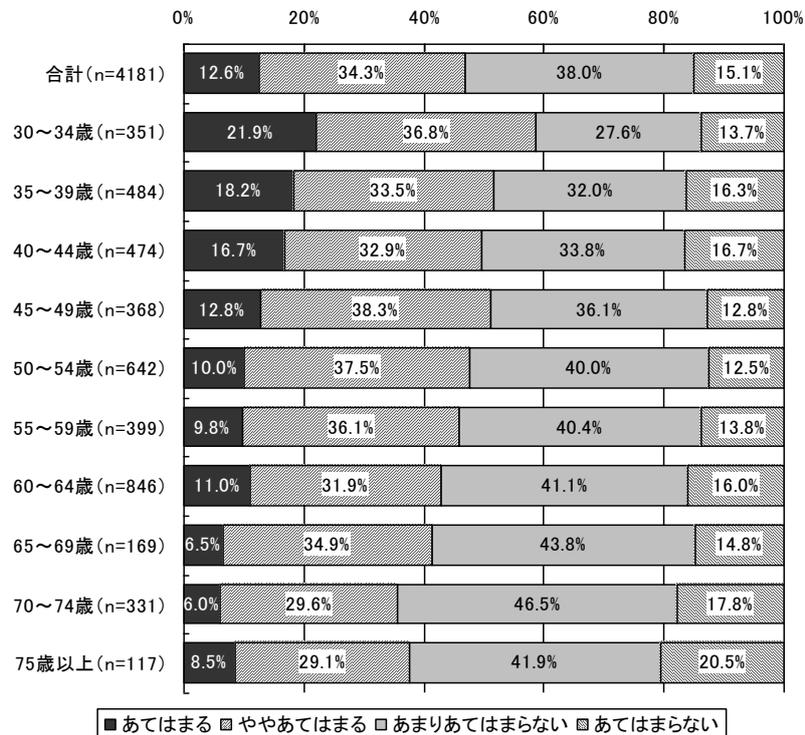
死に関連する意識のうち、「死ぬのがとてもこわい」について男女別に見ると、あてはまる（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）との回答が男性は44.7%、女性は49.1%であり、女性が4.4ポイント高くなった。

図表Ⅱ-29 死に関連する意識：死ぬのがとてもこわい（性別）



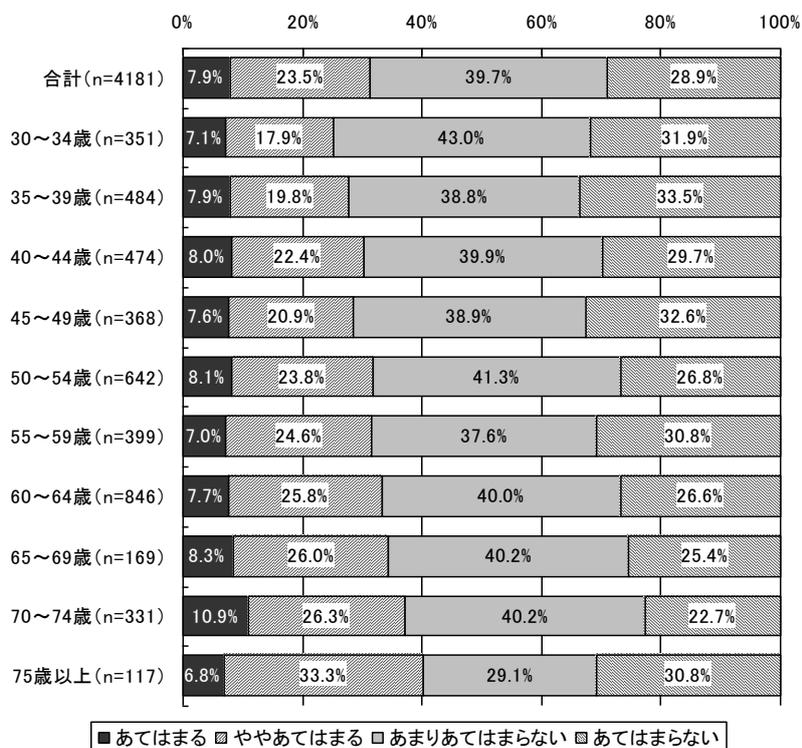
死に関連する意識のうち、「死ぬのがとてもこわい」について年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれて、あてはまらない（「ややあてはまらない」＋「あてはまらない」）との回答が高くなった。

図表Ⅱ-30 死に関連する意識：死ぬのがとてもこわい（年齢別）



死に関連する意識のうち、「死についてほとんど考えたことがない」について年齢別に見ると、7割前後が、あてはまらない（「ややあてはまらない」＋「あてはまらない」）と回答しているが、70～74歳および75歳以上では6割前後と若干低くなっている。

図表Ⅱ-31 死に関連する意識：死についてほとんど考えたことがない（年齢別）



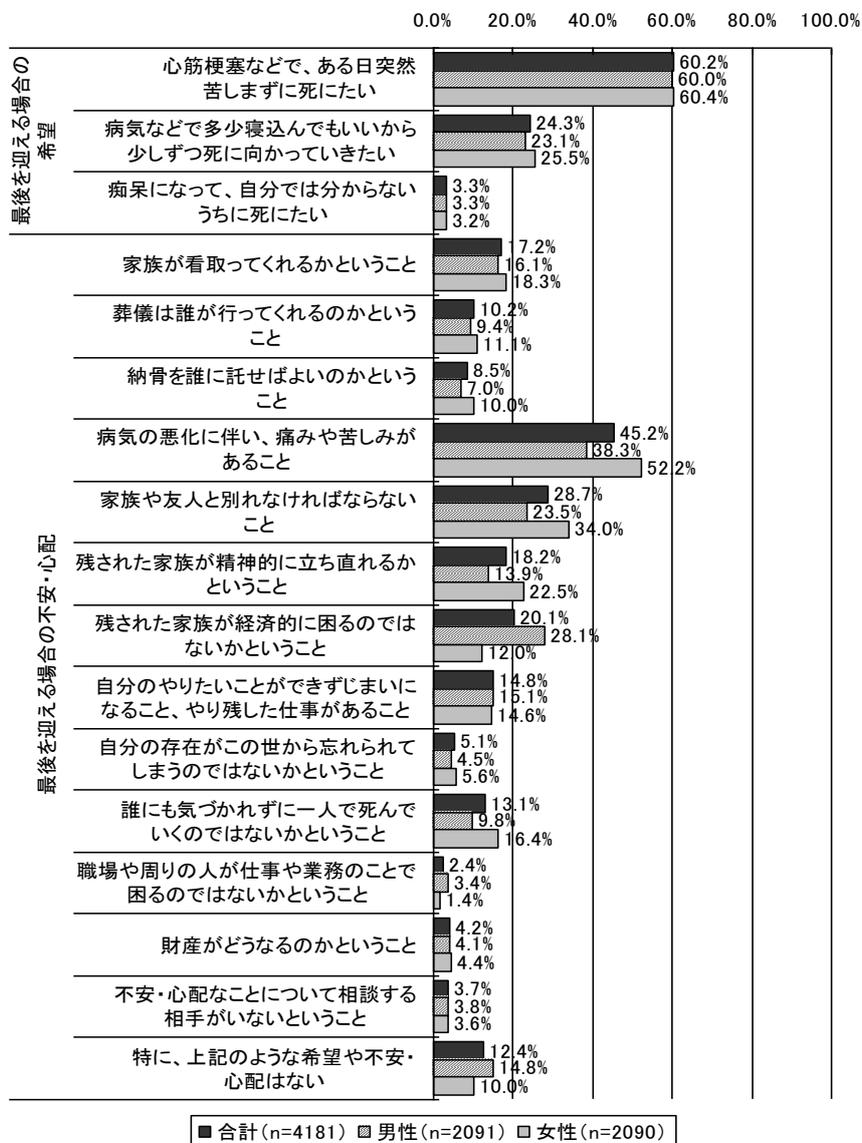
### ③自分自身が最後を迎える場合の希望や不安・心配

自分自身が最期を迎える場合の希望や不安・心配のうち、希望について見ると、男女ともに「心筋梗塞などで、ある日突然苦しまずに死にたい」が約 6 割、「病気などで多少寝込んでもいいから少しずつ死に向かっていきたい」が 2 割強となっている。

不安・心配について見ると、「病気の悪化に伴い、痛みや苦しみがあること」(男性 38.3%、女性 52.2%)、「家族や友人と別れなければならないこと」(男性 23.5%、女性 34.0%)、「残された家族が精神的に立ち直れるかということ」(男性 13.9%、女性 22.5%) が上位に挙げられており、いずれも女性が 10 ポイント前後高い割合となっている。

また、「残された家族が経済的に困るのではないかということ」は、男性が 28.1%、女性が 12.0%と逆転している。

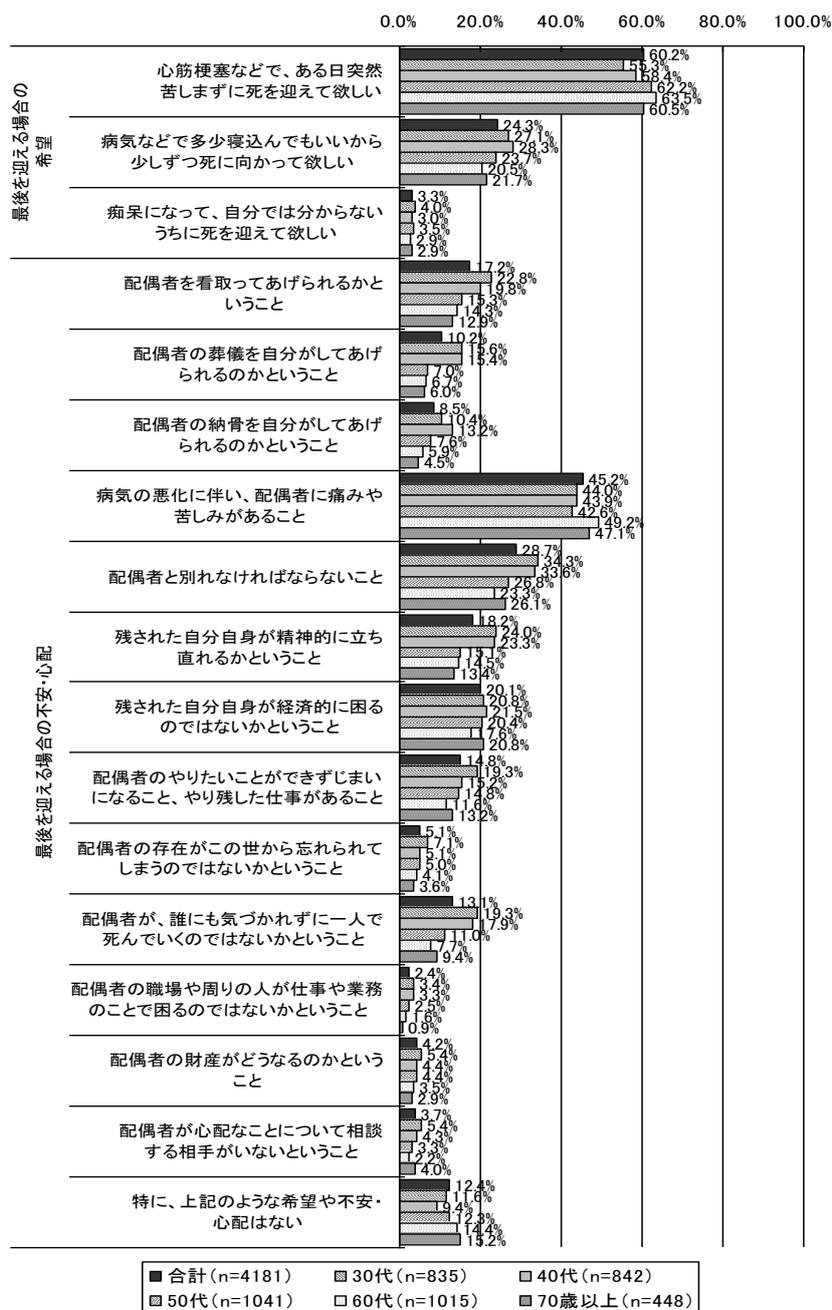
図表Ⅱ-32 自分自身が最後を迎える場合の希望や不安・心配



自分自身が最期を迎える場合の希望や不安・心配のうち、希望について見ると、いずれの年代も「心筋梗塞などで、ある日突然苦しまずに死にたい」が約6割、「病気などで多少寝込んでもいいから少しずつ死に向かっていきたい」が2割強となっている。

不安・心配について見ると、「病気の悪化に伴い、痛みや苦しみがあること」が約5割、「配偶者と別れなければならないこと」が約3割、「残された自分自身が経済的に困るのではないかと」ということが約2割であり、年齢的な差はあまり見られない。

図表Ⅱ-33 自分自身が最後を迎える場合の希望や不安・心配（年齢別）



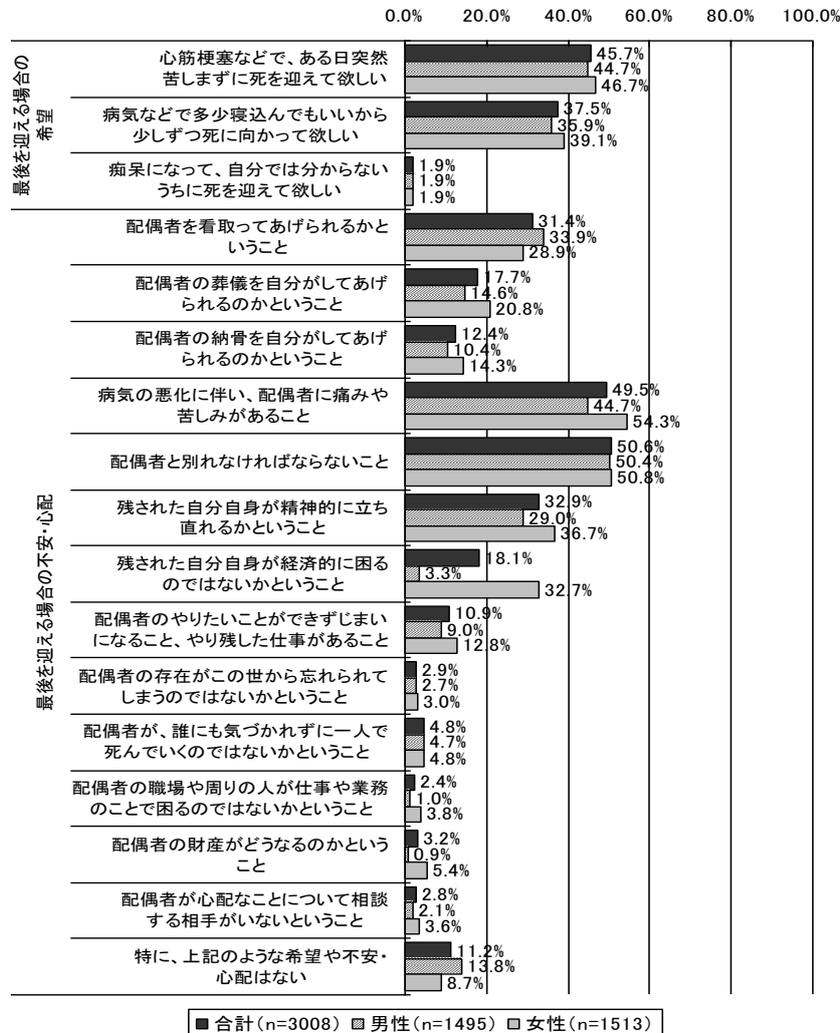
#### ④配偶者が回答者より先に最後を迎える場合の希望や不安・心配

配偶者が回答者より先に最期を迎える場合の希望や不安・心配のうち、希望について男女別に見ると、「心筋梗塞などで、ある日突然苦しまずに死を迎えて欲しい」が男性 44.7%、女性 46.7%、「病気などで多少寝込んでもいいから少しずつ死に向かって欲しい」が男性 35.9%、女性 39.1%となった。

不安・心配について見ると、「配偶者と別れなければならないこと」が男女ともにほぼ半数を占め、次いで「病気の悪化に伴い、配偶者に痛みや苦しみがあること」(男性 44.7%、女性 54.3%)、「残された自分自身が精神的に立ち直れるかということ」(男性 29.0%、女性 36.7%)が続く。いずれも女性が 10 ポイント近く高い割合となった。

また「残された自分自身が経済的に困るのではないかということ」では、男性 3.3%、女性 32.7%と女性が男性の 10 倍近く高い割合となっており、男性に比べて女性の方が不安や心配が多いことがわかる。

図表 II-34 配偶者が回答者より先に最後を迎える場合の希望や不安・心配

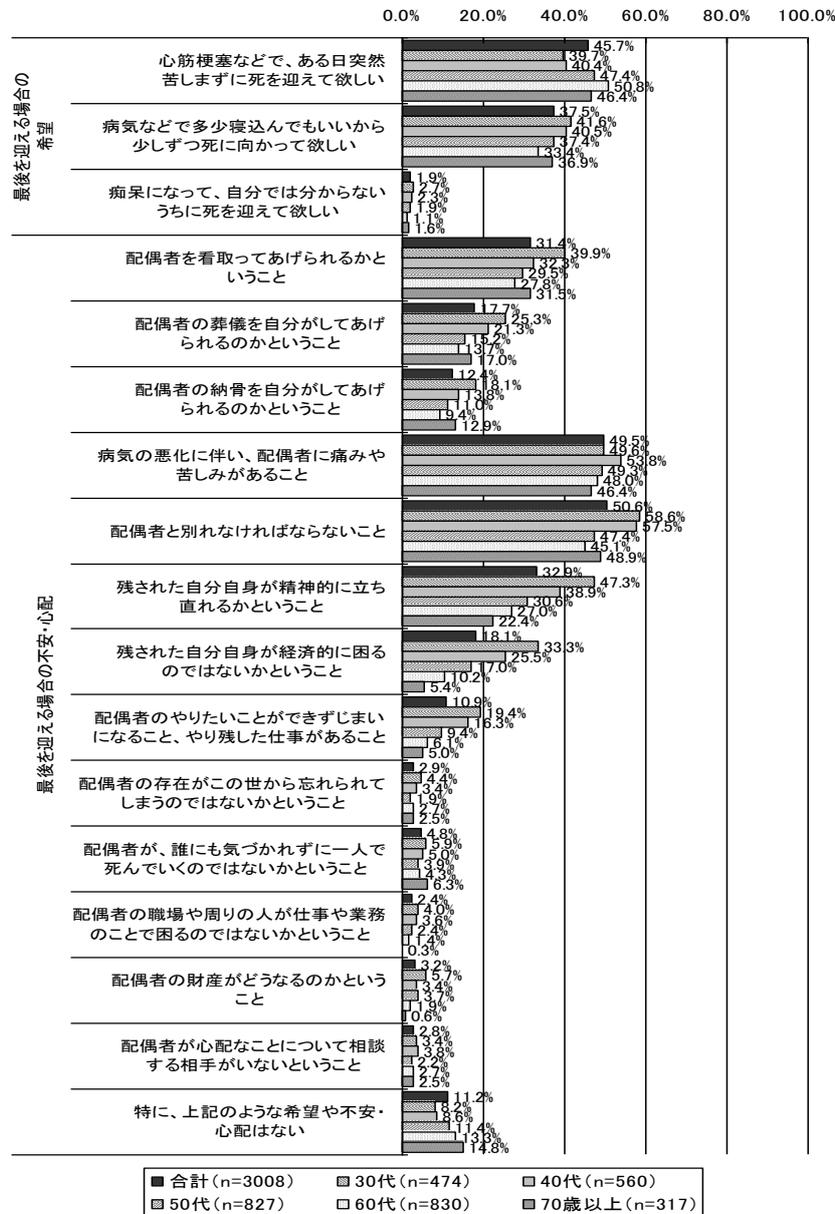


配偶者が回答者より先に最期を迎える場合の希望や不安・心配のうち、希望について年齢別に見ると、50代以上の各年代においては「心筋梗塞などで、ある日突然苦しまずに死を迎えて欲しい」が「病気などで多少寝込んでもいいから少しずつ死に向かって欲しい」よりも10ポイント以上高い割合となっている。

不安・心配について見ると、「病気の悪化に伴い、配偶者に痛みや苦しみがあること」がいずれの年齢においても約5割を占めている。

また、「配偶者と別れなければならないこと」「残された自分自身が精神的に立ち直れるかということ」「残された自分自身が経済的に困るのではないかということ」は、年齢が低くなるにつれて割合が高くなっている。

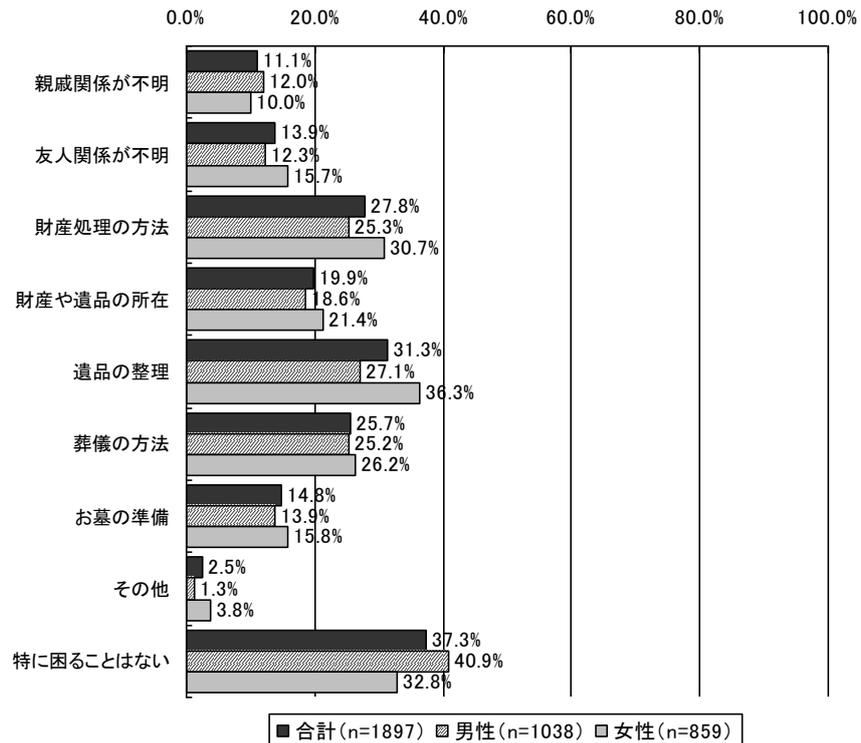
図表II-35 配偶者が回答者より先に最後を迎える場合の希望や不安・心配（年齢別）



### ⑤仮に両親と死別した場合に困ると思うこと

仮に両親と死別した場合に困ると思うことを男女別に見ると、男女ともに「特に困ることはない」(男性 40.9%、女性 32.8%) が最も多く、次いで「遺品の整理」(男性 27.1%、女性 36.3%)、「財産処理の方法」(男性 25.3%、女性 30.7%)、「葬儀の方法」(40.9%、女性 32.8%) となった。

図表Ⅱ-36 両親と死別した場合に困ると思うこと



両親と死別した場合に困ると思うことを年齢別に見ると、いずれの年齢においても「財産処理の方法」「遺品の整理」「葬儀の方法」が上位を占めるが、特に年齢が低くなるにつれて割合が高くなっている。同様の傾向は「親戚関係が不明」「友人関係が不明」にも見られ、特に50～54歳を境に顕著な変化を見せている。

全体的に高い割合を示している「特に困ることはない」は、30～44歳では2割程度だが、年齢が高くなるにつれて割合が高くなっている。

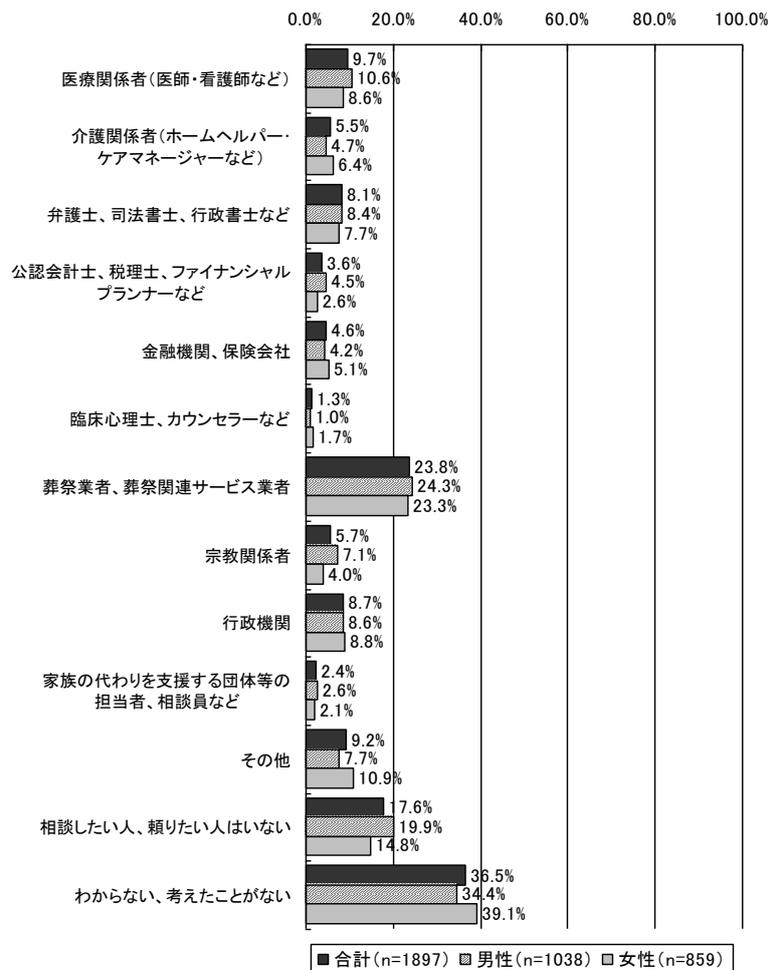
図表Ⅱ-37 両親と死別した場合に困ると思うこと（年齢別）

		合計	親戚関係が不明	友人関係が不明	財産処理の方法	財産や遺品の所在	遺品の整理	葬儀の方法	お墓の準備	その他	特に困ることはない
年齢別	合計	1897	211	263	527	377	593	487	280	47	707
		100.0%	11.1%	13.9%	27.8%	19.9%	31.3%	25.7%	14.8%	2.5%	37.3%
	30～34歳	217	36	46	87	63	73	84	50	12	48
		100.0%	16.6%	21.2%	40.1%	29.0%	33.6%	38.7%	23.0%	5.5%	22.1%
	35～39歳	316	51	69	102	69	114	110	76	8	86
		100.0%	16.1%	21.8%	32.3%	21.8%	36.1%	34.8%	24.1%	2.5%	27.2%
	40～44歳	286	33	44	90	76	100	91	56	7	80
		100.0%	11.5%	15.4%	31.5%	26.6%	35.0%	31.8%	19.6%	2.4%	28.0%
	45～49歳	186	32	38	64	53	65	50	26	4	56
		100.0%	17.2%	20.4%	34.4%	28.5%	34.9%	26.9%	14.0%	2.2%	30.1%
	50～54歳	318	26	31	86	58	106	68	30	5	125
		100.0%	8.2%	9.7%	27.0%	18.2%	33.3%	21.4%	9.4%	1.6%	39.3%
	55～59歳	156	12	13	33	23	47	33	12	3	72
		100.0%	7.7%	8.3%	21.2%	14.7%	30.1%	21.2%	7.7%	1.9%	46.2%
	60～64歳	339	16	17	53	26	71	43	27	6	190
		100.0%	4.7%	5.0%	15.6%	7.7%	20.9%	12.7%	8.0%	1.8%	56.0%
	65～69歳	43	3	3	6	5	9	5	3	1	28
		100.0%	7.0%	7.0%	14.0%	11.6%	20.9%	11.6%	7.0%	2.3%	65.1%
	70～74歳	27	1	2	6	3	5	2	0	1	17
		100.0%	3.7%	7.4%	22.2%	11.1%	18.5%	7.4%	0.0%	3.7%	63.0%
75歳以上	9	1	0	0	1	3	1	0	0	5	
	100.0%	11.1%	0.0%	0.0%	11.1%	33.3%	11.1%	0.0%	0.0%	55.6%	

## ⑥両親と死別した場合、家族以外で相談するであろう人、頼るであろう人

両親と死別した場合、家族以外で相談するであろう人、頼るであろう人を男女別に見ると、男女ともに「わからない、考えたことがない」（男性 34.4%、女性 39.1%）が最も多く、次いで「葬祭業者、葬祭関連サービス業者」（男性 24.3%、女性 23.3%）、「相談したい人、頼りたい人はいない」（男性 19.9%、女性 14.8%）となった。

図表Ⅱ-38 両親と死別した場合、家族以外で相談するであろう人、頼るであろう人



両親と死別した場合、家族以外で相談するであろう人、頼るであろう人を年齢別に見ると、いずれの年齢においても「わからない、考えたことがない」「葬祭業者、葬祭関連サービス業者」「相談したい人、頼りたい人はいない」が上位を占めるが、30歳代、40歳代では「行政機関」「医療関係者（医師・看護師など）」との回答も1割程度見られる。

図表 II-39 両親と死別した場合、家族以外で相談するであろう人、頼るであろう人

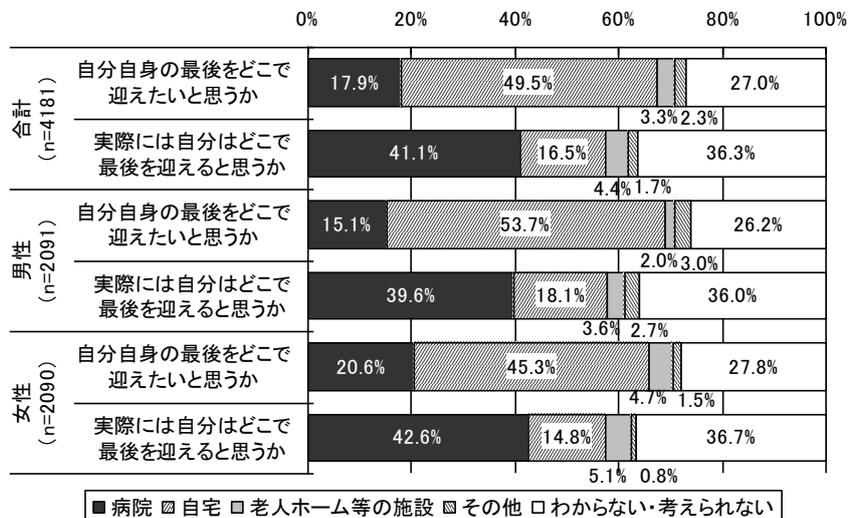
	合計	医療関係者(医師・看護師など)	介護関係者(ホームヘルパー・ケアマネジャーなど)	弁護士、司法書士、行政書士など	公認会計士、ファイナンシャルプランナーなど	金融機関、保険会社	臨床心理士、カウンセラーなど	葬祭業者、葬祭関連サービス業者	宗教関係者	行政機関	家族の代わりに支援する団体等、相談員など	その他	相談したい人、頼りたい人はいない	わからない、考えたことがない	
年齢別	合計	1897	184	104	153	69	88	25	452	108	165	45	174	334	693
		100.0%	9.7%	5.5%	8.1%	3.6%	4.6%	1.3%	23.8%	5.7%	8.7%	2.4%	9.2%	17.6%	36.5%
	30~34歳	217	26	7	15	8	15	5	78	11	26	8	17	24	77
		100.0%	12.0%	3.2%	6.9%	3.7%	6.9%	2.3%	35.9%	5.1%	12.0%	3.7%	7.8%	11.1%	35.5%
	35~39歳	316	30	9	24	9	22	4	82	14	32	8	22	40	136
		100.0%	9.5%	2.8%	7.6%	2.8%	7.0%	1.3%	25.9%	4.4%	10.1%	2.5%	7.0%	12.7%	43.0%
	40~44歳	286	31	11	18	5	12	4	73	18	32	7	29	28	133
		100.0%	10.8%	3.8%	6.3%	1.7%	4.2%	1.4%	25.5%	6.3%	11.2%	2.4%	10.1%	9.8%	46.5%
	45~49歳	186	23	6	22	7	10	3	45	12	24	4	16	32	63
		100.0%	12.4%	3.2%	11.8%	3.8%	5.4%	1.6%	24.2%	6.5%	12.9%	2.2%	8.6%	17.2%	33.9%
	50~54歳	318	28	26	23	13	11	3	68	19	19	4	32	55	110
		100.0%	8.8%	8.2%	7.2%	4.1%	3.5%	0.9%	21.4%	6.0%	6.0%	1.3%	10.1%	17.3%	34.6%
	55~59歳	156	14	13	21	6	4	2	33	10	12	5	19	32	49
		100.0%	9.0%	8.3%	13.5%	3.8%	2.6%	1.3%	21.2%	6.4%	7.7%	3.2%	12.2%	20.5%	31.4%
60~64歳	339	25	23	26	18	10	3	58	16	18	6	34	100	96	
	100.0%	7.4%	6.8%	7.7%	5.3%	2.9%	0.9%	17.1%	4.7%	5.3%	1.8%	10.0%	29.5%	28.3%	
65~69歳	43	4	4	3	3	3	1	10	4	2	1	3	13	17	
	100.0%	9.3%	9.3%	7.0%	7.0%	7.0%	2.3%	23.3%	9.3%	4.7%	2.3%	7.0%	30.2%	39.5%	
70~74歳	27	2	3	1	0	0	0	4	2	0	1	2	8	9	
	100.0%	7.4%	11.1%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	14.8%	7.4%	0.0%	3.7%	7.4%	29.6%	33.3%	
75歳以上	9	1	2	0	0	1	0	1	2	0	1	0	2	3	
	100.0%	11.1%	22.2%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	11.1%	22.2%	0.0%	11.1%	0.0%	22.2%	33.3%	

⑦最後に迎えたい場所・実際に迎えると思う場所

最期を迎えたい場所・実際に迎えると思う場所について男女別に見ると、「自分自身の最期をどこで迎えたいか」では、「自宅」が男性 53.7%、女性 45.3%、「病院」が男性 15.1%、女性 20.6%となっており、自宅での最期を希望する男性が女性よりも 10 ポイント高い割合となっている。また、男女ともに 3 割近くが「わからない・考えられない」と回答している。

「実際には自分はどこで最期を迎えると思うか」では、「自宅」が男性 18.1%、女性 14.8%、「病院」が男性 39.6%、女性 42.6%となっており、実際には病院で最期を迎えると思っている人が、病院での最期を希望する人の 2 倍以上の割合となっている。また、男女ともに 4 割近くが「わからない・考えられない」と回答している。

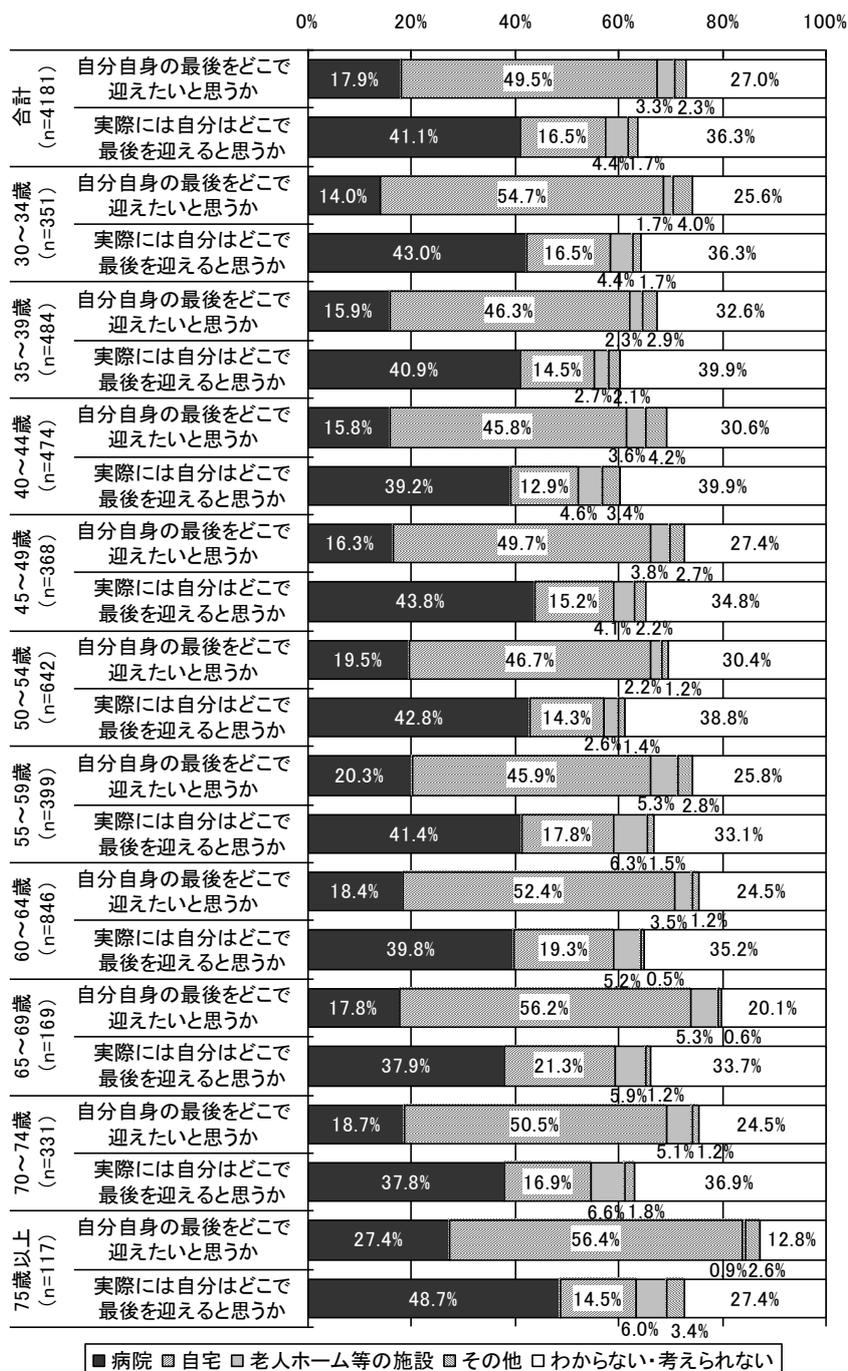
図表 II-40 最後に迎えたい場所・実際に迎えると思う場所



自分自身が最期を迎えたい場所について年齢別に見ると、いずれの年齢においても約5割が「自宅」で最期を迎えたいと希望しているが、実際には「自宅」で最期を迎えると思っている人は2割前後である。

「病院」で最期を迎えたいと希望している人は、いずれの年齢においても2割程度だが、実際に「病院」で最期を迎えると思っている人は約2倍で、4割前後となっている。

図表Ⅱ-41 自分自身が最後を迎える場所（年齢別）



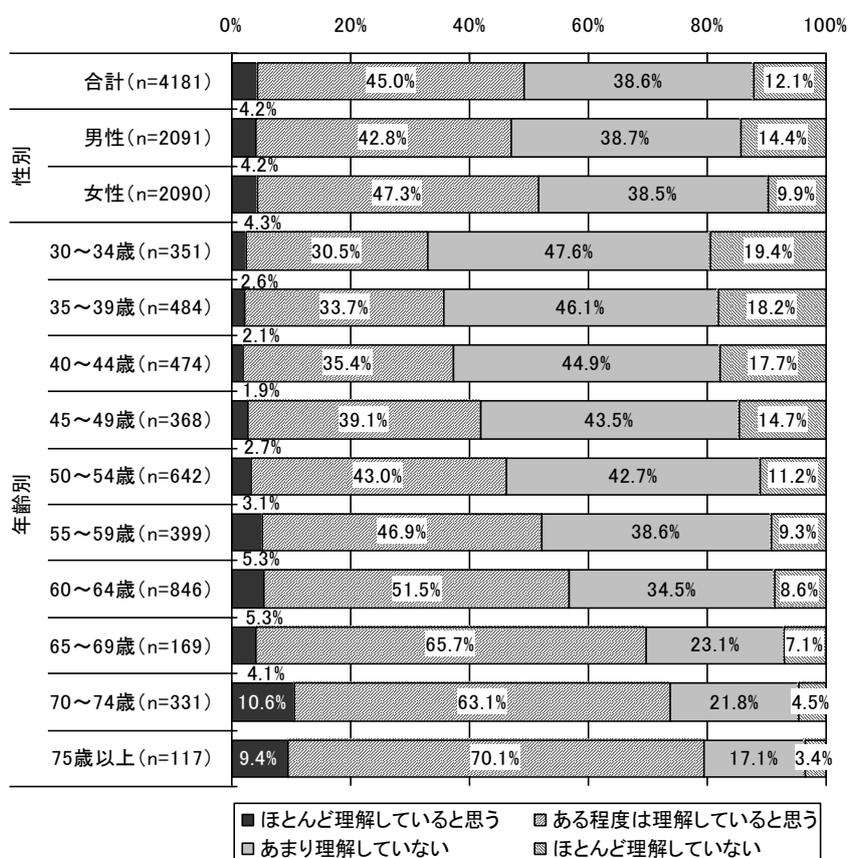
### (3) 生前準備に関する意識と行動

#### ①必要な「生前準備」の理解度

必要な「生前準備」の理解度について見ると、男女別では「ある程度は理解していると思う」(男性 42.8%、女性 47.3%)、「あまり理解していない」(男性 38.7%、女性 38.5%) となっている。

年齢別では、年齢が低くなるにつれて「ある程度は理解していると思う」の割合が高くなっている。30代、40代では2割近くを占める「ほとんど理解していない」も50代以上では1割を切るようになっている。

図表 II-42 必要な「生前準備」の理解度



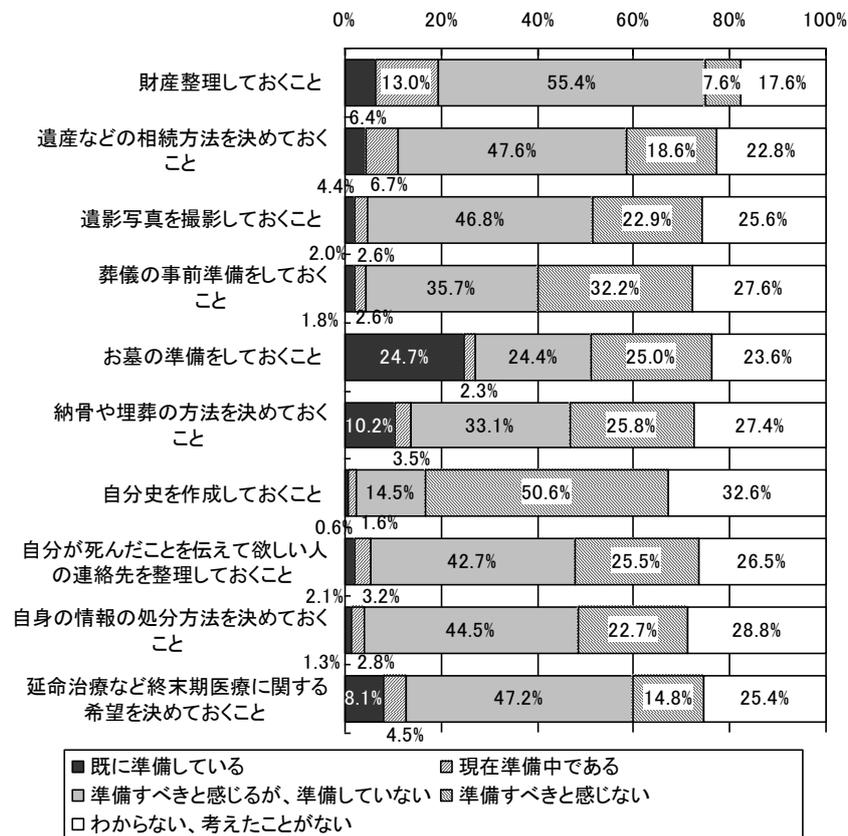
## ②生前準備の実態

生前準備の実態について見ると、「準備すべきと感じるが、準備していない」こととしては、「財産整理しておくこと」「遺産などの相続方法を決めておくこと」「遺影写真を撮影しておくこと」「延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと」が約5割、「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」「自身の情報の処分方法を決めておくこと」が約4割となっている。

「準備すべきと感じない」こととしては、「自分史を作成しておくこと」が約5割、「葬儀の事前準備をしておくこと」「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」が約3割となっている。

また、「既に準備している」こととしては、「お墓の準備をしておくこと」(24.7%)、「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」(10.2%)、「延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと」(8.1%)が挙げられている。

図表Ⅱ-43 生前準備の実態



生前準備の実態について男女別に見ると、特に「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」「自身の情報の処分方法を決めておくこと」「延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと」では、男性よりも女性の方が「準備すべきと感じるが、準備していない」との回答が10ポイント前後高くなっており、「準備すべきとは感じない」との回答は、男性の方が7ポイント前後高くなっている。

図表Ⅱ-44 生前準備の実態（性別）

	財産を整理しておくこと						遺産などの相続方法を決めておくこと					
	合計		男性		女性		合計		男性		女性	
合計	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%
既に準備している	268	6.4%	139	6.6%	129	6.2%	182	4.4%	84	4.0%	98	4.7%
現在準備中である	545	13.0%	256	12.2%	289	13.8%	279	6.7%	147	7.0%	132	6.3%
準備すべきと感じるが、準備していない	2316	55.4%	1122	53.7%	1194	57.1%	1991	47.6%	996	47.6%	995	47.6%
準備すべきと感じない	316	7.6%	166	7.9%	150	7.2%	777	18.6%	359	17.2%	418	20.0%
わからない、考えたことがない	736	17.6%	408	19.5%	328	15.7%	952	22.8%	505	24.2%	447	21.4%

	遺影写真を撮影しておくこと						葬儀の事前準備をしておくこと					
	合計		男性		女性		合計		男性		女性	
合計	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%
既に準備している	85	2.0%	39	1.9%	46	2.2%	77	1.8%	37	1.8%	40	1.9%
現在準備中である	110	2.6%	45	2.2%	65	3.1%	109	2.6%	47	2.2%	62	3.0%
準備すべきと感じるが、準備していない	1957	46.8%	883	42.2%	1074	51.4%	1494	35.7%	692	33.1%	802	38.4%
準備すべきと感じない	957	22.9%	520	24.9%	437	20.9%	1345	32.2%	704	33.7%	641	30.7%
わからない、考えたことがない	1072	25.6%	604	28.9%	468	22.4%	1156	27.6%	611	29.2%	545	26.1%

	お墓の準備をしておくこと						納骨や埋葬の方法を決めておくこと					
	合計		男性		女性		合計		男性		女性	
合計	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%
既に準備している	1031	24.7%	570	27.3%	461	22.1%	427	10.2%	211	10.1%	216	10.3%
現在準備中である	95	2.3%	46	2.2%	49	2.3%	146	3.5%	67	3.2%	79	3.8%
準備すべきと感じるが、準備していない	1020	24.4%	475	22.7%	545	26.1%	1386	33.1%	638	30.5%	748	35.8%
準備すべきと感じない	1047	25.0%	480	23.0%	567	27.1%	1077	25.8%	571	27.3%	506	24.2%
わからない、考えたことがない	988	23.6%	520	24.9%	468	22.4%	1145	27.4%	604	28.9%	541	25.9%

	自分史を作成しておくこと						自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと					
	合計		男性		女性		合計		男性		女性	
合計	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%
既に準備している	26	0.6%	14	0.7%	12	0.6%	89	2.1%	47	2.2%	42	2.0%
現在準備中である	68	1.6%	41	2.0%	27	1.3%	132	3.2%	67	3.2%	65	3.1%
準備すべきと感じるが、準備していない	608	14.5%	315	15.1%	293	14.0%	1785	42.7%	782	37.4%	1003	48.0%
準備すべきと感じない	2115	50.6%	1002	47.9%	1113	53.3%	1065	25.5%	586	28.0%	479	22.9%
わからない、考えたことがない	1364	32.6%	719	34.4%	645	30.9%	1110	26.5%	609	29.1%	501	24.0%

	自身の情報の処分方法を決めておくこと						延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと					
	合計		男性		女性		合計		男性		女性	
合計	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%	4181	100.0%	2091	100.0%	2090	100.0%
既に準備している	53	1.3%	24	1.1%	29	1.4%	339	8.1%	139	6.6%	200	9.6%
現在準備中である	118	2.8%	60	2.9%	58	2.8%	189	4.5%	80	3.8%	109	5.2%
準備すべきと感じるが、準備していない	1860	44.5%	804	38.5%	1056	50.5%	1972	47.2%	877	41.9%	1095	52.4%
準備すべきと感じない	947	22.7%	550	26.3%	397	19.0%	618	14.8%	406	19.4%	212	10.1%
わからない、考えたことがない	1203	28.8%	653	31.2%	550	26.3%	1063	25.4%	589	28.2%	474	22.7%

生前準備の実態を年齢別に見ると、「準備すべきと感じるが、準備していない」との回答が多かった項目のうち、「遺産などの相続方法を決めておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」「自身の情報の処分方法を決めておくこと」については、年齢が高くなるにつれて回答割合も高くなっている。

「準備すべきと感じない」との回答が多かった「自分史を作成しておくこと」「葬儀の事前準備をしておくこと」「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」については、70歳以上の回答割合が他に比べて低くなっている。

また、「既に準備している」との回答が多かった項目のうち「お墓の準備をしておくこと」については、特に年齢が高くなるにつれて回答割合が顕著に高くなっており、それぞれの年代で10ポイント前後の差が見られる。

図表Ⅱ-45 生前準備の実態（年齢別）

財産を整理しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	268	6.4%	20	2.4%	32	3.8%	51	4.9%	94	9.3%	71	15.8%
現在準備中である	545	13.0%	55	6.6%	79	9.4%	131	12.6%	175	17.2%	105	23.4%
準備すべきと感じるが、準備していない	2316	55.4%	424	50.8%	476	56.5%	616	59.2%	577	56.8%	223	49.8%
準備すべきと感じない	316	7.6%	86	10.3%	62	7.4%	82	7.9%	66	6.5%	20	4.5%
わからない、考えたことがない	736	17.6%	250	29.9%	193	22.9%	161	15.5%	103	10.1%	29	6.5%

遺産などの相続方法を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	182	4.4%	10	1.2%	20	2.4%	40	3.8%	59	5.8%	53	11.8%
現在準備中である	279	6.7%	16	1.9%	36	4.3%	50	4.8%	102	10.0%	75	16.7%
準備すべきと感じるが、準備していない	1991	47.6%	334	40.0%	377	44.8%	535	51.4%	536	52.8%	209	46.7%
準備すべきと感じない	777	18.6%	168	20.1%	165	19.6%	213	20.5%	171	16.8%	60	13.4%
わからない、考えたことがない	952	22.8%	307	36.8%	244	29.0%	203	19.5%	147	14.5%	51	11.4%

遺影写真を撮影しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	85	2.0%	6	0.7%	6	0.7%	14	1.3%	24	2.4%	35	7.8%
現在準備中である	110	2.6%	7	0.8%	8	1.0%	29	2.8%	34	3.3%	32	7.1%
準備すべきと感じるが、準備していない	1957	46.8%	311	37.2%	360	42.8%	521	50.0%	546	53.8%	219	48.9%
準備すべきと感じない	957	22.9%	192	23.0%	202	24.0%	243	23.3%	231	22.8%	89	19.9%
わからない、考えたことがない	1072	25.6%	319	38.2%	266	31.6%	234	22.5%	180	17.7%	73	16.3%

葬儀の事前準備をしておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	77	1.8%	2	0.2%	7	0.8%	23	2.2%	22	2.2%	23	5.1%
現在準備中である	109	2.6%	2	0.2%	10	1.2%	17	1.6%	45	4.4%	35	7.8%
準備すべきと感じるが、準備していない	1494	35.7%	253	30.3%	273	32.4%	377	36.2%	400	39.4%	191	42.6%
準備すべきと感じない	1345	32.2%	246	29.5%	273	32.4%	353	33.9%	344	33.9%	129	28.8%
わからない、考えたことがない	1156	27.6%	332	39.8%	279	33.1%	271	26.0%	204	20.1%	70	15.6%

お墓の準備をしておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	1031	24.7%	66	7.9%	142	16.9%	258	24.8%	348	34.3%	217	48.4%
現在準備中である	95	2.3%	7	0.8%	10	1.2%	20	1.9%	37	3.6%	21	4.7%
準備すべきと感じるが、準備していない	1020	24.4%	237	28.4%	215	25.5%	259	24.9%	227	22.4%	82	18.3%
準備すべきと感じない	1047	25.0%	214	25.6%	225	26.7%	284	27.3%	248	24.4%	76	17.0%
わからない、考えたことがない	988	23.6%	311	37.2%	250	29.7%	220	21.1%	155	15.3%	52	11.6%

納骨や埋葬の方法を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	427	10.2%	28	3.4%	49	5.8%	117	11.2%	126	12.4%	107	23.9%
現在準備中である	146	3.5%	11	1.3%	21	2.5%	32	3.1%	47	4.6%	35	7.8%
準備すべきと感じるが、準備していない	1386	33.1%	249	29.8%	287	34.1%	347	33.3%	364	35.9%	139	31.0%
準備すべきと感じない	1077	25.8%	210	25.1%	208	24.7%	282	27.1%	276	27.2%	101	22.5%
わからない、考えたことがない	1145	27.4%	337	40.4%	277	32.9%	263	25.3%	202	19.9%	66	14.7%

自分史を作成しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	26	0.6%	3	0.4%	2	0.2%	3	0.3%	12	1.2%	6	1.3%
現在準備中である	68	1.6%	7	0.8%	5	0.6%	14	1.3%	21	2.1%	21	4.7%
準備すべきと感じるが、準備していない	608	14.5%	117	14.0%	85	10.1%	151	14.5%	168	16.6%	87	19.4%
準備すべきと感じない	2115	50.6%	377	45.1%	450	53.4%	545	52.4%	530	52.2%	213	47.5%
わからない、考えたことがない	1364	32.6%	331	39.6%	300	35.6%	328	31.5%	284	28.0%	121	27.0%

自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	89	2.1%	4	0.5%	13	1.5%	12	1.2%	34	3.3%	26	5.8%
現在準備中である	132	3.2%	12	1.4%	12	1.4%	31	3.0%	31	3.1%	46	10.3%
準備すべきと感じるが、準備していない	1785	42.7%	330	39.5%	344	40.9%	452	43.4%	462	45.5%	197	44.0%
準備すべきと感じない	1065	25.5%	185	22.2%	212	25.2%	287	27.6%	282	27.8%	99	22.1%
わからない、考えたことがない	1110	26.5%	304	36.4%	261	31.0%	259	24.9%	206	20.3%	80	17.9%

自身の情報の処分方法を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	53	1.3%	5	0.6%	7	0.8%	11	1.1%	16	1.6%	14	3.1%
現在準備中である	118	2.8%	17	2.0%	13	1.5%	22	2.1%	33	3.3%	33	7.4%
準備すべきと感じるが、準備していない	1860	44.5%	348	41.7%	366	43.5%	447	42.9%	474	46.7%	225	50.2%
準備すべきと感じない	947	22.7%	146	17.5%	188	22.3%	266	25.6%	263	25.9%	84	18.8%
わからない、考えたことがない	1203	28.8%	319	38.2%	268	31.8%	295	28.3%	229	22.6%	92	20.5%

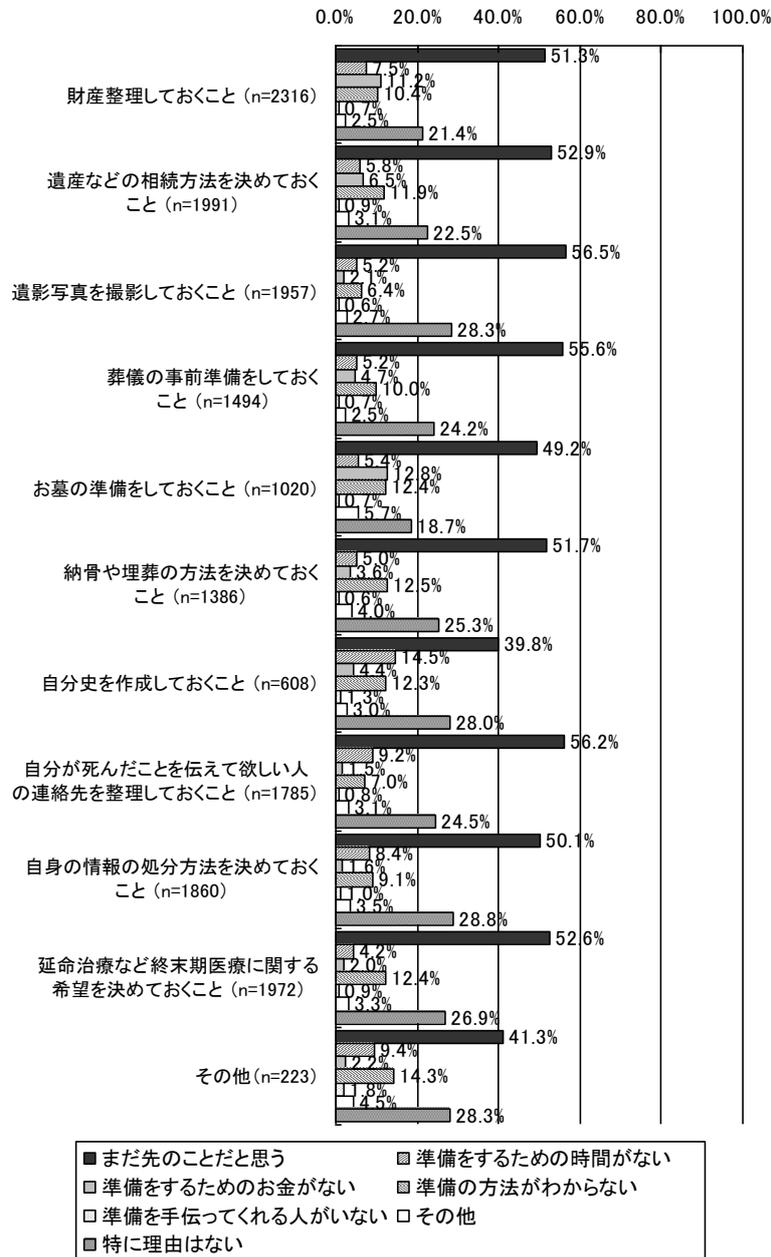
  

延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	4181	100.0%	835	100.0%	842	100.0%	1041	100.0%	1015	100.0%	448	100.0%
既に準備している	339	8.1%	30	3.6%	53	6.3%	77	7.4%	108	10.6%	71	15.8%
現在準備中である	189	4.5%	20	2.4%	30	3.6%	33	3.2%	60	5.9%	46	10.3%
準備すべきと感じるが、準備していない	1972	47.2%	377	45.1%	394	46.8%	522	50.1%	490	48.3%	189	42.2%
準備すべきと感じない	618	14.8%	101	12.1%	112	13.3%	162	15.6%	179	17.6%	64	14.3%
わからない、考えたことがない	1063	25.4%	307	36.8%	253	30.0%	247	23.7%	178	17.5%	78	17.4%

### ③生前準備をしていない理由

生前準備をしていない理由を見ると、いずれの項目においても「まだ先のことだと思う」が約5割を占めている。次いで「準備の方法がわからない」が1割強となっている。

図表Ⅱ-46 生前準備をしていない理由



生前準備をしていない理由を男女別に見ると、いずれの項目も顕著な差は見られないが、「準備の方法がわからない」との回答が12%を超えていた「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」「自分史を作成しておくこと」「延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと」においては、男性よりも女性の方が4ポイント近く高い割合となっている。

図表Ⅱ-47 生前準備をしていない理由（性別）

	財産を整理しておくこと			遺産などの相続方法を決めておくこと		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
合計	2316	1122	1194	1991	996	995
まだ先のことだと思う	1188	564	624	1053	528	525
準備をするための時間がない	174	86	88	116	62	54
準備をするためのお金がない	259	129	130	130	63	67
準備の方法がわからない	240	109	131	236	110	126
準備を手伝ってくれる人がいない	17	8	9	17	8	9
その他	57	28	29	62	29	33
特に理由はない	495	250	245	448	225	223

	遺影写真を撮影しておくこと			葬儀の事前準備をしておくこと		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
合計	1957	883	1074	1494	692	802
まだ先のことだと思う	1106	504	602	831	383	448
準備をするための時間がない	102	47	55	77	36	41
準備をするためのお金がない	41	21	20	70	30	40
準備の方法がわからない	126	56	70	149	69	80
準備を手伝ってくれる人がいない	12	6	6	11	6	5
その他	52	25	27	37	18	19
特に理由はない	554	236	318	362	167	195

	お墓の準備をしておくこと			納骨や埋葬の方法を決めておくこと		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
合計	1020	475	545	1386	638	748
まだ先のことだと思う	502	236	266	717	330	387
準備をするための時間がない	55	22	33	69	32	37
準備をするためのお金がない	131	55	76	50	26	24
準備の方法がわからない	126	55	71	173	67	106
準備を手伝ってくれる人がいない	7	4	3	9	4	5
その他	58	31	27	56	31	25
特に理由はない	191	90	101	351	164	187

	自分史を作成しておくこと			自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
合計	608	315	293	1785	782	1003
まだ先のことだと思う	242	131	111	1004	428	576
準備をするための時間がない	88	40	48	164	66	98
準備をするためのお金がない	27	14	13	27	15	12
準備の方法がわからない	75	33	42	125	56	69
準備を手伝ってくれる人がいない	8	6	2	15	11	4
その他	18	10	8	55	30	25
特に理由はない	170	87	83	438	192	246

	自身の情報の処分方法を決めておくこと			延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと		
	合計	男性	女性	合計	男性	女性
合計	1860	804	1056	1972	877	1095
まだ先のことだと思う	931	389	542	1038	455	583
準備をするための時間がない	157	67	90	83	37	46
準備をするためのお金がない	30	17	13	39	22	17
準備の方法がわからない	169	70	99	244	89	155
準備を手伝ってくれる人がいない	19	13	6	18	12	6
その他	66	28	38	65	28	37
特に理由はない	536	234	302	531	247	284

生前準備をしていない理由を年齢別に見ると、「まだ先のことだと思う」と回答した項目のうち「お墓の準備をしておくこと」については、年齢が低くなるにつれて回答割合が高くなっていく。

「まだ先のことだと思う」と回答した項目のうち「財産を整理しておくこと」「遺産などの相続方法を決めておくこと」「遺影写真を撮影しておくこと」「葬儀の事前準備をしておくこと」「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理し

しておくこと」「自身の情報の処分方法を決めておくこと」「延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと」については、60代のみ回答割合が高くなる傾向にある。

40代・50代では、「自分史を作成しておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」「延命治療など終末期医療に関する希望を決めておくこと」について「準備をするための時間がない」との回答割合が高くなっている。

「財産を整理しておくこと」「遺産などの相続方法を決めておくこと」「遺影写真を撮影しておくこと」「納骨や埋葬の方法を決めておくこと」「自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと」「自身の情報の処分方法を決めておくこと」については、年齢が低くなるにつれて「準備の方法がわからない」との回答割合が高くなっている。

図表 II-48 生前準備をしていない理由（年齢別）

財産を整理しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	2316	100.0%	424	100.0%	476	100.0%	616	100.0%	577	100.0%	223	100.0%
まだ先のことだと思う	1188	51.3%	248	58.5%	249	52.3%	297	48.2%	304	52.7%	90	40.4%
準備をするための時間がない	174	7.5%	22	5.2%	43	9.0%	58	9.4%	41	7.1%	10	4.5%
準備をするためのお金がない	259	11.2%	60	14.2%	65	13.7%	70	11.4%	44	7.6%	20	9.0%
準備の方法がわからない	240	10.4%	67	15.8%	64	13.4%	53	8.6%	41	7.1%	15	6.7%
準備を手伝ってくれる人がいない	17	0.7%	4	0.9%	2	0.4%	5	0.8%	6	1.0%	0	0.0%
その他	57	2.5%	8	1.9%	10	2.1%	16	2.6%	14	2.4%	9	4.0%
特に理由はない	495	21.4%	52	12.3%	73	15.3%	145	23.5%	144	25.0%	81	36.3%

遺産などの相続方法を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	1991	100.0%	334	100.0%	377	100.0%	535	100.0%	536	100.0%	209	100.0%
まだ先のことだと思う	1053	52.9%	206	61.7%	203	53.8%	261	48.8%	298	55.6%	85	40.7%
準備をするための時間がない	116	5.8%	14	4.2%	25	6.6%	41	7.7%	25	4.7%	11	5.3%
準備をするためのお金がない	130	6.5%	29	8.7%	30	8.0%	39	7.3%	20	3.7%	12	5.7%
準備の方法がわからない	236	11.9%	57	17.1%	61	16.2%	56	10.5%	44	8.2%	18	8.6%
準備を手伝ってくれる人がいない	17	0.9%	4	1.2%	4	1.1%	2	0.4%	6	1.1%	1	0.5%
その他	62	3.1%	5	1.5%	8	2.1%	20	3.7%	18	3.4%	11	5.3%
特に理由はない	448	22.5%	43	12.9%	65	17.2%	134	25.0%	131	24.4%	75	35.9%

遺影写真を撮影しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	1957	100.0%	311	100.0%	360	100.0%	521	100.0%	546	100.0%	219	100.0%
まだ先のことだと思う	1106	56.5%	215	69.1%	217	60.3%	275	52.8%	312	57.1%	87	39.7%
準備をするための時間がない	102	5.2%	8	2.6%	27	7.5%	29	5.6%	23	4.2%	15	6.8%
準備をするためのお金がない	41	2.1%	14	4.5%	8	2.2%	10	1.9%	6	1.1%	3	1.4%
準備の方法がわからない	126	6.4%	38	12.2%	28	7.8%	32	6.1%	20	3.7%	8	3.7%
準備を手伝ってくれる人がいない	12	0.6%	2	0.6%	4	1.1%	3	0.6%	2	0.4%	1	0.5%
その他	52	2.7%	5	1.6%	5	1.4%	20	3.8%	11	2.0%	11	5.0%
特に理由はない	554	28.3%	41	13.2%	79	21.9%	162	31.1%	176	32.2%	96	43.8%

葬儀の事前準備しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	1494	100.0%	253	100.0%	273	100.0%	377	100.0%	400	100.0%	191	100.0%
まだ先のことだと思う	831	55.6%	171	67.6%	156	57.1%	199	52.8%	229	57.3%	76	39.8%
準備をするための時間がない	77	5.2%	12	4.7%	19	7.0%	23	6.1%	18	4.5%	5	2.6%
準備をするためのお金がない	70	4.7%	16	6.3%	13	4.8%	25	6.6%	7	1.8%	9	4.7%
準備の方法がわからない	149	10.0%	33	13.0%	41	15.0%	33	8.8%	31	7.8%	11	5.6%
準備を手伝ってくれる人がいない	11	0.7%	2	0.8%	3	1.1%	5	1.3%	1	0.3%	0	0.0%
その他	37	2.5%	5	2.0%	2	0.7%	10	2.7%	10	2.5%	10	5.2%
特に理由はない	362	24.2%	30	11.9%	47	17.2%	94	24.9%	110	27.5%	81	42.4%

お墓の準備しておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	1020	100.0%	237	100.0%	215	100.0%	259	100.0%	227	100.0%	82	100.0%
まだ先のことだと思う	502	49.2%	141	59.5%	114	53.0%	119	45.9%	102	44.9%	26	31.7%
準備をするための時間がない	55	5.4%	11	4.6%	13	6.0%	14	5.4%	12	5.3%	5	6.1%
準備をするためのお金がない	131	12.8%	35	14.8%	31	14.4%	37	14.3%	14	6.2%	14	17.1%
準備の方法がわからない	126	12.4%	37	15.6%	31	14.4%	23	8.9%	28	12.3%	7	8.5%
準備を手伝ってくれる人がいない	7	0.7%	1	0.4%	1	0.5%	2	0.8%	2	0.9%	1	1.2%
その他	58	5.7%	7	3.0%	7	3.3%	18	6.9%	14	6.2%	12	14.6%
特に理由はない	191	18.7%	27	11.4%	28	13.0%	56	21.6%	61	26.9%	19	23.2%

納骨や埋葬の方法を決めておくこと												
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上						
合計	1386	100.0%	249	100.0%	287	100.0%	347	100.0%	364	100.0%	139	100.0%
まだ先のことだと思う	717	51.7%	150	60.2%	154	53.7%	177	51.0%	187	51.4%	49	35.3%
準備をするための時間がない	69	5.0%	10	4.0%	18	6.3%	22	6.3%	15	4.1%	4	2.9%
準備をするためのお金がない	50	3.6%	11	4.4%	9	3.1%	20	5.8%	5	1.4%	5	3.6%
準備の方法がわからない	173	12.5%	44	17.7%	45	15.7%	39	11.2%	33	9.1%	12	8.6%
準備を手伝ってくれる人がいない	9	0.6%	1	0.4%	1	0.3%	2	0.6%	3	0.8%	2	1.4%
その他	56	4.0%	9	3.6%	8	2.8%	13	3.7%	16	4.4%	10	7.2%
特に理由はない	351	25.3%	36	14.5%	61	21.3%	85	24.5%	111	30.5%	58	41.7%

図表Ⅱ-49 生前準備をしていない理由（年齢別） 続き

自分史を作成しておくこと										
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上				
合計	608	100.0%	117	100.0%	85	100.0%	151	100.0%	168	100.0%
まだ先のことだと思う	242	39.8%	53	45.3%	34	40.0%	71	47.0%	66	39.3%
準備をするための時間がない	88	14.5%	9	7.7%	19	22.4%	17	11.3%	27	16.1%
準備をするためのお金がない	27	4.4%	9	7.7%	2	2.4%	10	6.6%	4	2.4%
準備の方法がわからない	75	12.3%	23	19.7%	15	17.6%	14	9.3%	19	11.3%
準備を手伝ってくれる人がいない	8	1.3%	1	0.9%	1	1.2%	1	0.7%	3	1.8%
その他	18	3.0%	3	2.6%	2	2.4%	4	2.6%	3	1.8%
特に理由はない	170	28.0%	26	22.2%	15	17.6%	38	25.2%	51	30.4%

自分が死んだことを伝えて欲しい人の連絡先を整理しておくこと										
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上				
合計	1785	100.0%	330	100.0%	344	100.0%	452	100.0%	462	100.0%
まだ先のことだと思う	1004	56.2%	220	66.7%	190	55.2%	248	54.9%	257	55.6%
準備をするための時間がない	164	9.2%	21	6.4%	38	11.0%	50	11.1%	39	8.4%
準備をするためのお金がない	27	1.5%	9	2.7%	4	1.2%	11	2.4%	2	0.4%
準備の方法がわからない	125	7.0%	38	11.5%	29	8.4%	29	6.4%	22	4.8%
準備を手伝ってくれる人がいない	15	0.8%	4	1.2%	3	0.9%	4	0.9%	2	0.4%
その他	55	3.1%	6	1.8%	12	3.5%	10	2.2%	14	3.0%
特に理由はない	438	24.5%	45	13.6%	78	22.7%	114	25.2%	131	28.4%

自身の情報の処分方法を決めておくこと										
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上				
合計	1860	100.0%	348	100.0%	366	100.0%	447	100.0%	474	100.0%
まだ先のことだと思う	931	50.1%	210	60.3%	186	50.8%	214	47.9%	237	50.0%
準備をするための時間がない	157	8.4%	31	8.9%	35	9.6%	40	8.9%	30	6.3%
準備をするためのお金がない	30	1.6%	10	2.9%	5	1.4%	9	2.0%	3	0.6%
準備の方法がわからない	169	9.1%	52	14.9%	41	11.2%	40	8.9%	26	5.5%
準備を手伝ってくれる人がいない	19	1.0%	6	1.7%	3	0.8%	7	1.6%	2	0.4%
その他	66	3.5%	14	4.0%	15	4.1%	16	3.6%	9	1.9%
特に理由はない	536	28.8%	48	13.8%	91	24.9%	132	29.5%	170	35.9%

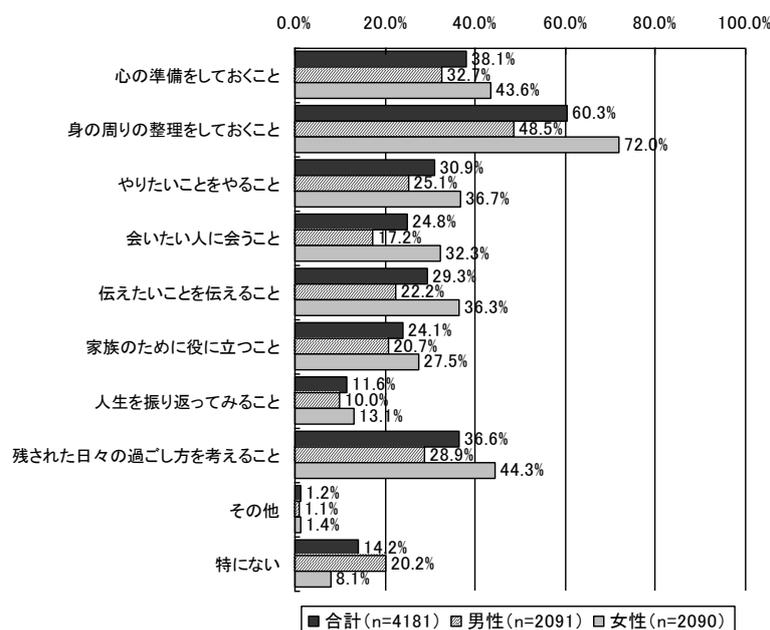
延命利用など終末期医療に関する希望を決めておくこと										
	合計	30代	40代	50代	60代	70歳以上				
合計	1972	100.0%	377	100.0%	394	100.0%	522	100.0%	490	100.0%
まだ先のことだと思う	1038	52.6%	242	64.2%	208	52.8%	262	50.2%	254	51.8%
準備をするための時間がない	83	4.2%	8	2.1%	26	6.6%	32	6.1%	12	2.4%
準備をするためのお金がない	39	2.0%	11	2.9%	9	2.3%	11	2.1%	6	1.2%
準備の方法がわからない	244	12.4%	61	16.2%	52	13.2%	66	12.6%	46	9.4%
準備を手伝ってくれる人がいない	18	0.9%	4	1.1%	2	0.5%	6	1.1%	2	0.4%
その他	65	3.3%	11	2.9%	14	3.6%	19	3.6%	14	2.9%
特に理由はない	531	26.9%	57	15.1%	91	23.1%	140	26.8%	161	32.9%

#### ④自分自身が死の直前に備えておきたいと感じること

自分自身が死の直前に備えておきたいと感じることを男女別に見ると、男性では「心の準備をしておくこと」が32.7%と最も多く、次いで「残された日々の過ごし方を考えること」(28.9%)、「やりたいことをやること」(25.1%)、「伝えることを伝えること」(22.2%)となっている。

女性では、「身の回りの整理をしておくこと」が72.0%と最も多く、次いで「残された日々の過ごし方を考えること」(44.3%)、「心の準備をしておくこと」(43.6%)、「やりたいことをやること」(36.7%)となっている。

図表Ⅱ-50 自分自身が死の直前に備えておきたいと感じること



自分自身が死の直前に備えておきたいと感じることを年齢別に見ると、全体的に、年齢が低いほど死の直前に備えておきたいと感じる項目が増えていくが、いずれの年齢においても「身の周りの整理をしておくこと」が6割前後と最も多く、「心の準備をしておくこと」も4割前後と高くなっている。

75歳以上では、「伝えたいことを伝えること」が30.8%となっており、30代・40代に次いで高い割合となっている。

図表Ⅱ-51 自分自身が死の直前に備えておきたいと感じること（年齢別）

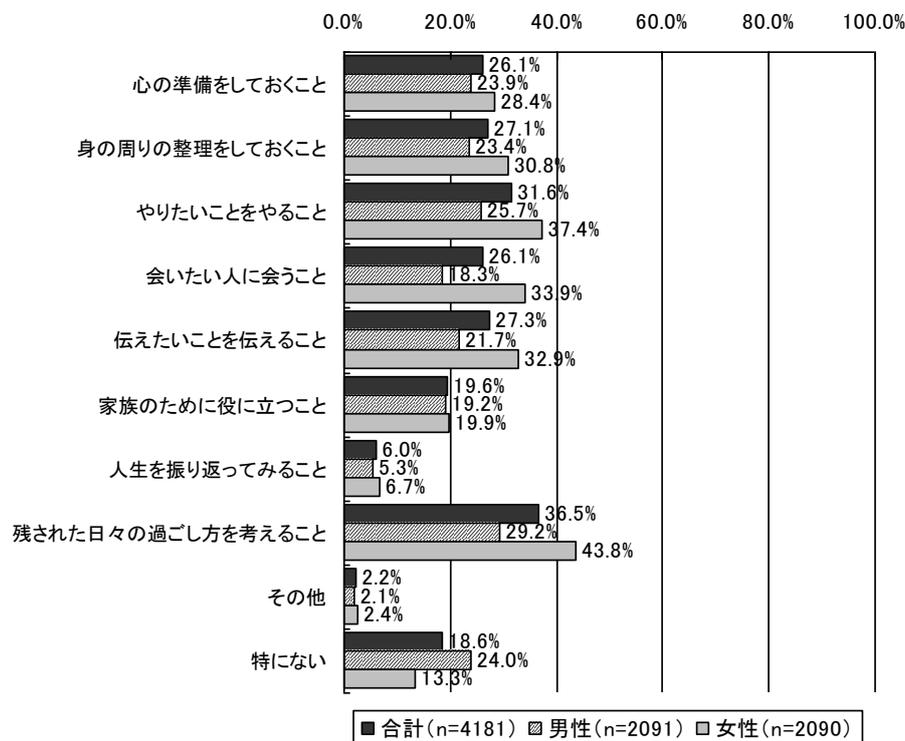
		合計	心の準備をしておくこと	身の周りの整理をしておくこと	やりたいことをやること	会いたい人に会うこと	伝えたいことを伝えること	家族のために役に立つこと	人生を振り返ってみること	残された日々の過ごし方を考えること	その他	特にない
年齢別	合計	4181	1595	2520	1291	1036	1223	1007	483	1529	52	593
		100.0%	38.1%	60.3%	30.9%	24.8%	29.3%	24.1%	11.6%	36.6%	1.2%	14.2%
	30～34歳	351	172	206	165	147	145	136	80	148	7	41
		100.0%	49.0%	58.7%	47.0%	41.9%	41.3%	38.7%	22.8%	42.2%	2.0%	11.7%
	35～39歳	484	204	274	187	163	159	131	77	181	8	80
		100.0%	42.1%	56.6%	38.6%	33.7%	32.9%	27.1%	15.9%	37.4%	1.7%	16.5%
	40～44歳	474	205	282	177	142	161	145	61	203	12	59
		100.0%	43.2%	59.5%	37.3%	30.0%	34.0%	30.6%	12.9%	42.8%	2.5%	12.4%
	45～49歳	368	150	229	130	97	117	93	41	140	2	54
		100.0%	40.8%	62.2%	35.3%	26.4%	31.8%	25.3%	11.1%	38.0%	0.5%	14.7%
	50～54歳	642	212	377	214	158	177	162	71	235	7	89
		100.0%	33.0%	58.7%	33.3%	24.6%	27.6%	25.2%	11.1%	36.6%	1.1%	13.9%
	55～59歳	399	124	234	101	80	100	71	36	133	6	70
		100.0%	31.1%	58.6%	25.3%	20.1%	25.1%	17.8%	9.0%	33.3%	1.5%	17.5%
	60～64歳	846	292	525	195	145	205	148	73	300	6	123
		100.0%	34.5%	62.1%	23.0%	17.1%	24.2%	17.5%	8.6%	35.5%	0.7%	14.5%
65～69歳	169	76	105	42	40	45	40	18	60	1	19	
	100.0%	45.0%	62.1%	24.9%	23.7%	26.6%	23.7%	10.7%	35.5%	0.6%	11.2%	
70～74歳	331	122	212	55	46	78	57	20	95	2	51	
	100.0%	36.9%	64.0%	16.6%	13.9%	23.6%	17.2%	6.0%	28.7%	0.6%	15.4%	
75歳以上	117	38	76	25	18	36	24	6	34	1	7	
	100.0%	32.5%	65.0%	21.4%	15.4%	30.8%	20.5%	5.1%	29.1%	0.9%	6.0%	

### ⑤介護等を行う必要がある家族に対して死の直前にしてあげたいと感じること

介護等を行う必要がある家族に対して死の直前にしてあげたいと感じることを男女別に見ると、男性では、「残された日々の過ごし方を考えること」が 29.2%と最も多く、次いで「やりたいことをやること」(25.7%)、「心の準備をしておくこと」(23.9%)、「身の回りの整理をしておくこと」(23.4%)となっている。

女性では、「残された日々の過ごし方を考えること」が 43.8%と最も多く、次いで「やりたいことをやること」(37.4%)、「会いたい人に会うこと」(33.9%)、「伝えたいことを伝えること」(32.9%)となっている。なお、男性では「特にない」との回答が 24.0%となっており、女性の2倍近くの割合となった。

図表II-52 介護を行う必要がある家族に対して死の直前にしてあげたいと感じること



介護を行う必要がある家族に対して死の直前にしてあげたいと感じることを年齢別に見ると、いずれの年齢においても「残された日々の過ごし方を考えること」が上位を占めているが、特に30～54歳では「やりたいことをやること」、55～75歳以上では「心の準備をしておくこと」との回答割合が高くなっている。

また30～34歳と75歳以上では、他の項目に比べて「伝えたいことを伝えること」の回答割合が高く、同様に65～69歳と70～74歳では「身の回りの整理をしておくこと」が高くなっている。

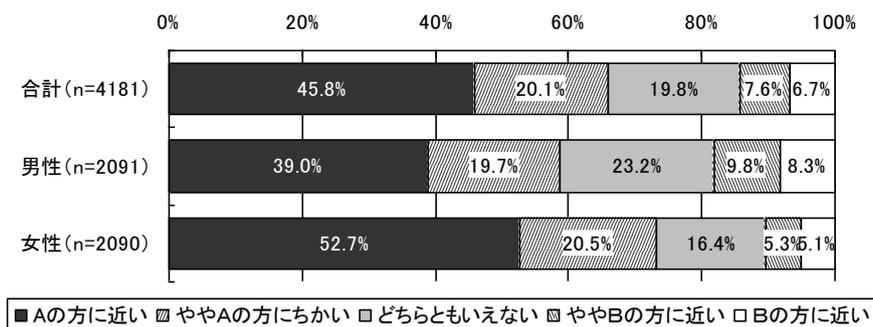
図表Ⅱ-53 介護を行う必要がある家族に対して死の直前にしてあげたいと感じること  
(年齢別)

		合計	心の準備 をしておくこと	身の周り の整理を しておくこと	やりたい ことをやること	会いたい 人に会うこと	伝えたい ことを伝えること	家族のため に役に立つこと	人生を振り返って みること	残された 日々の過 ごし方を 考えること	その他	特にな い
年齢別	合計	4181	1093	1134	1320	1092	1140	818	250	1525	93	778
		100.0%	26.1%	27.1%	31.6%	26.1%	27.3%	19.6%	6.0%	36.5%	2.2%	18.6%
	30～34歳	351	116	120	168	135	141	104	42	130	5	50
		100.0%	33.0%	34.2%	47.9%	38.5%	40.2%	29.6%	12.0%	37.0%	1.4%	14.2%
	35～39歳	484	131	138	205	155	152	105	45	194	14	81
		100.0%	27.1%	28.5%	42.4%	32.0%	31.4%	21.7%	9.3%	40.1%	2.9%	16.7%
	40～44歳	474	148	142	212	155	162	105	39	176	13	73
		100.0%	31.2%	30.0%	44.7%	32.7%	34.2%	22.2%	8.2%	37.1%	2.7%	15.4%
	45～49歳	368	101	120	131	103	107	76	21	125	8	62
		100.0%	27.4%	32.6%	35.6%	28.0%	29.1%	20.7%	5.7%	34.0%	2.2%	16.8%
	50～54歳	642	145	172	210	178	159	110	37	234	10	110
		100.0%	22.6%	26.8%	32.7%	27.7%	24.8%	17.1%	5.8%	36.4%	1.6%	17.1%
	55～59歳	399	97	96	95	81	89	70	13	145	19	79
		100.0%	24.3%	24.1%	23.8%	20.3%	22.3%	17.5%	3.3%	36.3%	4.8%	19.8%
	60～64歳	846	201	195	184	171	193	136	30	328	15	170
		100.0%	23.8%	23.0%	21.7%	20.2%	22.8%	16.1%	3.5%	38.8%	1.8%	20.1%
	65～69歳	169	56	56	40	34	43	30	9	68	2	31
	100.0%	33.1%	33.1%	23.7%	20.1%	25.4%	17.8%	5.3%	40.2%	1.2%	18.3%	
70～74歳	331	64	74	53	60	59	64	7	103	6	86	
	100.0%	19.3%	22.4%	16.0%	18.1%	17.8%	19.3%	2.1%	31.1%	1.8%	26.0%	
75歳以上	117	34	21	22	20	35	18	7	22	1	36	
	100.0%	29.1%	17.9%	18.8%	17.1%	29.9%	15.4%	6.0%	18.8%	0.9%	30.8%	

### ⑥葬儀についての希望

自分自身の葬儀についての希望を男女別に見ると、男性では「Aの方に近い(Aの方に近い+ややAの方に近い)」が58.7%、「Bの方に近い(Bの方に近い+ややBの方に近い)」が18.1%であり、女性では「Aの方に近い(Aの方に近い+ややAの方に近い)」が73.2%、「Bの方に近い(Bの方に近い+ややBの方に近い)」が10.4%となった。

図表Ⅱ-54 葬儀についての希望：自分自身



※A：本人の希望を尊重して実施される葬儀  
B：慣習や習俗に従って実施される葬儀

自分自身の葬儀についての希望を年齢別に見ると、30～34歳と35～39歳では、他の年齢に比べて「Aの方に近い(Aの方に近い+ややAの方に近い)」との回答割合が5ポイント以上低く、「どちらともいえない」との回答割合が高くなっており、葬儀についての希望があまりはっきりしていないことがわかる。

反対に70～74歳では、「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」（69.1%）、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」（16.0%）ともに他の年齢に比べて高く、葬儀についての希望が比較的はっきりしていることがわかる。

40～44歳と45～49歳では、「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」（それぞれ69.8%、67.4%）との回答割合が他の年齢に比べて高く、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」（それぞれ10.7%、10.3%）が低くなっており、本人の希望を尊重して実施される葬儀を希望していることがわかる。

図表Ⅱ-55 葬儀についての希望：自分自身（年齢別）

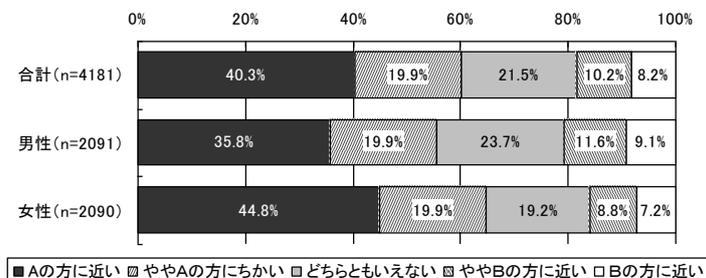
		合計	Aの方に近い	ややAの方にちかい	どちらともいえない	ややBの方に近い	Bの方に近い
年齢別	合計	4181	1916	840	829	316	280
		100.0%	45.8%	20.1%	19.8%	7.6%	6.7%
	30～34歳	351	138	73	91	29	20
		100.0%	39.3%	20.8%	25.9%	8.3%	5.7%
	35～39歳	484	201	94	125	32	32
		100.0%	41.5%	19.4%	25.8%	6.6%	6.6%
	40～44歳	474	223	108	92	20	31
		100.0%	47.0%	22.8%	19.4%	4.2%	6.5%
	45～49歳	368	172	76	82	17	21
		100.0%	46.7%	20.7%	22.3%	4.6%	5.7%
	50～54歳	642	295	132	121	50	44
		100.0%	46.0%	20.6%	18.8%	7.8%	6.9%
	55～59歳	399	195	68	77	36	23
		100.0%	48.9%	17.0%	19.3%	9.0%	5.8%
	60～64歳	846	391	171	141	82	61
		100.0%	46.2%	20.2%	16.7%	9.7%	7.2%
	65～69歳	169	83	30	28	15	13
		100.0%	49.1%	17.8%	16.6%	8.9%	7.7%
	70～74歳	331	162	67	49	31	22
	100.0%	48.9%	20.2%	14.8%	9.4%	6.6%	
75歳以上	117	56	21	23	4	13	
	100.0%	47.9%	17.9%	19.7%	3.4%	11.1%	

※A：本人の希望を尊重して実施される葬儀

B：慣習や習俗に従って実施される葬儀

介護を行う必要がある家族の葬儀についての希望を男女別に見ると、男性では「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」が55.8%、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」が20.7%であり、女性では「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」が64.7%、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」が16.0%となった。

図表Ⅱ-56 葬儀についての希望：介護等を行う必要がある家族



※A：本人の希望を尊重して実施される葬儀

B：慣習や習俗に従って実施される葬儀

介護を行う必要がある家族の葬儀についての希望を年齢別に見ると、55～59歳、60～64歳、75歳以上では、他の年齢に比べて「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」（それぞれ57.4%、59.3%、59.0%）との回答割合が低く、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」（それぞれ24.8%、21.5%、21.3%）との回答割合が高くなっており、葬儀についての家族の希望が比較的はっきりしていることがわかる。

65～69歳と70～74歳では、「Aの方に近い（Aの方に近い+ややAの方に近い）」（それぞれ62.8%、63.8%）、「Bの方に近い（Bの方に近い+ややBの方に近い）」（それぞれ22.5%、19.3%）ともに他の年齢に比べて高くなっており、葬儀についての家族の希望が比較的定まっていなことがわかる。

図表Ⅱ-57 葬儀についての希望：介護等を行う必要がある家族（年齢別）

		合計	Aの方に近い	ややAの方に近い	どちらともいえない	ややBの方に近い	Bの方に近い
年齢別	合計	4181	1685	832	897	426	341
		100.0%	40.3%	19.9%	21.5%	10.2%	8.2%
	30～34歳	351	145	72	89	25	20
		100.0%	41.3%	20.5%	25.4%	7.1%	5.7%
	35～39歳	484	196	100	120	31	37
		100.0%	40.5%	20.7%	24.8%	6.4%	7.6%
	40～44歳	474	192	99	107	40	36
		100.0%	40.5%	20.9%	22.6%	8.4%	7.6%
	45～49歳	368	145	72	87	35	29
		100.0%	39.4%	19.6%	23.6%	9.5%	7.9%
	50～54歳	642	238	142	155	62	45
		100.0%	37.1%	22.1%	24.1%	9.7%	7.0%
	55～59歳	399	164	65	71	57	42
		100.0%	41.1%	16.3%	17.8%	14.3%	10.5%
60～64歳	846	338	163	163	116	66	
	100.0%	40.0%	19.3%	19.3%	13.7%	7.8%	
65～69歳	169	76	30	25	20	18	
	100.0%	45.0%	17.8%	14.8%	11.8%	10.7%	
70～74歳	331	137	74	57	32	31	
	100.0%	41.4%	22.4%	17.2%	9.7%	9.4%	
75歳以上	117	54	15	23	8	17	
	100.0%	46.2%	12.8%	19.7%	6.8%	14.5%	

※A：本人の希望を尊重して実施される葬儀

B：慣習や習俗に従って実施される葬儀

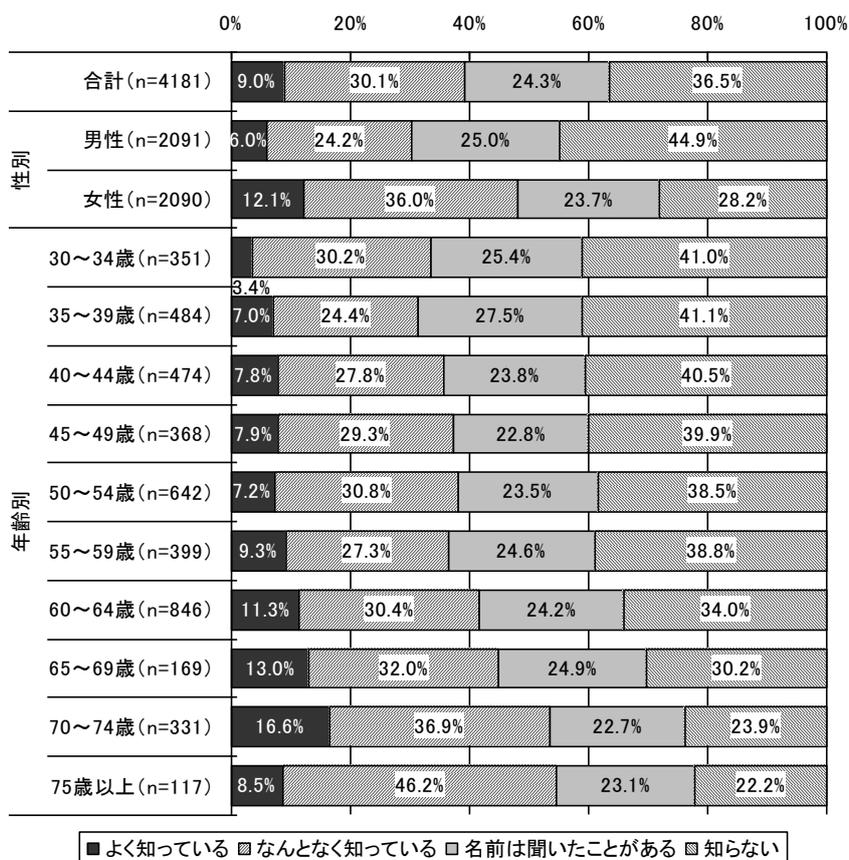
(4) 遺言等に関する意識

① 「エンディングノート」の認知度

「エンディングノート」の認知度を見ると、「知っている（「よく知っている」＋「なんとなく知っている）」は男性が30.2%、女性が48.1%で、女性が男性より18ポイント上回っており、女性の方が認知度が高いことがわかる。

年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれて「知っている（「よく知っている」＋「なんとなく知っている）」との回答割合も高くなっている。

図表Ⅱ-58 「エンディングノート」の認知度

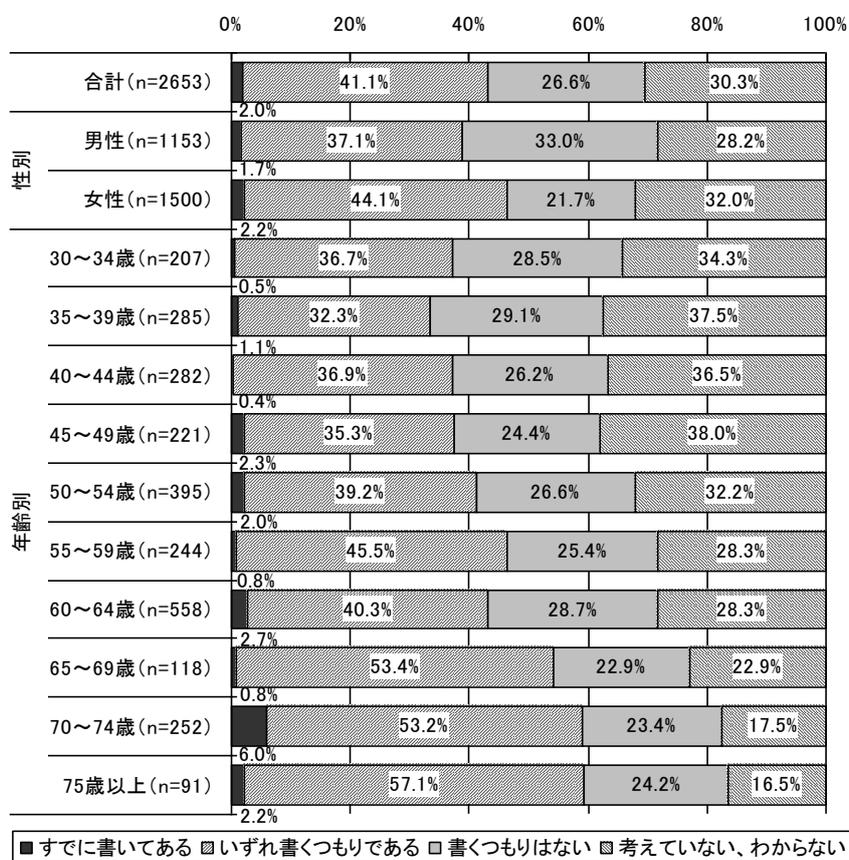


## ②エンディングノートの作成経験・作成意向

エンディングノートの作成経験・作成意向を見ると、「すでに書いてある」+「いずれ書くつもりである」は、男性が38.8%、女性が46.3%と、女性が男性を7.5ポイント上回った。「書くつもりはない」は、男性が33.0%、女性が21.7%と、男性が女性を11.3ポイント上回った。女性の方が作成経験・作成意向ともに高いことがわかる。

年齢別に見ると、「すでに書いてある」は70～74歳が6.0%と最も多く、「いずれ書くつもりである」は75歳以上が57.1%と最も多くなっている。「書くつもりはない」は年齢によって若干のばらつきが見られる。

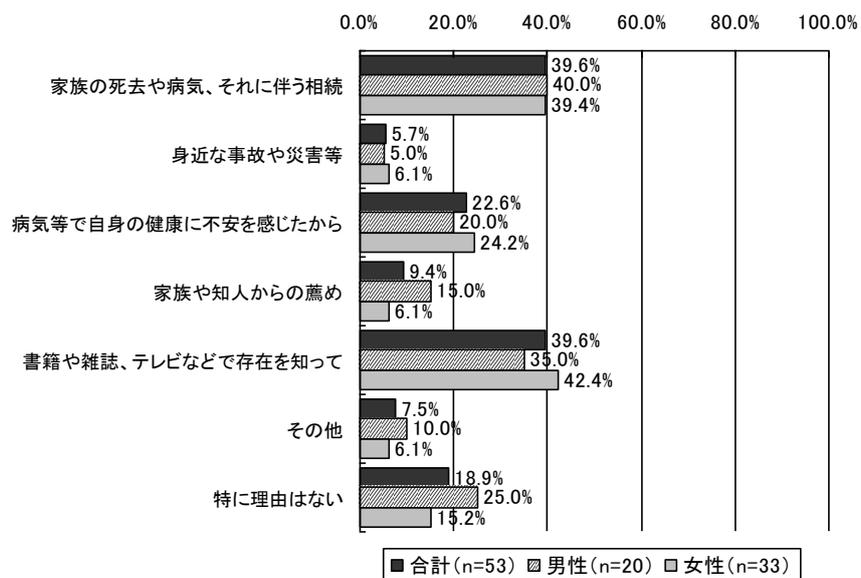
図表Ⅱ-59 エンディングノートの作成経験・作成意向



### ③エンディングノートの作成のきっかけ

エンディングノートの作成のきっかけを見ると、男性では「家族の死去や病気、それに伴う相続」が40.0%と最も多く、次いで「書籍や雑誌、テレビなどで存在を知って」(35.0%)、「特に理由はない」(25.0%)の順となった。女性では「書籍や雑誌、テレビなどで存在を知って」が42.4%と最も多く、次いで「家族の死去や病気、それに伴う相続」(39.4%)、「病気等で自身の健康に不安を感じたから」(24.2%)となっている。

図表Ⅱ-60 エンディングノートの作成のきっかけ

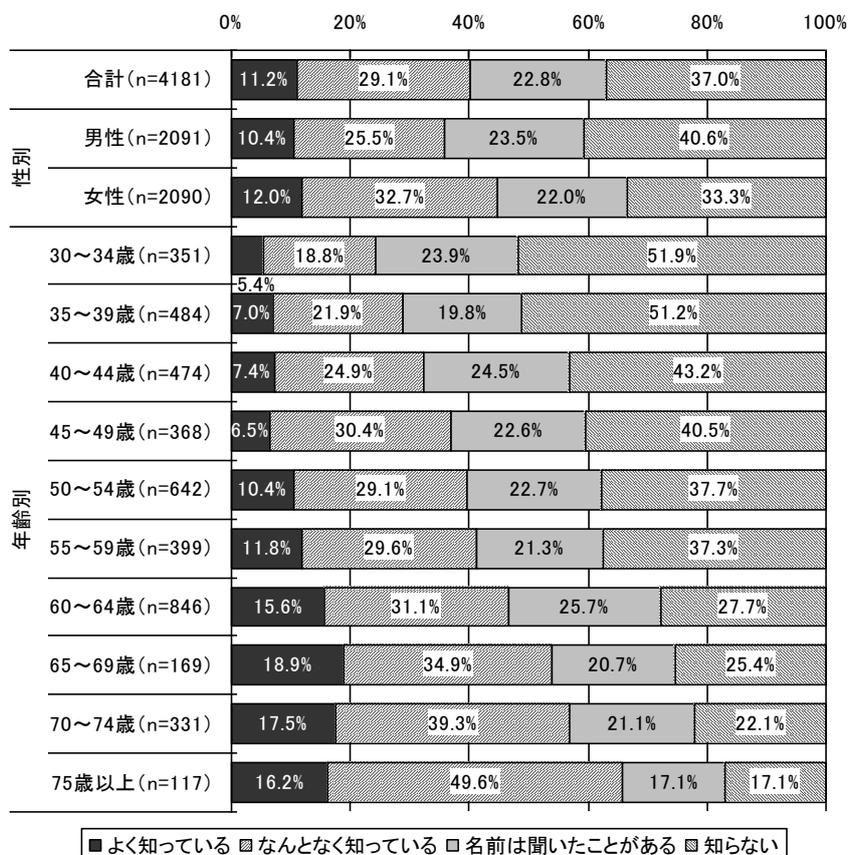


#### ④「任意後見制度」の認知度

「任意後見制度」の認知度を見ると、「知っている（「よく知っている」＋「なんとなく知っている）」は男性が35.9%、女性が44.7%で、女性が男性より8.8ポイント上回っており、女性の方が認知度が高いことがわかる。

年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれて「知っている（「よく知っている」＋「なんとなく知っている）」との回答割合も高くなっており、30～34歳では24.2%、75歳以上では65.8%と約3倍となっている。

図表Ⅱ-61 「任意後見制度」の認知度

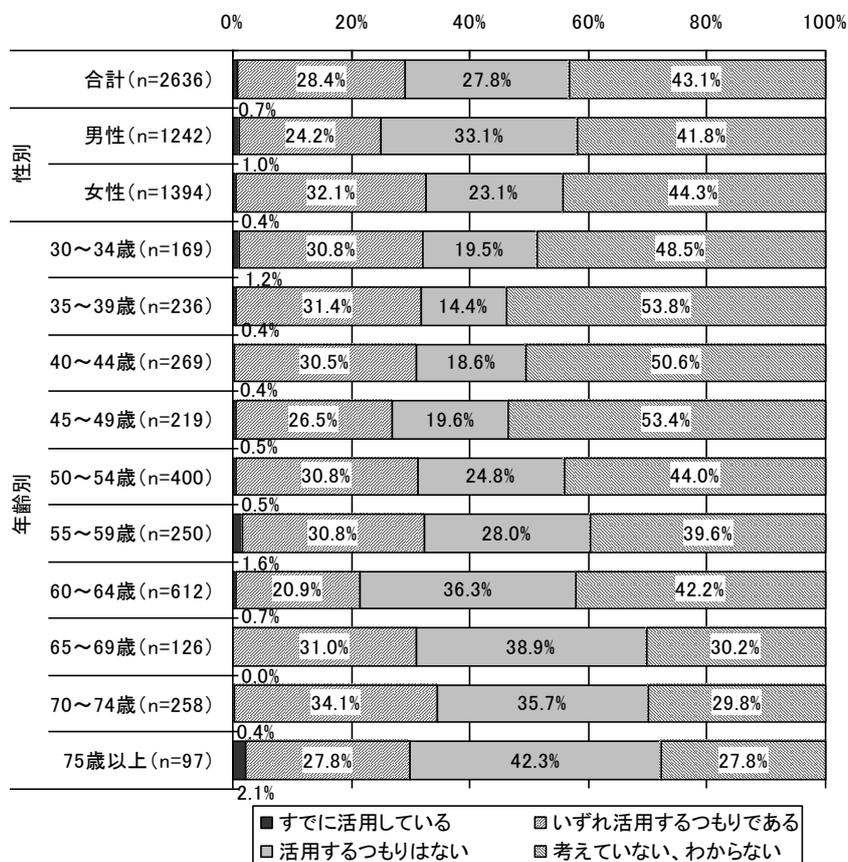


### ⑤任意後見制度活用の有無・活用意向

任意後見制度活用の有無・活用意向を見ると、「すでに活用している」+「いずれ活用するつもりである」は、男性が24.9%、女性が33.1%と、女性が男性を8.2ポイント上回った。「活用するつもりはない」は、男性が33.1%、女性が23.1%と、男性が女性を10ポイント上回った。女性の方が作成経験・作成意向ともに高いことがわかる。

年齢別に見ると、「すでに活用している」は75歳以上と55～59歳で約2割となっている。「いずれ活用するつもりである」はいずれの年齢においても3割前後だが、60～64歳では20.9%と、他と比べて10ポイント前後下回っている。「活用するつもりはない」は年齢が高くなるにつれて回答割合も高くなっている。

図表Ⅱ-62 任意後見制度活用の有無・活用意向

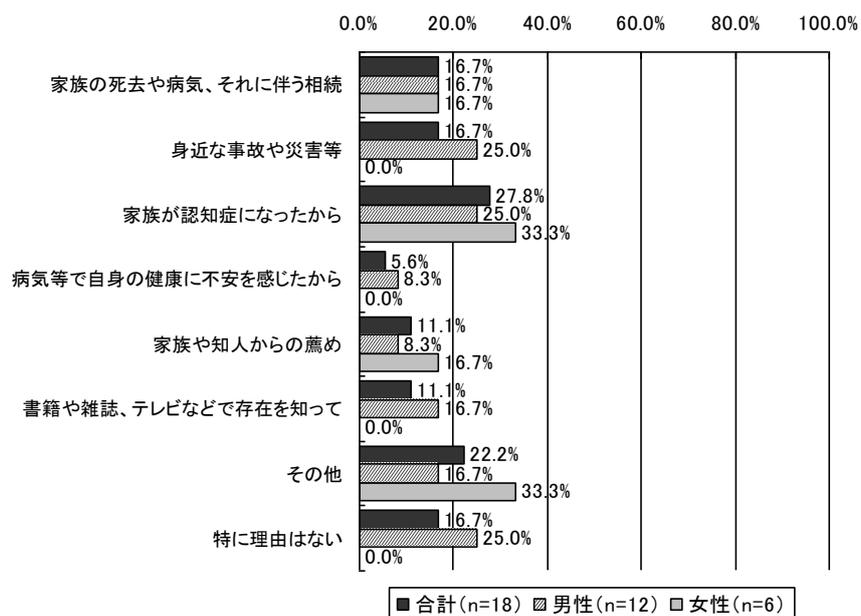


### ⑥任意後見制度活用のきっかけ

任意後見制度活用のきっかけを見ると、男性では「身近な事故や災害等」「家族が認知症になったから」「特に理由はない」（ともに 25.0%）、「家族の死去や病気、それに伴う相続」「書籍や雑誌、テレビなどで存在を知って」（ともに 16.7%）の順となっている。

女性では「家族が認知症になったから」（33.3%）、「家族の死去や病気、それに伴う相続」「家族や知人からの薦め」（ともに 16.7%）の順となっている。

図表 II-63 任意後見制度活用のきっかけ

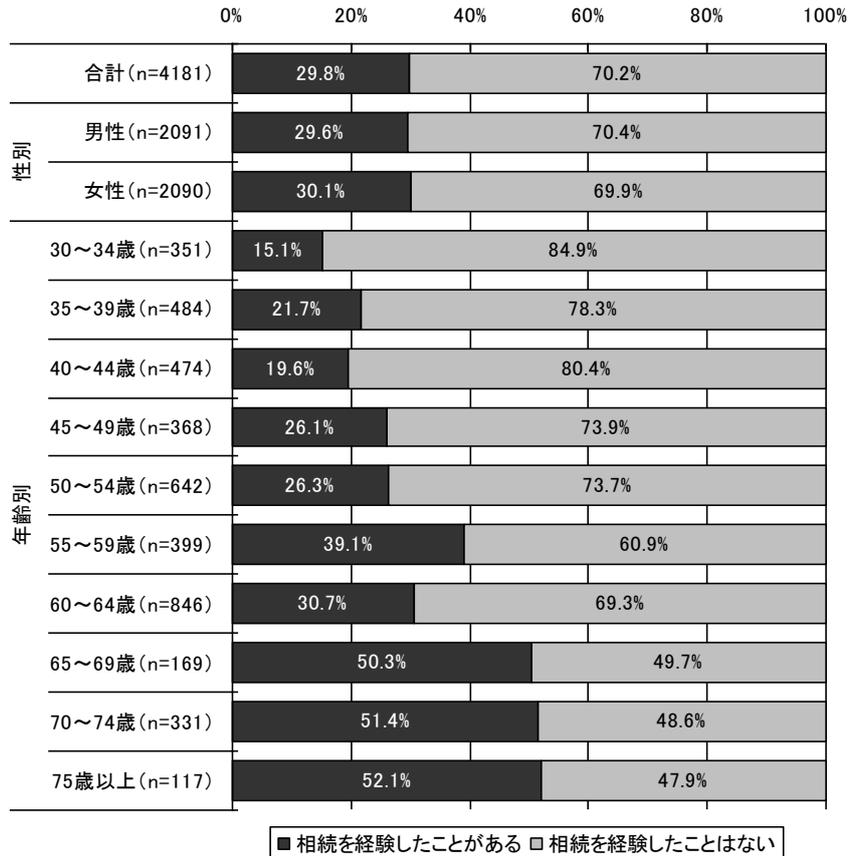


⑦相続経験の有無（5年以内）

相続経験の有無（5年以内）を見ると、「相続を経験したことがある」では男性が29.6%、女性が30.1%、「相続を経験したことがない」では男性が70.4%であり、女性が69.9%となった。男女差は見られない。

年齢別に見ると、65歳以上は半数以上が「相続を経験したことがある」と回答している。

図表Ⅱ-64 相続経験の有無（5年以内）

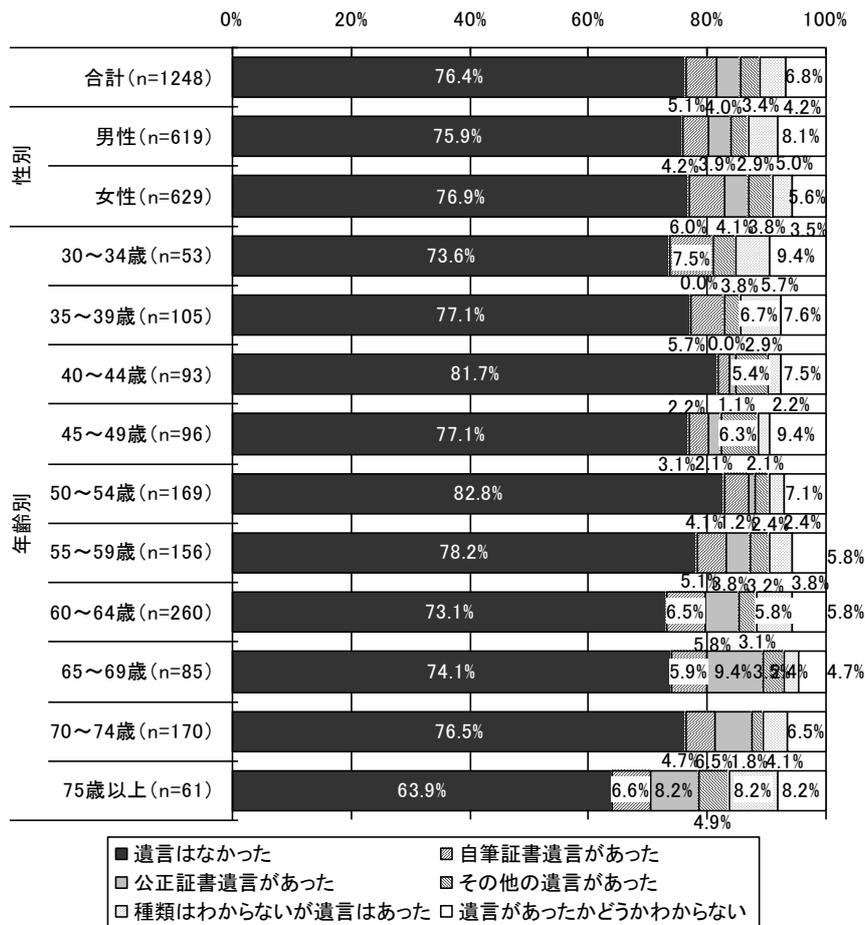


### ⑧遺言の有無

5年以内に相続を経験したとする回答者に対して、遺言の有無を尋ねたところ、男女別、年齢別ともに、「遺言はなかった」が8割前後を占めている。

65～69歳では「公正証書遺言があった」が9.4%と他の年齢に比べて多く、75歳以上では「遺言はなかった」が63.9%であり、他の年齢に比べて何らかの遺言があったとする回答割合が高くなっている。

図表Ⅱ-65 遺言の有無

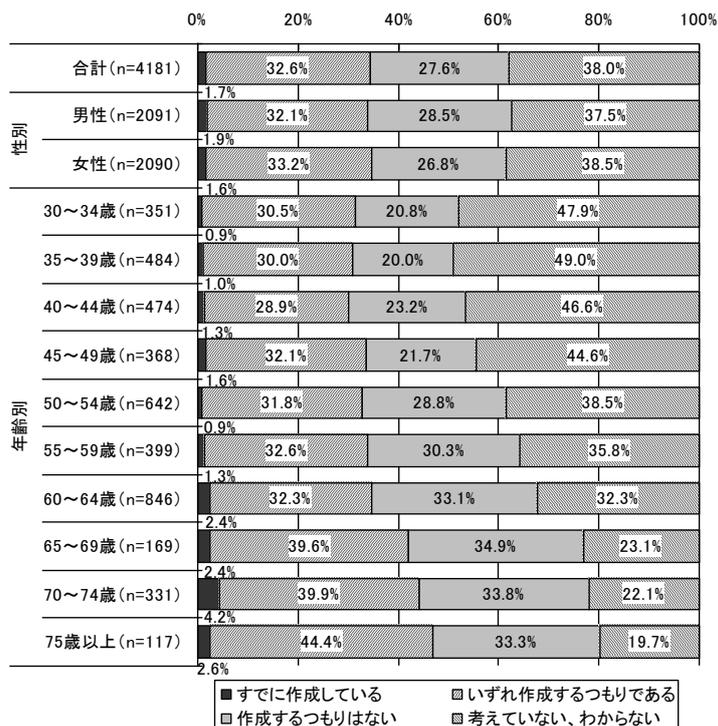


### ⑧遺言の作成経験・作成意向

遺言の作成経験・作成意向を見ると、男女別とも「いずれ作成するつもりである」が約3割、「作成するつもりはない」が約3割、「考えていない、わからない」が約4割と、男女での差はあまり見られない。

年齢別に見ると、「すでに作成している」「いずれ作成するつもりである」「作成するつもりはない」は、年齢が高くなるにつれて回答割合が高くなっている。

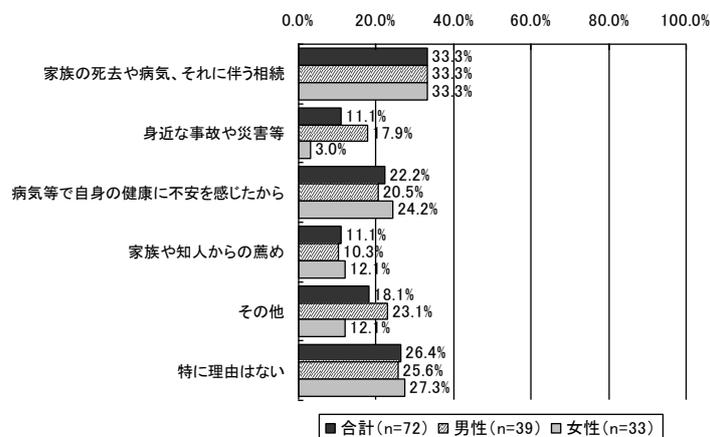
図表Ⅱ-66 遺言の作成経験・作成意向



### ⑨遺言作成のきっかけ

遺言を既に作成している、もしくは、いずれ作成するつもりであるとする回答者に対して、遺言作成のきっかけを尋ねたところ、男女ともに「家族の死去や病気、それに伴う相続」（ともに33.3%）が最も多く、次いで「特に理由はない」（男性25.6%、女性27.3%）、「病気等で自身の健康に不安を感じたから」（男性20.5%、女性24.2%）となっている。

図表Ⅱ-67 遺言作成のきっかけ

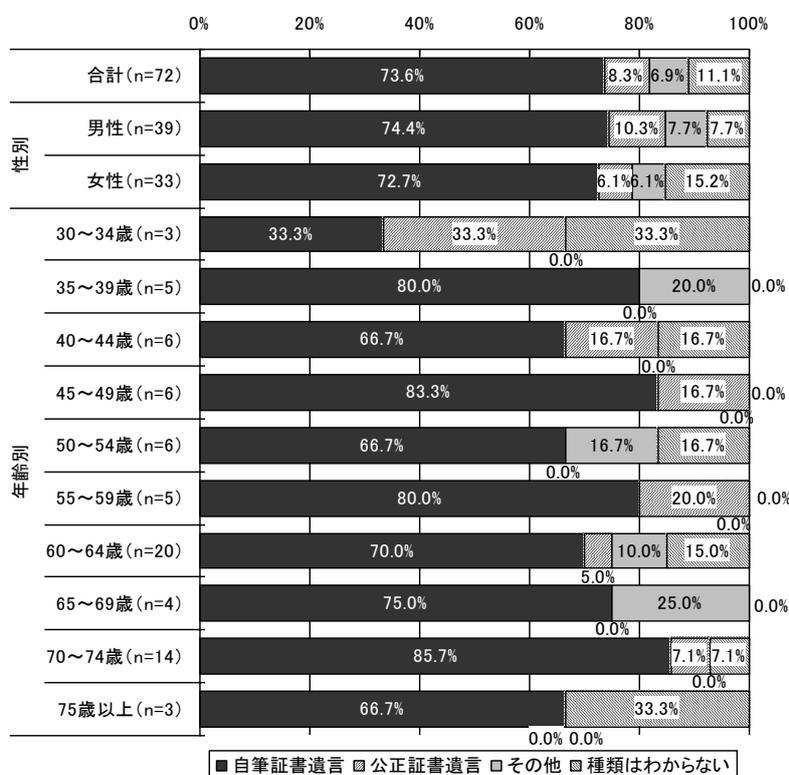


⑩作成した遺言の種類

遺言を既に作成している、もしくは、いずれ作成するつもりであるとする回答者に対して、作成した(作成するつもり)の遺言の種類を尋ねたところ、「自筆証書遺言」が男性では74.4%、女性では72.7%、「公正証書遺言」が男性では10.3%、女性では6.1%となっている。

年齢別に見ると、35～39歳、45～49歳、55～59歳、70～74歳では8割以上が、また40～44歳、50～54歳、60～64歳、65～69歳、75歳以上では7割前後が「自筆証書遺言」と回答している。30～34歳では回答が分かれたが、いずれも母数が少ないことに注意が必要である。

図表Ⅱ-68 作成した(作成するつもり)の遺言の種類

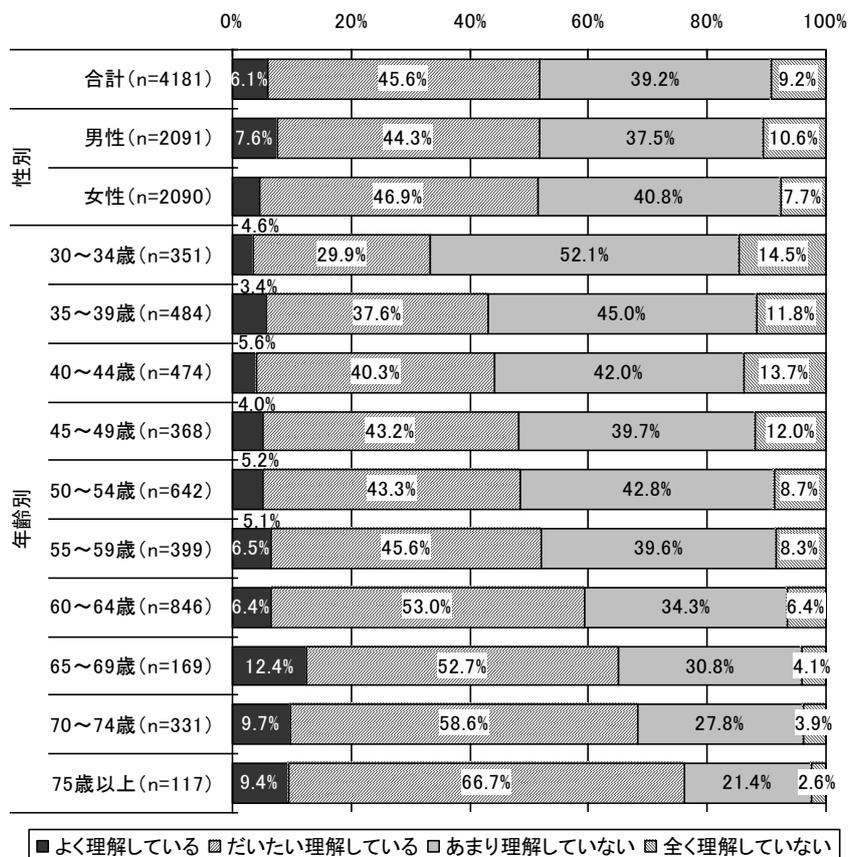


### ⑪法的効力が及ぶ遺言についての理解度

法的効力が及ぶ遺言についての理解度を見ると、男女別では、「理解している（「よく理解している」＋「だいたい理解している）」が、男性 51.9%、女性 51.5%。「理解していない（「あまり理解していない」＋「全く理解していない）」が、男性 48.1%、女性 48.5%となっている。

年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれて「理解している（「よく理解している」＋「だいたい理解している）」との回答割合が高くなっている。特に 55 歳以上では半数を超え、75 歳以上では 30～34 歳の 2 倍以上の割合となっている。

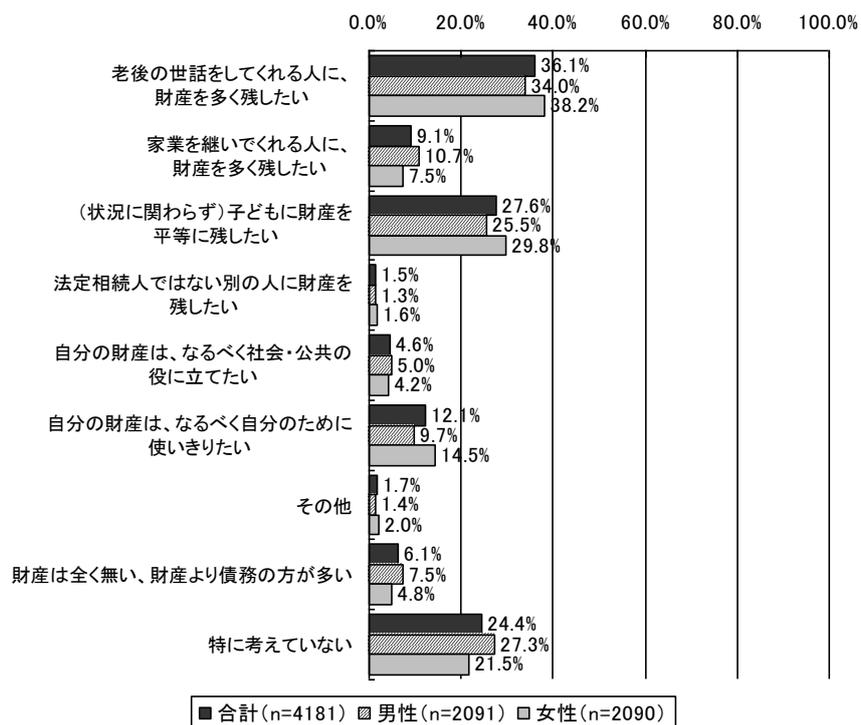
図表 II-69 法的効力が及ぶ遺言についての理解度



## ⑫遺産相続の考え方

遺産相続の考え方を見ると、男女ともに「老後の世話をしてくれる人に、財産を多く残したい」(男性 34.0%、女性 38.2%) が最も多く、次いで男性では「特に考えていない」(27.3%)、「(状況に関わらず) 子どもに財産を平等に残したい」(25.5%) と続き、女性では「(状況に関わらず) 子どもに財産を平等に残したい」(29.8%)、「特に考えていない」(21.5%) となっている。

図表Ⅱ-70 遺産相続の考え方



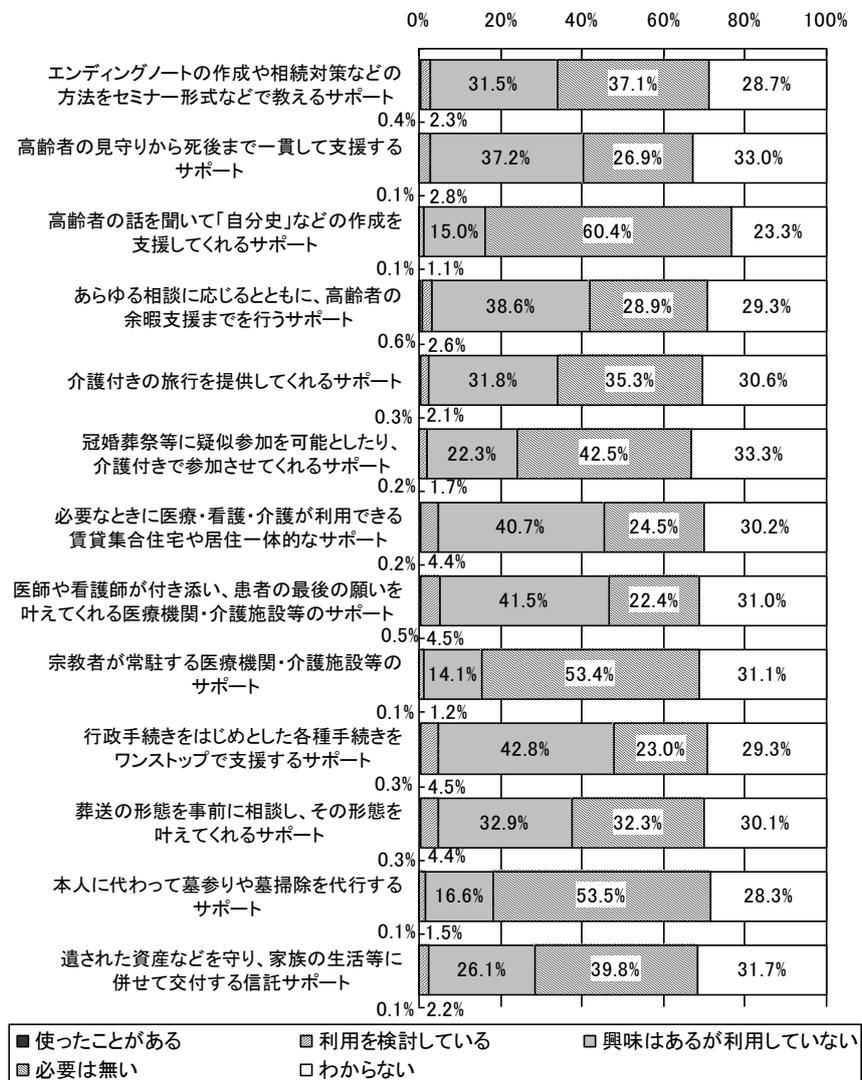
(5) 人生の終末期に関する新たなサポートについて（実際・ニーズ）

①人生の終末期に使ってみたいと感じている新たなサポート

人生の終末期に使ってみたいと感じている新たなサポートを見ると、「興味はあるが利用していない」こととして、4割以上が「行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート」(42.8%)、「医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート」(41.5%)、「必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート」(40.7%)を挙げている。

また「必要はない」こととして、半数以上が「高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート」(60.4%)、「本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート」(53.5%)、「宗教者が常駐する医療機関・介護施設等のサポート」(53.4%)を挙げている。

図表Ⅱ-71 人生の終末期に使ってみたいと感じている新たなサポート (n=4181)

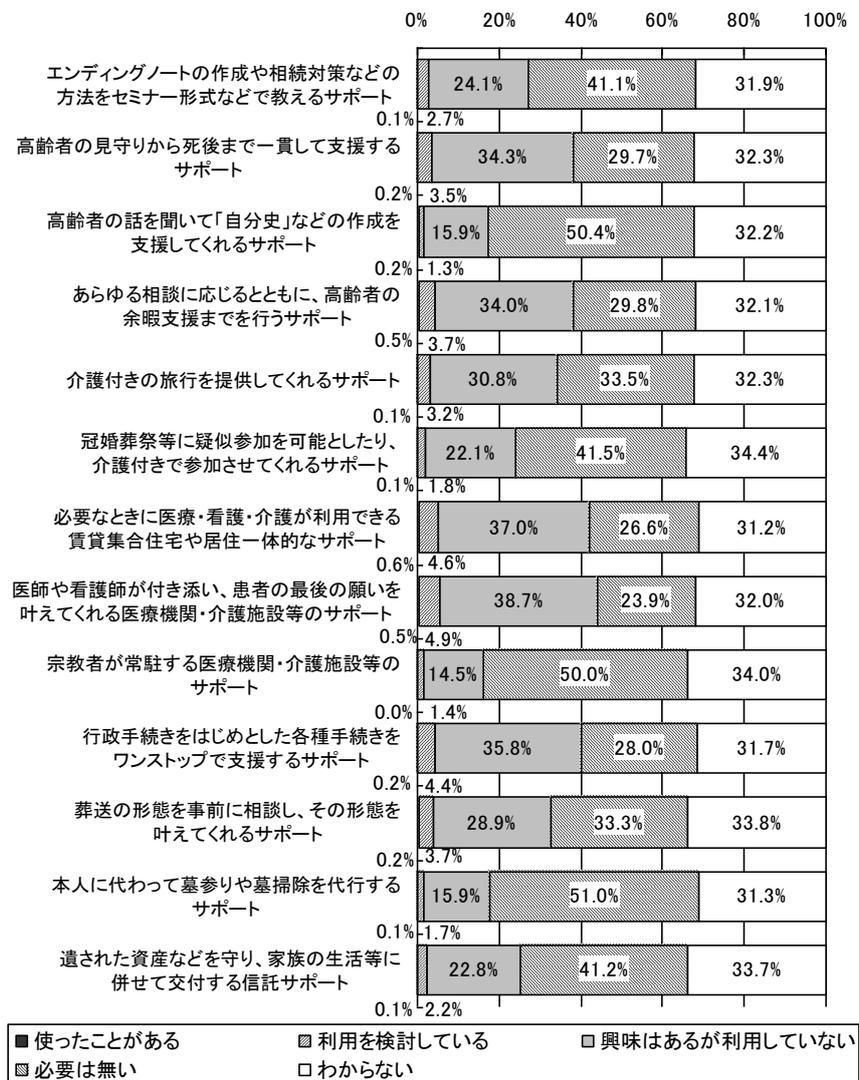


## ②介護等を行う家族に対して、終末期に使ってあげたいサポート

介護等を行う家族に対して、終末期に使ってあげたいサポートを見ると、「興味はあるが利用していない」こととして、4割近くが「医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート」(38.7%)、「必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート」(37.0%)、「行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート」(35.8%)を挙げている。

また「必要はない」こととして、半数以上が「本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート」(51.0%)、「高齢者の話を聞いて「自分史」などの作成を支援してくれるサポート」(50.4%)、「宗教者が常駐する医療機関・介護施設等のサポート」(50.0%)を挙げており、本人の希望と合致していることがわかる。

図表Ⅱ-72 介護等を行う家族に対して、終末期に使ってあげたいサポート (n=4181)

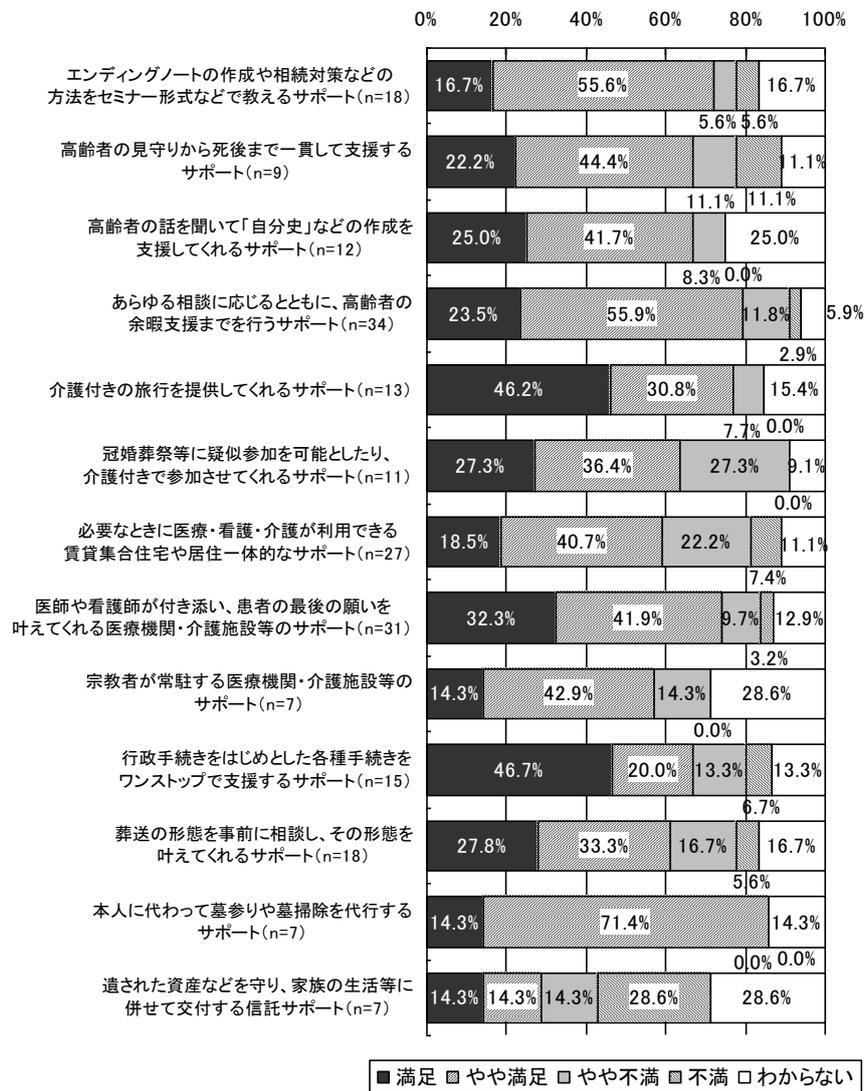


### ③利用したサポートの満足度

利用したサポートの満足度を見ると、「本人に代わって墓参りや墓掃除を代行するサポート」(85.7%)、「あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサポート」(79.4%)、「介護付きの旅行を提供してくれるサポート」(77.0%)については、約8割が「満足(「満足」+「やや満足」)」と回答している。

本人、家族ともに「興味はあるが利用していない」と回答していた「行政手続きをはじめとした各種手続きをワンストップで支援するサポート」は66.7%、「医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート」は74.2%、「必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート」は59.2%となっている。

図表Ⅱ-73 利用したサポートの満足度



#### ④サポートを利用しない理由

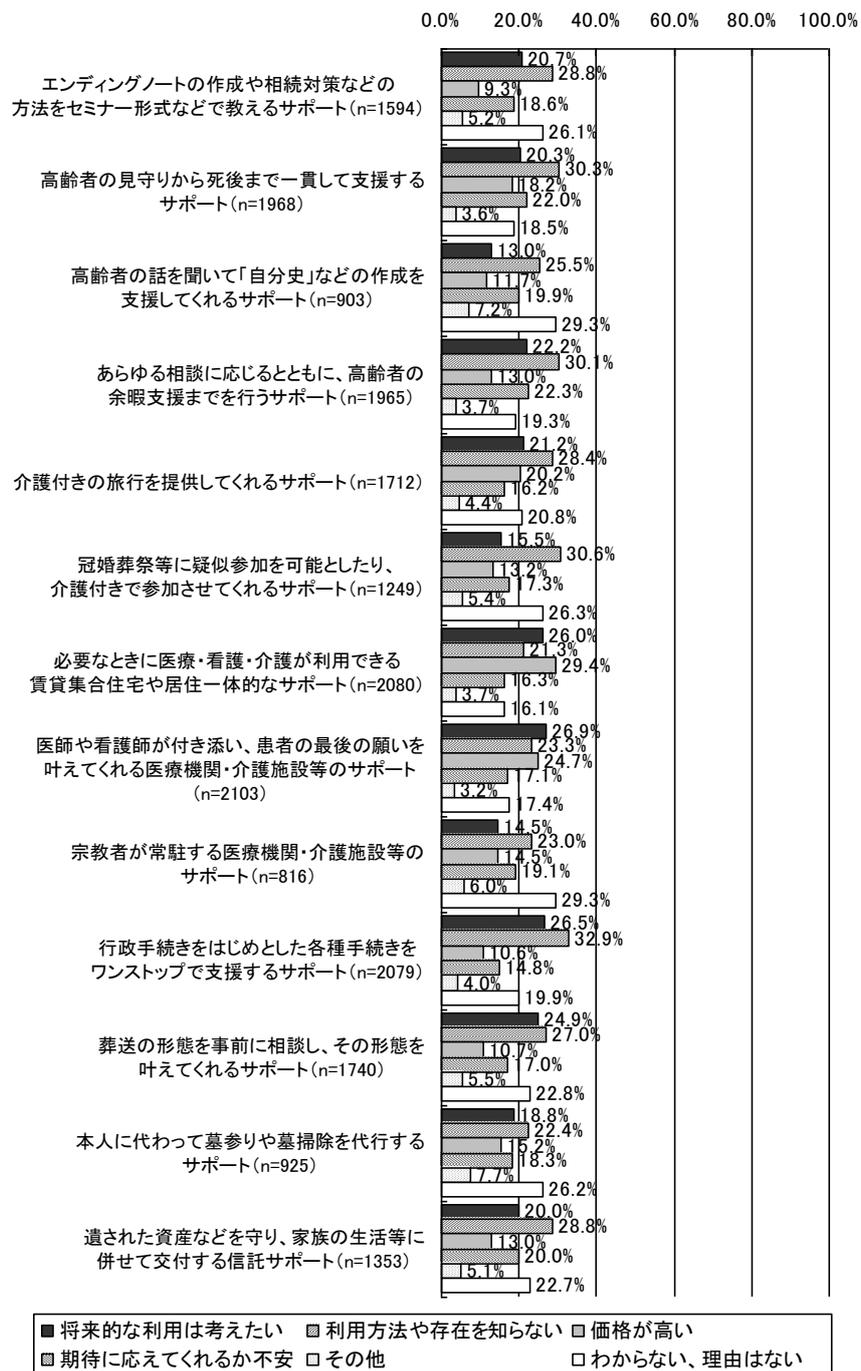
サポートを利用しない理由を見ると、「将来的な利用は考えたい」としては、「医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート」が26.9%と最も多く、次いで「行政手続をはじめとした各種手続をワンステップで支援するサポート」(26.5%)、「必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート」(26.0%)となっている。

「利用方法や存在を知らない」としては、「行政手続をはじめとした各種手続をワンステップで支援するサポート」が32.9%と最も多く、次いで「冠婚葬祭等に疑似参加を可能としたり、介護付きで参加させてくれるサポート」(30.6%)、「高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート」(30.3%)となっている。

「価格が高い」としては、「必要なときに医療・看護・介護が利用できる賃貸集合住宅や居住一体的なサポート」が29.4%と最も多く、次いで「医師や看護師が付き添い、患者の最後の願いを叶えてくれる医療機関・介護施設等のサポート」(24.7%)、「介護付きの旅行を提供してくれるサポート」(20.2%)となっている。

「期待にやってくれるか不安」としては、「あらゆる相談に応じるとともに、高齢者の余暇支援までを行うサービス」が22.3%と最も多く、次いで「高齢者の見守りから死後まで一貫して支援するサポート」(22.0%)、「遺された資産などを守り、家族の生活等に併せて交付する信託サポート」(20.0%)となっている。

図表Ⅱ-74 サポートを利用しない理由



### III ヒアリング調査結果

#### 1. 事前準備期のサポート

##### 1. 事前準備期のサポート

###### ■【事例】株式会社①A(親の支援に関する情報提供サイト)

###### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 親の健康や介護、同居に関する事など、親や自分、家族等の将来について考えるための情報を提供している。情報提供サイトの運営だけでなく、フリーペーパーの制作・発行、セミナーや展示会等も開催している。
- 主な対象は、60歳から80歳までの親を持つ35歳から59歳までの世代としている。親の加齢や老化にもなると発生する心配事にあわせてないように、事前に情報を収集しておくことをコンセプトとしている。
- 「親を気遣う」ことは「自分を気遣う」ことである。親子関係が希薄になったことを考え直すことにつながっている。親と話をすることによって、親がどのように考えているのか分かるようになってくる。
- 日本にはもともと「親孝行」や「親を大切に」といった考えがあり、「親孝行な家事代行」といったそれを実現するためのサポートが提供され始めている。

###### 【事業開始の経緯・問題意識等】

- 「親に係わる」として横車をさすことによって、世の中の見え方が変わってくる。見方を変えていかないと、社会保障費は増加する一方である。
- 「高齢者＝コスト」というネガティブな発想では何も解決しない。そのため当社は「親を世話する子供の支援」という新しい市場をつくらうとしている。もう1度親子で何かをしようとすることによって、そこに新たな市場ができ、「高齢者＝コスト」でなくなっていく。

###### <展示会の企画・運営>

- 「親子二世代で気軽に来られるイベント」を目指し平成20年から開催している。4回目の開催となる今回の展示会は、出展社数71社、来場者数23,538人であった。順調に出展社数、来場者数が増えている。
- 会場を生活シーン別に7つにわけ、「親のこと」に役立つ商品、情報を提供するだけでなく、実際の相談や体験もできるようになっている。



- 来場者のうち、ターゲットとしている世代(35歳～59歳)が63.6%を占め、昨年より約5ポイントアップしている。想定するターゲットをより吸引できている結果となり、コンセプトが広く浸透していると考えられる。
- 来場目的を参加者に対するアンケート調査の結果からみると、「母親のため」(43.8%)、「父親のため」(35.0%)、「自分のため」(30.4%)となっている。

##### 1. 事前準備期のサポート

###### ■【事例】証券会社①B(エンディングノートをコアとした相続対策のセミナー等)

###### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 平成16年の信託業法の改正に伴い、平成17年から信託銀行の信託契約代理店として、信託銀行が提供する遺言信託・遺産整理サポートの媒介(商品紹介と情報の取次)を実施している。
- 各営業店の窓口では、証券・投資顧問・各種コンサルティング等、様々な対顧客サポートを一体的に提供している中で、相続対策に関するコンサルティング等もやっている。



###### 【エンディングノート開発+エンディングノートをコアとしたセミナー開催】

- 高齢層顧客に対するサポートの一環としてエンディングノートを作成し、営業ツールとして活用(一般書店販売もあり)している。
- 当社主催の相続セミナーへの参加者から、「相続対策として何かから取り組んだらいいかわからない」との声が多数寄せられたことをきっかけとして開発に着手し、1年半の準備期間を経て平成22年に完成した。
- 他のエンディングノートと異なり、『円滑な相続をする』『セカンドライフを充実させる』ための知識をふんだんに盛り込むようにしている。また併せて、エンディングノートをコアとしたセミナーも開催している。
- これにより、生前から『相続対策』『財産形成』を行う重要性を説いている。

###### <エンディングに対する意識喚起>

- エンディングを見据えて準備をする必要性に気付かせ、準備をしてもらいたいと考えている。そのため対象は、終末期の人をターゲットとせず、リタイアメント前後の人をイメージしている。
- セミナーの参加者からも先のことについて話をしてもらおうと、やっておかなくてはいけないことについての気づきがあると云われる。
- セミナーの中心層が70～80歳代であるが、60歳前後の出席者も多くなっている。
- セミナーを開催したことによる効果はある。生命保険などはニーズにあった販売を行うことができるようになったり、当社に対する信頼感が増したり、顧客との関係がスムーズになったりといった例をみることができている。

###### <自社ビジネス-証券-コンサルティングへの展開>

- 当社のエンディングノート・セミナーは、死・葬儀を終着点とした事前準備ではなく、「円滑に相続すること」「セカンドライフを充実させること」を終着点として、生前に適切な事前準備を行うことを促すものである。
- 相続税支払、遺産の分割処分等に耐えうるだけの金融資産を準備しつつマネープランを検討しておくことが必要である。それが、当社の証券ビジネス・コンサルティングビジネスにつながっていくことを意図している。
- 当社の営業戦略としては毛色の違う、試行錯誤段階のものだが、営業店からの評判はよい。実ビジネスにつながったケースも報告されている。

## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】宗教者①C(宗教者として葬儀だけでなく様々なサポートを提供)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 宗教者(僧侶)として、葬式仏教といわれるように葬儀のサポートをするだけでなく、もっと幅広く生前から様々なサポートを提供している。
- 生・老・病・死(四苦)に対するトータルなサポートが今後求められるようになってくる。それに伴って宗教者の役割も変わってくるとともに、様々な関連主体との連携が必要となってくる。

##### <『生』について>…僧侶

- 各種相談・寺子屋・セミナー
- 生活保護申請への同行

##### <『老』について>…弁護士、行政書士、ケアマネージャー、保険会社

- 成年後見制度、遺言公正証書
- 介護保険制度、老後の心配・葬儀費用

##### <『病』について>…医師、看護師、保健師

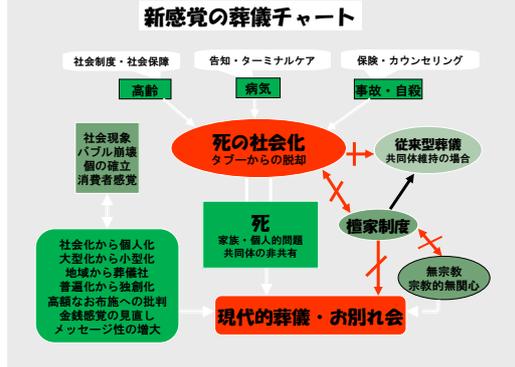
- 医療従事者との連携、ターミナルケア
- 各種相談・臨床対応、リビングウィル
- デスエデュケーション

##### <『死』について>…僧侶、葬儀社、司法関係者、医療従事者、石材店

- 事前相談、看取り・葬儀準備
- 葬儀・法事・お墓・供養、仏壇・仏具、グリーフケア
- 相続・登記

#### <これからの宗教者のかかわり方>

- 大きく社会が変化し、檀家制度等が崩れ始める中で、宗教者に求められる社会的な役割も変化していく。
- 従来のように葬儀だけに意味を見出す人はどんどん減少してきている。宗教者が日常からかかわり、様々なサポートを提供していく必要がある。そうしたプロセスの中で、信頼関係を構築し、経験を共有し、その流れで、葬儀やグリーフケアのサポートを提供していかなければならない。



## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】公証役場①D(公正証書作成のサポート)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 公証役場では、法務大臣から任命を受けた公証人が、①公正証書の作成、②私署証書や会社等の定款に対する認証の付与、③私署証書に対する確定日付の付与といったサポートを提供している。
- 特にライフエンディング・ステージに関連する公証業務としては、以下があげられる。

##### ①遺言

遺言については、1)自筆証書遺言、2)公正証書遺言、3)秘密証書遺言の3種類がある。

公正証書遺言の手続きの流れは以下のとおりである。

- 1) 公証人が相談を受けて原案を作成し、手数料の見積もりと原案を本人が確認する。
- 2) 必要な場合には修正し、遺言公正証書を作成し、本人と証人の2名が最終確認し、署名・押印する。

##### ②任意後見契約

##### ③死後の事務処理の委任契約

##### ④尊厳死宣言

#### <全国の公証役場>

- 公証役場はそれぞれの地域に設置されており、総数は、全国で約290箇所程度である。
- 公証役場においては、相談については無料にしている。また、実際の手続きを行う場合の手数料については法定されている。
- 相談の内容としては、多くは遺言と相続に関連するものである。この他、高齢者の方や認知症の高齢者を抱えた家族等からの成年後見、任意後見に関する相談もある。尊厳死宣言に関する相談もある。

#### <公証人>

- 公証人は、多年の法律実務経験を有する法律実務家の中から、法務大臣が任命する公務員である。その多くは、司法試験合格後司法修習生を経て、30年以上の実務経験を有する法曹有資格者から任命される。その他、多年法務事務に携わり、これに準ずる学識経験を有する者で、検察官・公証人特別任用審査会の選考を経た者も任命できることになっている。
- 公証人の職務は、原則として公証役場として開設した事務所で行うことになっているが、病院や嘱託人の自宅で遺言公正証書を作成するときや、当然職務の内容が他の場所で行われる貸金庫の開披、土地・建物の形状等について的事实実験公正証書を作成する場合には公証役場以外で執務を行うことになる。

## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】NPO法人①E(遺言・相続対策等のサポート)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- これまでは、司法書士の業務でライフエンディングに係わるものといえば、相続登記がほとんどであった。しかし、成年後見制度が導入されてからは、成年後見業務を担うことで、ライフエンディングのサポートに携わる機会が増加してきている。
- 例えば、遺言や任意後見(任意代理、見守り、死後事務委任を含む)の公正証書の作成をサポートすることがある。
- また、身寄りのない高齢者等の法定後見業務においては、葬祭業者、介護事業者等、これまではつながりのなかったライフエンディングのサポートの提供主体と連携するようになった。
- 特に、当NPO法人では、こうした社会の変化、司法書士に対するニーズの変化を受けて、遺言や成年後見等に注力し、それらの付帯的な関連業務を開拓している。例えば、以下のようなサポート業務にも対応している。
  - 公正証書遺言書の作成支援について、一人暮らしの高齢者の増加を鑑み、公正証書遺言書に葬儀の執行(又は死後事務委任契約を利用)を付言事項として追記
  - 相続後空き家になった自宅の売却手続き
  - ライフプランニング、キャッシュフロー表の作成

#### <遺言・相続・成年後見のワンストップサポート>

- 当NPO法人に所属する司法書士の事務所では、各専門家と連携し、遺言・相続・成年後見についてワンストップサポートを提供している。



#### <今後の課題>

- まず当該サポートを如何に周知していくかが課題と考えている。また同時に、当該サポートをより活用しやすいものに改善していく必要があると考えている。
- 任意後見については、長生きすればその分費用がかかってしまうという構造的な問題がある。また、葬儀の生前予約信託については、近年増加傾向にある直葬等の簡易な葬儀の場合には、相対的に手数料比率が高くなってしまふ。こうした費用の問題について、解決策を見出していかなければならないと考えている。
- また、法定後見で葬儀を実施する場合、自社の葬儀生前予約信託を利用すると、利益相反となる恐れがある。

## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】出版業者①F(遺言作成支援付き旅行)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 通常のセミナー等では、参加者が実際に遺言を準備するところまでいかないという問題意識のもと、遺言を作成するための旅行(相談会)を開催している。セミナー形式では、その場では感銘を受けても、家に帰れば日常に戻ってしまう。
- 同旅行には、各種専門家が同行し、講座や相談を行っている。特に遺言作成にあたって、先ず必要となる「心の整理」を重視しており、利用者もその点に満足している。なお同旅行には心理カウンセラーも同行している。
- 相続については、法律の問題だけでなく、気持ちの問題が係わってくる。しかし、法律の問題ばかり取り沙汰されるので、どうせ無理だろうと法律にあわせて気持ちを曲げてしまったり、準備を先送りにしてしまったりする。
- 対象については、特に富裕層に限定しているわけではない。心の整理を重視しているため、富裕層以外の層も対象としていきたいと考えている。
- このサポートを利用することで、疎遠になっていた家族等とコミュニケーションをとることを決意したり、残された人生での目標が見つかったりする場合もある。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 弁護士等の専門家は相続等に関する相談を受けるが、法律には詳しいものの、心に関する悩みに対応することは難しいが、実際には心に関する悩みの相談に対するニーズが大きいということに気づき、その他各種の専門家と連携し、こうしたサポートを開始することとした。

#### <遺言作成支援の内容>

- 気持ちの問題について考えるためのワークシートを用意している。このワークシートにそって改めて考えることで、絆を再確認したり、人生の様々な出来事を思い出すようになる。その後の人生の目標が見つかる場合もある。
- 遺言作成のメリットとして以下のようなことがあげられると考えている。
  - ①家族等の大切さを改めて知る。
  - ②自分と人との関係性に感謝する。
  - ③コミュニケーションを大切にできるようになる。
  - ④相手の立場が理解できるようになる。
  - ⑤悔いのない生き方を考えるようになる。
  - ⑥目標が見えてくる。
  - ⑦仕事に対して前向きになる。
  - ⑧時間を意識するようになる。
  - ⑨一日一日を大切に思うようになる。
  - ⑩健康を意識するようになる。
  - ⑪気持ちが軽くなる。
  - ⑫お正月が楽しくなる。



#### <今後の展開>

- 遺言作成には、残りの人生を見つめ直し、充実させる効果があるため、早い段階での準備が有効であるという観点から、中間管理職等の世代を対象として、企業向けにもサポートを提供していきたいと考えている。
- 様々な主体との連携し、新たなサポートを展開していきたいと考えている。当サポートを開始してから、様々な主体から連携の提案を受けるようになった。

## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】葬祭業者①G(生前意思の預かりサポート: インターネット版)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 自社の会員(有料会員/無料会員)向けのサポートの一環として、生前に遺影写真や資産情報等をインターネットを利用して、半永久的に預かるサポートを提供している。いわば、「インターネットを利用して、あなたの大切な人々と、豊かなコミュニケーションを叶える」サポートである。
- 遺影写真や資産情報だけでなく、自分史を綴ったり、思い出の写真や映像、家族等へのメッセージ等を保存することもできる。こうした人生の記録を楽しみながら、簡単に行えるように、エンディングノート等、独自のフォーマットを用意している。
- また、一人で利用するだけでなく、夫婦と一緒に利用したり、大切な家族や友人を招待したりすることも可能である。このサポートを通じて、コミュニケーションの輪を広げることができる。

##### 【事業開始のきっかけ】

- 本業である葬祭サポートの会員に対するサポートの一環として、生前に遺影写真、資産情報、大切な人へのメッセージ等を預かるサポートを開始した。
- その他にも、事前準備を促進・支援する取組として、エンディングノートの書き方セミナー等といったサポートを提供している。

#### <当該サポートの主な機能・特徴>

- 当該サポート(サイト)の主な機能や特徴は以下のとおりである。
  - ①エンディングノート: かけがえのない人生を振り返る
    - ・家族に伝えたいことや、自分の生い立ち等を書き記すことができる。
  - ②住所録: 大切な人にメッセージを残す
    - ・親戚や大切な友人を登録できる。葬式に参列してもらいたい人を登録したり、予め登録しておいたメッセージを死別後に送信したりできる。
  - ③資産情報: 資産を簡単・円滑に管理する
    - ・預貯金、不動産等の資産情報を整理して保管できる。これにより死別後の家族等の負担を軽減することができる。
  - ④思い出の写真等: 予め指定した家族等に思い出を残す
    - ・予め用意したエンディングノート等を、指定した家族等だけが閲覧できるようにインターネット上で管理する。
- エンディングノートや不動産情報を登録する画面は、以下のように記入しやすいようフォーマットが用意されている。



## 1. 事前準備期のサポート

### ■【事例】信託銀行①H(家族等のための信託サポート)

#### 事例の概要(サポート内容・理念・経緯等)

##### 【サポート内容】

- 自分自身に万が一のことがあった場合、家族等のために死別直後に必要となる一定の資金を残す信託サポートである。受取人は、契約時に予め指定しておく。
- 通常、故人の預金を引き出す際には、全ての相続人の確認等、様々な手続きが必要となるが、当信託サポートでは、受取人として指定された家族等(3親等以内の親族)は、「死亡診断書等」、「印鑑証明書」、「実印」、「通帳」さえあれば、最短で即日、信託金を受け取ることができる。
- また本人が入院した場合に、本人の代わりに、代理人に指定された受取人が信託金から医療費等を支払うことも可能である。
- このように自分自身に万が一のことがあった場合に、家族等について金銭的な心配を抱えている人は多く、当サポートの利用者は増えている。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 死別後は、たとえ配偶者や子供といった家族であっても、相続手続きが終わるまで故人の預金を引き出すことはできないが、葬儀費用や家族の当面の生活費等、直ぐに資金が必要となる場合がある。
- こうした問題に対して、信託銀行としてできることはないかと考え、当信託サポートを開始した。
- 相続は、その金額の大小にかかわらず、誰もが直面する問題であると考えている。

#### <サポートの具体的な内容>

- 当信託サポートの流れは、以下のとおりである。



- 当信託サポートは、以下のような懸念や課題をもっている人を対象としている。
    - 死別後、相続手続きが終わるまで預金は引き出せないが、葬儀費用や家族等の当面の生活費が心配である。
    - 相続手続きは、提出書類も多いし、時間がかかりそう。家族等は大変だろう。
    - その前に、もし自分が入院したら、入院・治療費の支払いで、預金の引き出し等、家族等に面倒をかけたくない。
- 解決
- 当信託サポートでは、相続時にすぐ必要となる資金の準備ができ、支払いの手続きも簡単である。
  - オプションのサポートとして、医療費等の支払い時に当サポートを活用して、資金を引き出すことも可能である。

## 2. 高齢期のサポート

### 2. 高齢期のサポート

#### ■【事例】ハウスクリーニング事業者②A(墓参り・墓掃除代行)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

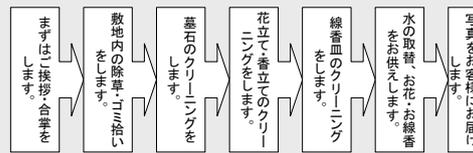
- 本業のハウスクリーニング業の一環として、墓参り・墓掃除の代行を行っている。1件あたりの作業時間は1.5時間程度である。
- 墓の掃除作業完了後には、墓参りを行うとともに、「作業前後の写真」、「お礼状」、「受領書」、「完了報告書」を作成し、依頼者に対して報告している。
- 利用者は、40歳から50歳までの世代が中心となっている。あくまで本業の一環のサポートという位置づけであり、利用者数は年間約30から40人以上である。また、国内からだけでなく、海外からの依頼にも対応している。
- 故郷を離れ、墓参り・墓掃除ができない場合でも、受付窓口は一つであり、日本国内であれば全国対応している(離島など一部地域を除く)。
- また、ハウスクリーニングで培ったノウハウを活かし、家事代行事業も展開している。高齢者向けには、ヘルパーの資格を持った家事代行スタッフが介護保険では対応することができない様々な要望に対する生活サポートを行っている。

###### 【事業開始の経緯・問題意識等】

- 本業であるハウスクリーニング事業の顧客からの要望に応える形で、当サポートを開始した。
- もともと全国にフランチャイズチェーンがあることを活かして、当サポートの事業運営を行っている。

##### <サポートの具体的な流れ>

- 注文からサポート完了までの流れは、以下のとおりである。



### 2. 高齢期のサポート

#### ■【事例】地方自治体②B(墓参り・墓掃除代行)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

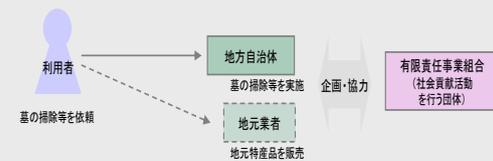
- 都会で働く人々に対して、地元に残した気掛かりの解決を支援することをコンセプトに、地元の墓参り・墓掃除代行等のサポートを提供している。また、庭掃除や買い物等が困難となった高齢の親のため、それらを代行するサポートも提供していきたいと考えている。
- なお料金の一部で、特産品を地元業者から購入する仕組みになっており、地元の活性化に同時に資するようになっている。
- 当初、東京在住の県民会のような会合にチラシを配ったが、結果的には、新聞や口コミで当サポートの存在を知ったというケースが多い。

###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 当サポートを企画した、有限責任事業組合の理事長は、自身のビジネスは軌道に乗っていることから、ライフワークとして10年前ぐらいから社会貢献活動を積極的に展開している。
- その中で、大学を中心とした社会起業家の育成を考え、資金の援助をしながら活動してきた。資金のリターンを求めめるのではなく、得られたリターンは、次の新たな事業の資金に役立ててもらおうといった好循環を作ることが活動の理念となっている。
- その中で、町との取組が始まり、若い町長のチームを作ることになった。49歳以下の町長に声を变えたところ思った以上に集まってもらうことができた。大学生の知恵・活動を通して、いろいろな地域の課題を解決してきた。
- その一つが、このプロジェクトであり、都会で働く人が地元に残した気がかりなことを解決する活動である。なおコンセプトは、厳しい都市で頑張っている人に対して、地元では、ちゃんとお墓を守ってあげるから、頑張っていて欲しいという想いである。

##### <当サポートの仕組み>

- 当サポートの企画は、様々な社会貢献活動を行っている有限責任事業組合によるものである。実際のサポートの運営については、地方自治体が行っている。
- このように地方自治体が実際の運営を行うことが重要である。利用者からすると、信頼感につながる。



##### <今後の課題・展開>

- 今後は、墓参り・墓掃除代行だけではなく、庭掃除や買い物代行等に対処していきたい。地元に残された人は高齢化が進んでおり、庭掃除や買い物等を行うのが大変になってきている。そこで、庭掃除、買い物等を地元の高齢者に代わってしてあげられると、都会にいる人も安心すると考えている。
- 無断で、この名称を使って同じ活動をしている自治体があるが、それは別に構わない。そもそも社会貢献活動であり、無償の事業と考えていた。

## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】介護事業者②C(在宅療養者向け定期訪問)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

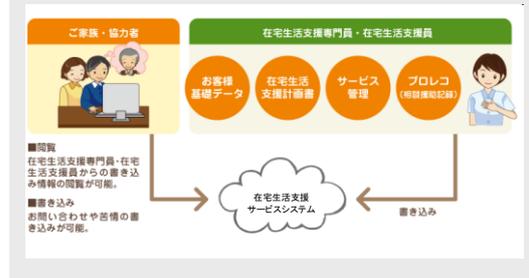
- もともと行っていた事業の付加的なサポートとして、社会福祉士が在宅療養者を定期訪問し、様子を確認するだけでなく、高齢者からの様々な相談に対応するサポートを開始した。
- 介護保険ではカバーできない部分について私費利用している人がいたこと、今後、在宅療養者が増えることを見越して事業部化をした。介護保険外の私費のサポートを利用している人は多い。当社の利用者は、比較的嗜好性が高い人が多い。また、一般的に嗜好性が高い人が多くなっている。
- 当サポートについて、最初の利用申し込みは家族から行われる場合が多い。実際に利用してみると、こういったサポートを利用することで外出等ができることがわかり、利用者本人から問い合わせが入るようになることが多い。

##### 【社会福祉士が訪問することのメリット】

- ケアマネージャーでは対応することが難しい、「どう老いてどう死にたいか」「財産の問題」「家族との関係」等といったテーマについて、利用者の相談にのりながら、必要な専門家を紹介することが可能である。
- 受け付けた相談に対して計画を立て工程に落とすことで、今後判断能力がなくなった場合にもある程度網羅的に対応できるようなサポート提供が可能である。
- 本人の状態を把握するためには、定期的な訪問が欠かせない。また、見守りによって生活のリズムの把握も可能となり、リズムが変わった際に何らかの変化があったことを把握することが可能である。
- 定期的な訪問を行うことにより、服薬状況についてもチェックをすることができ、緊急搬送の場合等の対応をスムーズに行うことができる。

#### <在宅生活支援サポート(WEBシステム)>

- 社会福祉士の資格を持つ専門相談員が定期訪問などの相談の記録を書き込み、家族、ケアマネジャーなどが情報の閲覧が可能
- 問い合わせや苦情の書き込みが可能
- 登録されている情報は、基礎データ、日常的な金銭管理、在宅生活支援計画書、相談援助記録の閲覧、メッセージ、緊急カード / 等
  - 日常的な金銭管理: 利用された金銭の記録(使途・金額等の出納帳)
  - 在宅生活支援計画書: 利用者のライフプラン等
  - ケースの記録: 日々の様子やサポート内容(介護、医療関係者からの書き込みも可能)
  - メッセージ: イベントや利用者の様子をピンポイントに配信
  - 緊急カード: 急変した際に救急医療期間との連絡を取りやすくするための医療情報



## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】NPO法人②D(高齢者の親をもつ子供向け介護支援)

#### 事例の概要(サポート内容・業務開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

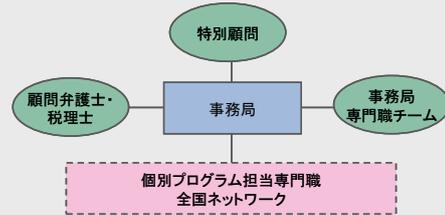
- 高齢者の親をもつ子供に対して、介護等、親の世話に関する問題について、相談に応じ、関連施設を紹介するなどのアドバイスを行ったり、必要に応じて訪問介護等のサポートを提供したりしている。
- 対応する問題については、特に制限を設けておらず、介護、日常生活の支援、余暇の支援まで、利用者のニーズに合わせて幅広く対応している。
- 料金については、年会費に加え、個別のサポートを提供する度に課金する仕組みになっている。なお個人契約だけでなく、法人契約も行っている。
- 対象は、高齢者の親を持つ子供としている。特に、遠方で暮らしている場合を主な対象としている。このように、高齢者の子供が契約や料金の支払いを行うため、トラブルが生じることはなく、これまででもトラブルが生じたケースは無い。

##### 【業務開始の経緯・問題意識】

- 海外に駐在している者にとって、日本に残っている親の世話をすることが非常に大変であるということを知り、そうした人々をサポートしたいと考え、この事業を開始した。
- 利益を目的とするような事業ではないし、そもそも利益目的で成り立つような事業ではないため、NPO法人という形にしている。当初は、利用者が少なく、収入もほとんど無い状況で、維持することも大変であった。
- 事業開始にあたっては、事務局自体にも有資格の専門職が在籍しており、その他、顧問弁護士・税理士、特別顧問、事務局専門職チームの協力体制を整えているため、それほど大きな障害もなく対応して来られた。

#### <専門職全国ネットワーク>

- 当該組織の運営に当たっては、専門職を含む事務局が中心となり、顧問弁護士、税理士等とも連携し専門職全国ネットワークを活用して行っている。
- また、訪問介護等の個別サポートの実施については、専門職ネットワークに登録された専門職が担当している。専門職は看護師、社会福祉士等の有資格者により構成されており、必要が生じたときだけ、委託契約を結び個別のサポートを実施してもらうことになっている。



#### <ビジネスモデルの特徴>

- 上記のような形で、専門職を登録方式とすることによって、継続性を維持している。また、連携している専門家についてもボランティアで働いている。ボランティアの上になり立っている取組である。
- 個人会員だけでなく、法人会員も受け付けている。法人会員であれば、当該法人の従業員は、無料で介護に関する相談を受けられる。ただし、その後、訪問介護等のサポートを受ける場合には、その都度料金を支払う必要がある。しかし、多くの場合、相談だけで問題が解決する。

## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】介護事業者②E(訪問看護サポート)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

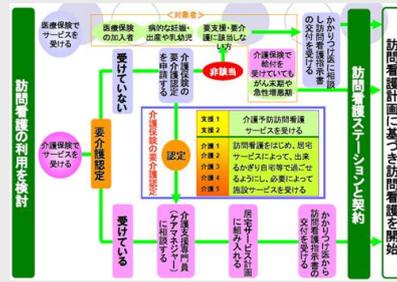
- 「在宅ケア」として、訪問看護ステーションを設立し、訪問看護サポートを提供している。病院との連携もはかり、在宅での生活が円滑に行えるよう、退院前から調整するようにしている。
- 利用者が自らの尊厳を守られながら、住み慣れた自宅で生活を続けられるように、生活リハビリテーションも含めてサポートしている。
- 当訪問看護ステーションでは、長年の訪問看護の実践を通じて、地域の在宅医療・福祉の経験を蓄積している。その経験を生かし、質の高い訪問看護サポートを提供している。全ての利用者のケアについて、在宅ホスピスで学んだ「ホスピスマインド」を活かして訪問看護サポートが提供できるようにしている。
- 関連するNPO法人と連携しながら、地域貢献も図っている。病気が治らないとわかっていても、住み慣れた地域で暮らしたく続けたという願いを叶えるには、公的なサポートだけでは十分と言えない。そこで、NPO法人と連携しながら、そうした願いに応えるための活動を行っている。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- ライフケアシステムでの「在宅ケア」の精神を受け継ぎ、訪問介護ステーション制度が発足した平成4年に、医療法人の訪問介護ステーションとして活動を開始した。その後、医療法人解散に伴ない有限会社を設立した。そして、新会社法にて株式会社に変更した。
- 利用者本人と家族等と医療関係者が、共有する場で作り上げるのが「在宅ケア」であり、訪問看護師は利用者側に向けた調整役であるというのが設立当初からの考え方である。

#### <サポート提供の状況>

- スタッフの体制は以下のとおりである。
  - 常勤 8名 非常勤9名(常勤換算7名)
  - このうち 保健師資格保有者 9名
  - ケアマネージャー資格保有者 7名
  - ケアマネ専従 社会福祉士・介護福祉士 常勤 PT 1名 常勤事務 2名
- 新宿区市谷を中心にサポートを展開しており、利用者数・訪問件数は以下のとおりとなっている。
  - 1ヶ月平均の利用者数 約160名
  - 1ヶ月平均の延べ訪問件数 960回
- 訪問介護サポートを受けるまでの流れは以下のとおりである。



## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】NPO法人②F(日常生活から最期の時を迎えるまでを支えるトータルサポート)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート概要】

- 生活支援に関する契約を行い、親族等に代わって生活支援に関する活動を実施している。行政では支援できない日常生活から最期の時を迎えるまでを支えるサポートを展開している。
- 契約者の親族等の代わりとなり、本人と家族等の双方に対して安心を与えるサポートである。いずれも介護保険の適用外である。
- 高齢者や障害者を対象としているため「シンプルに」、「わかりやすく」を基本としている。
- 基本的なサポートの形態では、一定額を前受け金として預かる契約であり、預かり金の保管は弁護士法人が行っている。本人、弁護士、当NPO法人の三者が契約を結ぶ形態になっている。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 元々は、墓石販売・葬儀の事前契約をやっていた。ある老夫婦の夫が亡くなったときに、その妻が老人ホームへの入居を希望していたが、身元保証人がいないと入居できないとのことだった。知り合いの弁護士とも協議を行い、法人が身元保証人になる方法を調べたのがきっかけであり、発端は偶発的である。
- その後、身寄りのない高齢者が身元保証人を必要とするケースは非常に多いことが判明し、このサポートを開始した。
- 会員は累計で5000人を超えている(生存する会員は約2800人)。市場が大きいことも影響したが、国や自治体では提供していないサポートと言うことで、多くのメディアが取り上げてくれたことが大きい。

#### <具体的なサポート>

- 生活支援
  - ・24時間365日対応であり、何かあった場合は連絡を受け支援に訪れる。
  - 生活支援の内容は、「緊急」、「専門」、「一般」に分かれている。
- 葬送支援
  - ・地方自治体による葬祭扶助によって行う。7～8割は会葬者がいない、いわゆる「密葬」となる。死別後の各種手続きについても支援している。
- 任意後見制度
  - ・費用もかかるため、安易に任意後見の利用は勧めない。
- 法定後見制度
  - ・グループホーム等を紹介することになる。
- 生活困窮・生活保護
  - ・生活保護・困窮者は、会員の45%を占めている。特別に低価格の契約である。地方自治体による葬祭扶助があるが、葬送費用を補うために、会員や相続人の寄付によって成り立つ「福祉基金」が存在する。

#### <今後の展開>

- 更なる関係者ネットワークを構築し、多様なサポートを提供できる工夫をしていきたい。
- 事業性質上、持続的な事業活動は必要であり、そのための制度設計と人材育成が課題となる。
- 会員に対して均一的なサポートを提供し、更なる拡大を図るためには、一定程度のサポートの標準化、マニュアル化も必要であると考えている。現状は個々人の倫理観や裁量に委ねられている部分がある。
- 類似する悪質なサポートの排除も必要。全体の信頼性低下に繋がっている。特に高齢者を対象としたサポートでは信頼性の確保は不可欠。

## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】社会福祉協議会②G(福祉サービス利用援助事業:福祉サービスの利用相談や日常的な金銭管理等の支援)

#### 事例の概要(支援内容・事業開始の経緯等)

##### 【支援内容】

- 認知症等で、判断能力が十分でない人に、ホームヘルプサービスや配食サービスといった福祉サービスの利用、預貯金の出し入れ、公共料金の支払い、日常生活に必要な様々な契約の支援を行う。
- 認知症高齢者、知的障害者、精神障害者等で、判断能力が十分でない人を対象としている(認知症等の診断を受けている人に限っているわけではない)。ただし、当サービスを利用することについては、事業の理解や、利用意思のある人を対象としている。
- 利用者数は、年々増加している。ただし、当サービスを必要な人が自分自身で初回相談に申し込んでくれることはあまりなく、異変に気づいた家族等や近隣の地域包括支援センター等の関係機関からの紹介によって支援を開始することが多い。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 福祉サービス利用援助事業は、平成12年介護保険制度の導入、社会福祉の増進の社会福祉事業法等の一部を改正する等の法律の施行により、福祉サービスが措置から契約へと移行する中で、利用者が不利益にならないよう守る仕組みの一環として規定された。

##### <福祉サービスの利用制度化>



- 実施主体は都道府県又は指定都市の社会福祉協議会となっている。当社会福祉協議会は、モデル事業として先駆けて開始し、12年ほど経過している。

##### <具体的な支援の内容>

- 具体的な支援の内容としては、以下のように大きく分けて3種類の支援を提供している。

##### 福祉サービスを安心して利用できるようなお手伝いします。

- さまざまな福祉サービスの利用に関する情報の提供、相談
- 福祉サービスの利用における申込み、契約の代行、代理
- 入所・入院している施設や病院のサービスや利用に関する相談
- 福祉サービスに関する苦情解決制度の利用手続きの支援
- 成年後見制度に関する相談や利用支援



##### 毎日の暮らしに欠かせない、お金の出し入れをお手伝いします。

- 福祉サービスの利用料の支払い代行
- 病院への医療費の支払い手続き
- 年金や福祉手当の受領に必要な手続き
- 税金や社会保険料、電気、ガス、水道等の公共料金の支払い手続き
- 日用品購入の代金支払い手続き
- 預貯金の出し入れ、また預金の解約の手続き



##### 大切な通帳や証書などを安全な場所でお預かりします。

- 希望される通帳や印鑑、証書などの書類をお預かりします。
- ※保管できるもの(書類等)
  - 年金証書、預貯金通帳、証書(保険証書、不動産権利証書、契約書など)
  - 実印、銀行印、その他実施主体が適当と認めた書類等(カードを含む)
  - ※宝石、書画、骨董品、貴金属類などはお預かりできません。



##### <今後の展開>

- 地域コミュニティとより連携し、個別のサポートを単体で提供するだけでなく、それらを有機的につなげて、一体型のサポートを展開していきたいと考えている。
- 地域コミュニティが事業の利用が必要な人の存在に気づけるような仕組みを整備していきたい。

## 2. 高齢期のサポート

### ■【事例】医療法人②H(宗教者が運営する高齢者向け住宅)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 認知症高齢者向けに寺院内の医療機関が住宅施設(グループホーム)を提供している。最期のときまで、その人らしくいられることをコンセプトとしており、一人ひとりの入居者に対して広々とした個室を用意している。コンセプトや設計については、スウェーデンの取組を参考としている。
- 宗教者であり医師である住職と、医師であるその妻が中心となって施設を運営しており、この他にも、緩和ケアを行う診療所や介護老人保健施設等、ライフエンディングにかかる施設を一体的に展開している。
- 施設入居時には、本人の延命治療等に関する意思を確認し、記録しているが、認知症の高齢者の場合には、施設に入る段階では手遅れである。認知症を早期に発見し、本人が自分自身で考えることができるうちに、そうした意思を確認し、記録しておく社会的仕組みが必要である。
- そうした事前指示がなければ、治療の方針等について家族等の指示に従わざるを得ない。家族等は、どんな状況であっても長生きしてもらいたいと考え、自分の場合と違って、延命治療を拒否して苦痛緩和を優先することができない。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- もともと、医療機関で緩和ケアを始めた。開始当時、多くの医療機関では終末期患者に対して宗教的ケアが提供されないことに疑問を感じていた。
- その後、仏教本来の教えに従い、また患者にその人らしくいられるよう、ライフエンドとその後をシームレスに(継ぎ目なく)サポートするため、事業の範囲を徐々に拡大してきた。

##### <施設>

- 施設のコンセプトや設計については、スウェーデンを参考にしている。
- 最期のときまでその人らしくいられることをコンセプトとしているため、個人のプライバシーが確保されるように、一人ひとりの入居者に対して広々とした個室を用意しており、個室に家族等を招くこともできる。また庭園等の設備も兼ね備えるようにしている。



##### <一体型のサポート>

- ライフエンディングにかかる様々な施設を一体的に展開しており、一体型のサポートを提供している。
  - 有床診療所(入院19床)
  - 居住介護支援事業所、通所介護事業所
  - 介護老人保健施設、グループホーム
- さらに今後、リハビリセンターの運営を開始する予定である。
- もともと日本の寺というものは、学校であり、病院であり、福祉施設であり、薬局であった。そして僧侶の役割も幅広かった。仏教僧侶が学んだ五明とは、論理学、言語学、工学、医学、仏教学の五つである。

### 3. 終末期のサポート

#### 3. 終末期のサポート

##### ■【事例】診療所③A(医療、介護・看護、居住の一体型支援)

###### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 人生の最終章を温かい空間で過ごしてほしいという思いから、日常生活に比べて制約の多い病院ではなく、家庭にいるような気持ちで過ごせて、必要ときに医療・看護・介護が利用できる一体型の集合住宅を終末期患者に提供している。診療所(往診・訪問診療)、訪問看護・訪問介護ステーションを併設している。
- 在宅医療サポートを中心に提供しており、在宅医療を受けていた患者を集合住宅にシームレスに受け入れることも可能である。また、在宅で看取るケースも多く、在宅での看取り率は約90%である。
- 当集合住宅では、終末期患者の人生や日々の記録を記すためのノートを用いた傾聴ボランティアも行われている。傾聴ボランティア以外にも、医師や看護師等が自主的に患者のための取組ができるような環境が整えられている。

###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 当法人の理事長が高齢者医療に携わる中で、日々の疑問や悩みを何とか改善できないかと考えた末に、このような医療、介護・看護、居住を一体的に支援する仕組みにたどりついた。
- 医療機関、訪問看護・介護ステーションから、賃貸集合住宅にサービスを提供するということで、囲い込みであるとの批判を受けたこともあったが、これが究極のチーム医療であると考えている。
- 当方ではハードを保有していない。高齢者福祉施設の一部を借りている。費用がほぼ人件費だけであるので、事業として継続性を担保することができる。
- 死に対する偏見がまだあり、施設から遺体を運び出す際に、近隣から見えるということでクレームを受けたことがあった。しかし、正面から帰っていただいている。

###### <医療、介護・看護、居住の一体型支援>

- 医療、介護・看護、居住を一体として支援することで、シームレスなサポートが可能となっている。例えば、受けるサポートが変わっても担当する医師や看護師等が変わらないということは、大きな安心感につながっている。
- また、一体としてサポートを提供することによって、収益のバランスをとることができている。訪問介護・看護は単独で採算に乗せることが難しいので、診療の収益から補填している。
- ただし、居住・食事については収支を切り離している。これらは医療とは分離すべきと考えている。そういった信念があり、施設の設定には関与せず、他の組織が保有する施設を利用している。我々は医療分野だけに専念している。



###### <医療に関する課題・懸念>

- 医師がグリーフケアまで担うことには疑問がある。私自身は葬儀への出席までと決めており、遺族の会等は企画していない。グリーフケアをするくらいなら、それまでの治療を一生懸命行うべきである。それが、あとあと遺族にとってのグリーフケアになると思っている。
- 医師は自分の望む方向に患者や家族を誘導することができてしまう。無意識であったとしても、十分な選択肢を提示しないことによって、誘導してしまうこともある。きちんと、様々な選択肢を提示することが重要だと考えている。こうした問題意識もあり、本人と家族の意思決定を支援するプロセスの策定に携わっている。

#### 3. 終末期のサポート

##### ■【事例】NPO法人③B(地域と連携した在宅等での看取りの支援)

###### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 在宅医、訪問看護師、ヘルパー、ボランティア等の様々な職種チームが、在宅等での看取りを支援する。スタッフは24時間体制でケアを行い、家族等が看取りに専念できるようにスタッフが食事を作ったり、家族等の世話もしている。
- グループホームや緩和ケア病棟等、現在の制度では対応できない終末期患者等の受け皿を提供し、エンドオブライフケアの質を向上させるためにこの取組を始めた。
- 平成16年6月に施設を開設した。使われていない民家を借りて患者を引き取り、そこに在宅医や訪問看護師、ヘルパー、ボランティア等様々な職種チームが協力できると条件が整った民家を借りることができたことでサポートを提供することが可能になった。複数の施設を開設している。これまでに33名の看取りをしてきている。

###### 【看取りを通じて自然と死を受け入れ、生き方を学ぶ】

- 利用当初は、家族等が苦しむ姿を見たくないと思うが、無理な延命治療は行わず、専門家の支援も受けられるため、徐々に慣れ、安心して看取ることができるようになる。患者が少しずつ弱っていくなかで、引き戻せないところまで来て、家族等が自然と受け入れていくことができる。
- 無理な延命治療は行わず、医療の支援を受けながら、自然な終末期の経過を見守る。看取りの経験の少ない家族は、当初はどうなっていくのか不安でいっぱいになるが、傍らに寄り添い、声をかけ、細くなっていく息づかいをききながら、死を受容していく。看取りをすることで家族等が成長することができる。看取りを通じて、患者が生き方を残された家族等に教えることができる。

###### <同法人の成り立ち>

- 当NPO法人は、在宅がん患者のサポートをするなかで、患者本人と家族等を見守り、家族等を亡くした不安や悲嘆をケアすることを目的に、有志が集まってはじめてホスピスケアの勉強会から発足した。その構成は、医師、看護師、薬剤師、介護施設の運営者、遺族、患者経験者等さまざまであった。翌年には、「臨床における全人的ケアの教育プログラムを開講、平成11年には、地元の地方自治体と医師会に「緩和ケア病棟及び在宅ホスピス支援センター設立の要望書」を提出し、平成12年にNPO法人格を取得し、NPOとしての活動を開始した。

###### <地域としての看取りの補完機能の充実化>

- 施設を作る際に、候補となる民家を探すことが非常に大変であった。空き家自体は多いが、近所にホスピスや葬祭業者、介護施設を作ることについて地域住民のイメージが悪く、認めてもらうことが難しい。住民の意識を変えることが必要で、地道に情報を出して、伝えていく取り組みが必要である。
- 高齢者を病院や施設に閉じ込めておくのではなく、地域の中で老いていく、死んでいくことを見せしていくことが必要である。効率的な医療、介護を追求した結果、地域から看取りが失われてしまっている。生の延長線上で死を考えることができるように、人間の営みの一部としての死を穏やかに迎えることができるように、生と死が生活の中にあつた本来の文化を取り戻すことが必要であり、地域として看取りの補完をできるようにすることが重要である。
- 今後は当施設を中心としたターミナルケアやグリーフケアの取り組みを通して、エンドオブライフケアの質を上げ、サポートの輪を広げていく。

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】介護事業者③C(終末期に特化した保険外のオーダーメイドの訪問看護)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 終末期患者に対して、保険外のオーダーメイドの訪問介護サポートを提供している。
- 患者の治療のためだけというわけではなく、その家族等が後悔しないためという観点からも看取りが求められている。患者は、余命が分かっていることから、助かることはない。しかし、家族は、看護師が一生懸命ケアしてくれていることは分かる。一生懸命やっているということ、一生懸命やってくれていると思ってもらえることが、当社のサポートの本質である。
- 残された家族等も、自分が最後に何かをやったという思いがあると後悔をしない。当サポートを利用する患者の家族等は、後悔をしたくないという思いが強い。近親者の最後を自分のできるベストで終えたい、送りだしたいという思いがある。そのための1つの方法としてプロによるサポートを利用して、やるべきことはやりたいたいと考える。このことは、残された家族等のグリーフケアにもなっている。
- 利用者の8割は余命3ヶ月の末期がん患者であり、その年齢層は様々である。残り2割は生まれつき神経に麻痺がある方、脳性麻痺や脳梗塞をおこして寝たきりになった方等の神経難病の方である。
- 現在は、大都市だけでサポートを提供しているが、これは富裕層が多いからというわけではなく、看護師を集めやすく活動をしやすいという理由からである。看護に求められることは、無限にあるため、今後も様々なサポートを展開していかなくてはならないと考えている。決して富裕層だけを対象としたわけではない。
- 今は枠組みをつくっているところである。今当社が提供しているサポートも完成型ではなく、今後、価格や仕組み等についても改善していく。まだまだ、発展途上のサポートであると認識している。

###### ＜金銭に対する価値意識の変化＞

- 当社の看護師は、当サポートを利用すると患者が負担する金額が分かっているため、その対価に見合うサポートを提供してはいけないと常に考えながら働いている
- また、働いている看護師は、自分の家族や親族を看取る際に後悔をしている人が多い。後悔しているだけに、自分の持っている手技を全力で提供しようとする。
- 看護師はプロ意識をもってケアを行いたいと考えており、患者はプロ意識を持っている人達を求めている。
- 患者にとって、人生の最後になると支払う金額はあまり関係がない。支払うからには、きちんと仕事をして欲しいという思いが強い。特に終末期にはよりその傾向が顕著になる。
- 人生の終末期になると、お金に対する価値観が変わってくる。価格が高くて、自分の人生の終わりがわかった段階で受けるサポートが満足できるものかどうか優先事項となる。また、依頼してくる家族も、患者が働いて得たお金を患者本人のために使って欲しいと考える方が多い。

###### ＜100%患者のニーズに応える＞

- 人生の終末になればなるほど、ニーズは明確になる。
- 介護はニーズが無限にあるが、保険外の自由診療であるからこそ、どのようなニーズにも応えることが可能である。
- 死が近いから毎日がいとおしくなる。これまで過ごしてきた平凡な1日の日常を取り戻したい。特別なことは特にない。

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】病院③D(終末期患者の最期の願いに応える医療機関)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 終末期の患者の「いきつけの理髪店に行きたい」、「娘の結婚式に出たい」といった最期の願いに、医師や看護師等がボランティアで応えている。
- また、地域のNPO法人等とも連携して送迎サポート等も提供しており、地域共同体の核として、地域に根付いたサポートを提供している。最近では、弁護士による無料法律相談会を院内で行っている。
- 地域の患者だけでなく、地域外から問合せを受けることもある。多くの高齢者が、信頼して任せられる病院を探していると思う。

###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 患者の願いに応えたいという思いから、自然発生的に始まったものである。例えば、訪問看護についても、制度化される前から、看護師が訪問して床ずれ対策を行うなど、ボランティアで自発的、必然的に行ってきた。
- このように昔から、患者に対してできるだけのことはやるという習慣がある。もちろん、患者の願いに応えられないときには、断ることもあるし、家族で対応してもらえない場合にはそのようをお願いしている。
- こうしたボランティアをしながらも当該病院は黒字を維持している。黒字の部門、赤字の部門があり、それぞれのバランスをとって、全体として黒字化しているということである。
- 常にチームで対応しており、一人に負担が集中することがないようにしていることも、こうした取組を継続できている理由である。
- また、支援団体による協力・共同も大きい。基金を募り、高額医療機器の購入や施設拡充等の資金に当てている。当支援団体は、資金面で支援するだけでなく、第三者チェック機関としての機能も果たしている。

###### ＜提供サポート＞

□外出サポート(患者の最期の願いに応えるサポート)

- 終末期の患者の外出には、大きなリスクを伴う。実際に、外出1週間後に亡くなったケースもある。
- そのため、家族と医師や看護師との信頼関係がなければできない。事業として実施することは不可能だと思う。当病院としても、介護付き旅行等を行っている事業者と連携することは考えていない。

□送迎サポート

- 通院が不便であるという、利用者の声や地域アンケートをきっかけに、福祉有償運送業のNPO法人を設立し、送迎サポートを開始した。当NPO法人では、買い物や電球取替え等のサポートも提供している。

□遺族訪問

- 在宅医療のスタッフを中心として、遺族訪問を実施している。どのようなケアを受けるかで、家族のその後の人生もかわってくる。

###### ＜医療に関する課題・懸念＞

- 老人ホーム等が次々と設立されているが、今後、そこの入居者を診る病院が不足すると懸念している。老人ホーム等から、一度病院に入院すると、もとの施設に戻れなくなってしまう事例も多い。1ヶ月の入院で籍を切られてしまう。別の施設に入居するということになっても、生活がぶつ切りになってしまい、新たに人間関係等をつくりなおさなければならない。
- 医療の格差が生じていることに懸念を感じている。そうしたこともあり、差額ベッド代を徴収しておらず、また無料低額診療も実施している。
- 臓器移植について、予め自分で判断しておくことが求められているが、こうした流れに懸念している。「決めない自由」もあるはずである。そういったことを考えたくない人もいる。

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】診療所③E(医療機関での宗教関係者による宗教的なスピリチュアルケア)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- がん緩和ケア専門の有床診療所であるが、宗教法人が設立主体であることもあり、通常の医療スタッフの他に、医療機関付き僧侶(「ビハラー僧」)が常駐し、患者及びその家族等に対する宗教的なスピリチュアルケアを提供している。
- 様々な職種の専門家が患者に携わることで、チームとして多方面から患者及びその家族等のケアにあたることができる。その中においてビハラー僧侶も専門家の1人としてそれらのケアに携わっている。

###### 【対象・利用者の反応】

- 「死生観」は「死」と「生」が切り離されてしまっているが、仏教用語は「生死(しょうじ)」で1つの言葉である。仏教の死生観は、私たちのいのちを「生・老・病・死」としてとらえ、死をも内包したプロセスで考える。
- 現在、葬儀の際にはじめて僧侶がくるという感覚であるが、僧侶は生前の領域から死後に至るまで活動している。今は、その部分が切り離されてしまっている。
- これは教育現場でも同様で、「生きる力」を育むための教育は行われているが十分とはいえず、医学、看護学の分野においても重要な課題である。医師や看護師にとっては病気が治すものであって、死は敗北の世界と捉える傾向がある。

###### 【事業開始の経緯・問題意識等】

- 仏教がもともと課題としてきた、生・老・病・死の苦しみや悲しみを抱えた人々を全人的に支援するケアとして、仏教と、医療、福祉分野との連携による「ビハラー活動」を実践するために、隣接する特別養護老人ホームと一緒に設立された。緩和ケアと終末医療に携わっている。
- 患者やその患者の家族等で支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげることを目指している。
- 願われないのちを共に生き、仏の慈悲に照らされている「ぬくもり」と「おかげさま」の心を大切にしながら、安らぎの医療を実践している。

###### <病棟における僧侶の役割>

- 朝夕の勤行と法話
- お部屋まわり：共感的傾聴。患者本人が導いてくださる心の動きにあわせた会話(対機説法)
- スピリチュアルケアの役割も担う
- 家族ケア：家族との会話、お参り、法話など
- グリーフケアとしてのお別れ会・初盆の主催
- チームスタッフの一員として：慰労スタッフとの情報交換やスタッフケア
- 医療従事者でない存在(全人的ケアに必須)
- 環境整備

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】結婚式場業者③F(結婚式等への参加支援)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 療養中等の祖父母や両親等が結婚式や披露宴への参列を可能にするために、在宅看護サポート提供事業者と提携し結婚式等に看護師が付き添うサポートを提供している。
- 契約形態としては、その利用者と在宅介護サポート提供事業者との間で直接契約を結ぶようになっている。当社が入らないのは、病状等の個人情報が必要以上に持たないようにするためである。
- 当該事業者を利用しなくても、新郎新婦や参列者が別途付き添いを手配したり、身内でケアすることも認めている。
- これまでも車椅子の方が参列することはあったが、ベッドで寝たまま点滴をして参加される方はそれほどいなかった。しかし、ここ2～3年の間に急激に増えている。

###### 【人の思いに丁寧に対応】

- 事情により結婚式等に参列することが難しい人に対して、結婚式等を挙げる人の「一目見せたい」という思いと、出席する側の「一目見たい」という両方の思いを、他の人と同じようにとげさせてあげたいと考えて、この取組を開始した。
- もともと「情」でおこなっているサポートである。そうした利用者の思いに対して、丁寧に対応していきたいと考えている。

###### <療養中でも結婚式への参列を可能にする>

- 晩婚化がすすみ、参列する祖父母・両親とも高齢化し、療養中であるケースが増加している。
- また、車椅子で列席されるお客様が増え、施設のバリアフリー化も進めたが、何かあった場合の時の事を考え介護面のサポートを入れたいと考えていた。看護師が2名常駐しているが、長時間個人に付き添うことは難しいため、在宅看護サポートを提供している事業者と業務提携することにした。
- 病院に入院中であつたとしても、医師の外出許可さえあれば、どのような状態の方でも参列することができるような体制は整えている。
- 介護面でのサポートを強化することによって他の結婚式場との差別化を図ることができると考えている。
- 現在は、都内の2ヶ所の結婚式場でサポートの提供を行っている。この後は、グループ全体に当サポートを展開していきたいと考えている。

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】ホテル事業者③G(自宅での結婚式への擬似参加をサポート)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 療養中等の理由から結婚式等への出席が困難である高齢者等のために、自宅にいながら結婚式等に出席している感覚を味わえるように、携帯端末を用いて、結婚式等の様子を中継するサポートを提供している。
- 結婚式等の中継については、単に映像を一方向で配信するだけでなく、会場と双方向でのコミュニケーションが可能となっている。
- 高齢者等の自宅に、サービススタッフとシェフが赴き、結婚式等と同じ料理の提供を行った。りする。



###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 新郎新婦にとっては大切な方に晴れの舞台を披露することができ、高齢者等にとっては自分が実際にその場にいられるような気分を味わってもらえるようにしたいと考え、このサポートを開始した。

###### ＜結婚式に出席しているような演出＞

- 結婚式に実際に出席しているような気分を味わえるような演出を実施している。
- 結婚式を専用のカメラマンが撮影し、リアルタイムで映像を配信する。
- 映像の配信だけでなく、双方向でのコミュニケーションも可能である。
- 結婚式と同じ料理を、自宅に派遣されるシェフとスタッフが提供する。



###### ＜事業の展開＞

- 通信環境の制約等もあり、まだ当サポートを展開しているエリアは限定的である。
- 携帯端末を利用したサポートは、結婚式のシミュレーションにも活用している。携帯端末上で、会場を360度見ることができサポートを提供しており、結婚式当日の会場を体験できるようにしている。

### 3. 終末期のサポート

#### ■【事例】旅行会社③H(介護が必要な高齢者の旅行を支援)

##### 事例の概要(サービス内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- ツアーコンダクター、海外ツアーガイド、ホテルスタッフ等の観光関連人材の育成や派遣を行っている。介護(トラベルヘルパー)付きの高齢者向け旅行の企画・実施している。
- 関連団体(NPO法人)において、介護が必要な高齢者の旅行をサポートする人材(トラベルヘルパー)の養成を行っている。

###### 【事業開始の経緯・問題意識等】

- 業者側の視点では、このサポートは、これまでではやられてこなかった、あるいは、実施が非常に困難とされてきた、介護が必要な高齢者に対する旅行の実施・支援という新たな付加価値の創出である。
- 介護が必要な旅行の場合、トラベルヘルパーが一人付き添うと、一般的には追加的に1日2万円かかる。その結果、海外に行くとなれば、自分の旅費が50万円+付き添いなどでプラス80万円かかる場合もある。これをどう判断するかだ。
- 元気が頃は、毎年何回も旅行に行き、相応の金を使っていた人は多くいる。ところが、気持ちは元気だが身体が不自由なケース、あるいは、元気で一緒に連れてくれる人がいないケースがある。そうすると、これまで年に2、3回旅行に行っていた人が、いきなり、どこにも行けなくなり、ストレスは相当なものだ。
- 当時、介護が必要な高齢者への旅行について、大手企業はやるかどうか聞いてみたが、やらないとのこと、当社でやっても良いか確認したところ、問題ないと言われ参入した。
- 当社が考えたのは、事業として解決できるサポートでないといけないということであり、ボランティアだけで続けていると、サポートの質が上がらないし、その結果、継続的にサポートを提供することができなくなる。

###### ＜QOLの向上＞

- 消費者(介護が必要な高齢者)からみれば、実現ができなかった旅行が実現できることで、得られる満足感が高く、新たなQOL向上となる。
- こうした人のニーズを満たすための人材育成については、介護ができることは絶対要件であり、ホームヘルパーの2級レベルが求められる。
- 最も大切なのは情緒サービスの領域である。参加者に心地よい余韻を残してもらえるか。参加者に感動、感激、感謝してもらえればリピートされる。
- 一日のうち7、8時間一人で行ける高齢者は、コミュニケーションに飢えている。そうした中で、五感を震わせるようなサービスができれば感激してくれる。
- 現状は、体が不自由な状況にいますが、旅行に行けるお金はあるという高齢者が、孫にお年玉をあげたいけどいけないとなった場合、それができれば、非常に満足度は高い。毎月の墓参りを支援するだけでも、参加者の満足度は高い。
- これまで、介護付きの旅行(墓参りなどを含む)が、そもそも不可能だとあきらめている状態だったが、行くことができると自信が出ると、期待値が上がってくる。もっと別の旅行に行けるのではないかという思いが出てくる。

###### ＜今後の展開・課題＞

- 最近進めているのは、トラベルヘルパーの現地化を進めている。各地にトラベルヘルパーが配置できれば、より効率的、効果的に旅行ができる。地域の雇用創出にもつながる。
- 旅行が円滑にできるには、たくさんの関係者が必要となる。その旅行のコーディネートが必要である。そのため、介護付きの高齢者の旅行がより広がっていくには、より多くの人に関わってもらう必要がある。
- 自治体の中に、最上町、富士河口湖町のように、介護付きの旅行者を受け入れる体制を整え、観光資源の差別化を図ろうとしているところがある。
- 公共交通機関に対して、要介護高齢者向けの運賃割引制度を投げかけている。

## 4. 死別後のサポート

### 4. 死別後のサポート

#### ■【事例】一般社団法人④A(死亡時の各種手続きのワンストップ支援)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

- 「官公庁関係の諸手続き」、「会社関係の諸手続き」、「社会保険・国民健康保険の諸手続き」等、死別後に必要となる60を超える各種手続きについて、様々な専門家がワンストップで支援している。この取組は公共料金や官公庁関係等に関する手続きを網羅的に支援する全国的に珍しい取組である。
- トラブルを収めることに手間と時間がかかることから、調停等を入れずして、円満解決に至るための能力(ファシリテーション能力、カウンセリング能力)が必要である。
- 遺産相続に関し、遺族等間によるトラブルは多くなっている。いざ死別後の遺産配分の段階によると、兄弟姉妹間での確執・トラブルが発生することになる。事前準備が必要であることは以前から指摘されているが、死別後のことはなかなか考えられない、考えたくないのが実際である。

###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 親が亡くなられた友人との会話がきっかけで開始した。その友人によれば、親との死別後の様々な手続きは大変煩雑であるので、それを一括で担ってくれるところがあれば助かるのだがとのことだった。
- このような社会のひずみを解決するためには、各専門家を束ねた集団を作り、その集団が個人に代わり、ワンストップで手続きを支援すればよいと考えた。
- 元々、社会保険労務士と行政書士の知人がいた。既にニーズが顕在化しており、その解決策があり、リスクがないことから社会後見が可能を取組と考えて平成21年に立ち上げた。

##### ＜具体的な手各種手続き支援と費用＞

- 「官公庁関係の諸手続き」、「会社関係の諸手続き」、「社会保険・国民健康保険の諸手続き」、「労災保険関連」、「公共料金等の諸手続き」、「各種書類持参(本人申請)」に関して、一括して手続きを支援するサポート。
- これらの手続き支援が基本セットで費用は低額に設定している。

「官公庁関係」 ■世帯主変更届 ■婚姻関係終了届 ■復氏届・分籍届 ■運転免許証の返却 ■障害者手帳の返却 ■その他12種	「社会保険・国民健康保険」 ■葬祭費 ■埋葬費 ■遺族基礎年金 ■未支給年金の受取 ■国民年金異動届 ■その他8種	「公共料金等の諸手続き」 ■電気・ガス等の変更 ■携帯電話解約 ■クレジットカード手続き ■インターネット契約解除 ■キャッシュカードの解約 ■その他13種
「会社関係の諸手続き」 ■死亡退職届 ■身分証明書返却 ■退職金手続き ■その他4種	「労災保険関連」 ■遺族補償年金支給請求 ■遺族補償一時金支給請求 ■未支給保険給付支給請求 ■その他2種	「各種書類持参(本人申請)」 ■児童扶養手当の申請 ■準確定申告 ■高額医療費請求 ■その他3種

##### ＜今後の課題＞

- まずは「ブランディング」が必要である。その後は信頼性の確保が必要であろう。なんらかの媒体で広報し、全国の事業者に対してビジネスモデルを普及啓発していく必要がある。
- 信頼性確保については、いざと言うときの保証が必要となる。一部の売上をプールして、補償基金を作る等の対応ができるようになればよいと考えている。
- 人件費のかかるサポートであり、担い手側の意識改革も必要となる。今後は介護関係者等にも担ってもらいたいと考えている。

### 4. 死別後のサポート

#### ■【事例】地方自治体④B(死別後の行政手続きをワンストップで対応)

##### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

###### 【サポート内容】

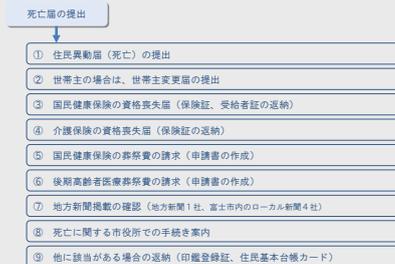
- 死別に伴う行政手続きを含め、様々な行政手続きについて、総合窓口においてワンストップで対応している。
- 従来では、それぞれの手続きについて、別々の受付窓口で行う必要があり、各受付窓口が異なるフロアにある場合もあるため、住民は庁舎内を移動しなければならなかった。さらに、各手続きが別々に行われるため、それぞれについて順番待ちする必要があり、待ち時間も長くなってしまっていた。
- そこで、総合窓口においてワンストップで対応することにした。総合窓口では、一人の担当者が、住民に対してヒアリングを行いながら、各種の申請を代行する。
- 各種の申請を一人の担当者が行うには、担当者の知識や経験が必要になるが、なるべく人に依存しないようにするため、総合窓口のためのシステムを導入している。総合窓口の担当者は、このシステムに従って、必要な申請を行う。またこのシステムにより、申請データは、各業務所管部門に送信され、それぞれの部門で申請の審査等の業務を行う。

###### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 従来では、行政手続きを行うために、住民は複数の受付窓口を行き来したり、長い時間待たなければならなかった。そこで、平成18年に市の「行政経営プラン」において、そうした行政手続きをワンストップで対応する方針を打ち出した。
- そして、ワンストップ総合窓口に関する検討委員会を設置し、仕組みや運営方法等について検討した。その後、システム企業にシステムの導入の委託をすることを決定し、平成22年に、総合窓口を開設した。

##### ＜サポートの具体的な内容＞

- 死別に伴う行政手続きの一連の流れは以下のとおりとなっている。



##### ＜今後の課題＞

- 死亡手続は葬祭業者が代行している場合が多い。そのため、付随する手続きについては、後日行ってもらうことが多い。
- 閉庁時受付された死亡届に関しては翌開庁日の処理となってしまう。書類不備、世帯主変更の新世帯主の未確認による処理の遅れがある。
- 死亡者が単身、身寄りがいないなど届出人がいない場合がある。家屋管理人等で届出を拒否されることがある。福祉の担当課に、葬儀にかかわる費用について相談することになる。

## 4. 死別後のサポート

### ■【事例】遺品整理業者④C(遺品整理代行の支援)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- もともと、廃棄物処理もリサイクルも業務も行う便利な引越業者であったが、引越業務を行うなかで遺品整理に困っていた遺族等があり、遺族等にまとめて遺品整理を行うサポートを提案したところ、感謝されたことから、ワンストップで顧客のニーズを受けることの喜びと必要性を感じた。
- これまで遺品整理は専門業者がなく、廃棄物処理業者も遺品だからといって丁寧にあつてくれるわけではない。また、最近では、兄弟も少なく、核家族化も進むなかで、家族と同居していないで亡くなる方が多く、家族や親族等が葬儀を行っても、葬儀が終わった後が葬儀前の準備よりもっと大変なものにもかかわらず、依頼者は仕事もあり、そのために休みを取ることができない。また、故人は近所づきあひも疎遠であるので、遺品整理を手伝ってもらおうことが難しいという状況にあった。
- 当初、遺族等のために始めたサポートであったものの、遺族等が故人に何を望むか、どのようにすることが故人にとっても気分がよいだろうかと考え、生前いろいろな理由で遺族等と疎遠であったり、関係性が薄いという状況であったが、最後は故人にきちんと供養をしてあげて、途切れていた関係を当社が修復したいと考えようになった。故人の遺品は実際には大切なものかもしれないし、ごみとして廃棄されるよりも、第三者に使ってもらった方が気分がよいかもれない。そのようなことを想像しながら、貴重品や形見分けするものを分けるようにした。
- 実際、故人の遺品からは遺族等でさえ知らなかったことが発見でき、故人の生活ぶりから勉強になることがよくある(人のふりみて我がふりなおす)。孤立死という現状を見るなかで、社会としてどうすれば孤立死が減るか、孤立死しないために何に注意すべきかを考えるようになった。

#### ＜一人住まいの方を対象に情報を発信し、生き方を考える機会を提供＞

- これまでに一人住まいの方の相談にのった経験及び遺品整理の現場に1万件以上行って遺族の困っている話を聞いた経験をもとに、「おひとりさまでもたいじょうぶノート」を作成した。必要な情報を網羅しつつ、高齢者が1日で見ることができるように内容を絞り、18ページに圧縮したノートを5万冊作成して、一世帯2冊まで無償(送料も当社負担)で配布した。一人住まいの人がこれからどう生きるかということを考えてもらうようにした。
- 無料で配布している理由は、亡くなった方が残してくれた資金と情報を使って、資金と情報を世間に流すと循環して、資金と情報になって戻ってくる。循環させていくためには無料がよく、多くの人に読んでもらうことがよいと考えた。

#### ＜専門家ネットワークを構築しワンストップサポートをする仕組みを構築＞

- エンディングに関する専門家を紹介するポータルサイトを開設した。これは、司法書士や弁護士など、遺言や相続を専門とする専門家を対象に、ポータルサイトに広告を掲載してもらい、案件があれば、専門家に顧客を無料で取り次ぐサービスである。全国をカバーし、一地域に6事務所限定でサービスを展開する。そうすることで紹介できる相談件数を上げることができる。
- 現在は、試行期間なので、掲載は無料であるが、今後は広告の掲載料を専門家から徴収して、システムの維持・メンテナンスに充当する。特に、紹介料や成約料は取るつもりはない(法的にも取ることではない)。専門家にとってみれば、当社を通すことで、信頼感を得ることができ、消費者にとっては、これまで敷居が高く、自分から連絡することに躊躇したり、どこに連絡してよいか分からないという問題を解決できる。当社としては、全国で顧問弁護士や司法書士の自社ネットワークを構築することができ、セミナーでタイアップしたり、案件を相互に紹介することができる。

## 4. 死別後のサポート

### ■【事例】NPO④D(葬送の新たな選択肢の1つとして手元供養実施の支援)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- いわゆる「手元供養」を日本の新しい葬送・供養の1つの選択肢として普及させることを目的としており、そのためのサポートを提供している。
- 手元供養の際に残ったお骨は、従来のお墓への納骨の他に、本山供養、永代供養墓、樹木葬等、自然発生的にでてきた新しい葬送・供養の形と組み合わせることで、自分自身に適した方法を選ぶようにしている。
- 自分らしい葬送を考える企画展を企画運営し、手元供養だけでなく、葬送に関する無料相談、専門家によるフォーラムを実施し、広くライフエンディングに関する情報提供を行っている。
- 手元供養に対するニーズは徐々に高まっている。そもそも、手元供養が十分に認知されていないため、潜在的なニーズはもっと多いのではないかと考えている。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 昔からお骨を自宅に保管することは、伝統的に行われてこなかった。一般的には、墓地に埋骨する慣習がある。法律で禁止されていることではない。
- 自分自身は散骨にしておとうと考えていた。しかし、これでは遺族には何の形跡もなくなってしまうので、メモリアル的なものが残る方がよいと考え、お骨を手元供養できるように加工するサポートを開始することにした。手元供養できるようにすれば、墓も要らないし、故人を身近に感じ続けることができてよい。

#### ＜手元供養のサポート事例＞

- 手元供養には、加工型と納骨型とがあるが、加工型としては、お骨をプレート状に加工して、お墓の代わりに手元に置いておけるようになるサポートを行っている事例がある。



#### ＜利用者の反応＞

- 手元供養に対するニーズは徐々に高まっている。そもそも、手元供養が十分に認知されていないため、潜在的なニーズはもっと多いのではないかと考えている。
- 故人を身近に感じつづけられる、兄弟等で分けることができるといった点に魅力を感じている利用者もいる。
- しかし実際には、親族等の反対に押し切られて、結局お墓に納骨するケースが多い。利用のパターンとして多いのは、お墓への納骨と、手元供養の両方を行う場合である。納骨、散骨、手元供養の3つを行う人もいる。

## 4. 死別後のサポート

### ■【事例】葬祭業者の連合会④E(葬祭サポートの適性化・質の向上に向けた様々な取組)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 経済産業大臣の認可を受ける葬祭専門事業者の全国団体である。葬祭業という職業が社会的に必要不可欠であること、その地位の向上、競争力強化による経営の安定、葬祭文化の発展を旗印に設立した。
- 葬祭サポートの適性化・質の向上に向けて、様々な取組を行っている。

##### □災害協定の締結・支援

- 連合会及び加盟組合は、大規模災害・事故が発生した場合、各地方自治体との協定に基づき、専門家としての技術と知識を活かし、遺体の保全、搬送や棺・納体袋をはじめとした物資の拠出等といった支援活動を行っている。昭和52年の京都市との締結を初めとして、1都1道2府18県65市8町11東京都特別区(平成24年3月現在)と締結している。また、各地方自治体との災害協定締結を積極的に推進している。

##### □ガイドラインの作成

- ガイドラインを、消費者の皆様が安心して葬祭サービスを受けてもらうための行動指針として平成19年に制定した。当ガイドラインは、顧客情報の守秘義務、説明責任、料金体系の明確化、見積書交付の義務等について謳った葬祭事業者向けのガイドラインである。
- また、平成20年には、消費者により深く理解してもらえよう、消費者向けガイドラインを発表した。

##### <全国ネットワーク>

- 当連合会では、葬祭業者の58協同組合、1416事業者の全国ネットワークを保有している。災害協定等についても、そのネットワークを活かし、ほとんどの地域において協定を結んでいる。



##### <今後の課題・展開>

- 葬祭業者は、ライフエンディングに係わる様々な相談を受けることが多い。高額な相続についての相談や、葬儀費用を預けておきたいといった依頼を受けることもあるが、こうしたことには葬祭業者としては対応できない。他の関連主体とネットワークをつなぎ、うまく連携できるような体制を構築できればと思っている。
- 連合会の問題点として、県単位でしか参加できないことがある。高い志のある葬祭業者がいても、県が参加していなければ加盟することができない。そこだけ空白地になってしまうといった問題もある。

## 4. 死別後のサポート

### ■【事例】葬祭業者④G(遺族等の会)

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 近親者等との死別による悲嘆から日常生活を営むことに支障がある遺族等に対して、遺族等の会により同じような状況にある遺族等が集い支えあう場を提供することで、グリーフケアのサポートを行っている。遺族等の会には大学の研究者等の専門家が立ち会うことで、専門的なアドバイスが得られるようにしている。
- グリーフケアについては2段階で行っている。第1段階は「グリーフ・サポート」であり、専門家が中心となって悲嘆からの回復を目指している。第2段階は「ライフ・サポート」であり、コンサートや料理教室等の社会的活動を行うことによって、日常生活を営むことができるようになることを目指している。
- 当社が施行した葬儀の利用者に対して、遺族等の会への参加案内を送付している。さらに、配偶者と死別された方など、特に悲嘆が大きいと思われる方に対しては、電話でも当会への紹介を行っている。
- 年間利用者数については開始当初からそれほど大きな変化はないが、最近では男性の利用者が増えている。地域との付き合いがあまりない方が多いと考えられる男性については地域からの支援を受けづらい環境にあるので、以前から男性の参加を促す努力は続けていた。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 社員からの業務報告や社内提案制度によって、以前から、グリーフケアの必要性はテーマとして上がっていた。また、経営側でも今後グリーフケアに力を入れていくという方針があった。このように、現場と経営側の方針が一致し、実際にグリーフケアに取り組んでいくこととなった。遺族等の会を立ち上げる際には、傾聴等で遺族に接していたお客様相談室の年配の女性担当者が中心的な役割を果たした。

##### <遺族等の会の運営>

- グリーフ・サポートは、当社の担当者が主体となって、専門家の協力を得ながら実施している。
- ライフ・サポートは、当遺族等の会の出身者が主体となって設立したNPO法人に業務委託を行っていたが、現在は運営主体をNPO法人に移行、寄付金により活動を支援している。



##### <遺族等の会の有志によるNPO法人>

- 遺族等の会の会員の有志を中心として設立したNPO法人である。
- 遺族のグリーフケアに関する事業を行うことにより、遺族等が生きがいを持って心身ともに幸福で自立した生活ができる社会の形成に寄与することを目的としている。
- 主な活動は以下の通りである。
  - ① ライフ・サポート活動
  - ② グリーフ・サポート活動
  - ③ エンディングノートの制作・販売、「エンディング講座」の開催
  - ④ 地域での生活支援ネットワークの構築
  - ⑤ 病院等の家族会へのサポート活動

## 4. 死別後のサポート

### ■【事例】病院④F(遺族外来(悲嘆ケア外来・グリーフケア外来))

#### 事例の概要(サポート内容・事業開始の経緯等)

##### 【サポート内容】

- 近親者等の死別で大きな悲嘆を抱えている遺族等に対して、適切な精神医学的治療および心理カウンセリングを遺族外来(悲嘆ケア外来、グリーフケア外来)を開設して専門に行っている。
- 家族等の介護、治療決定、心理的・経済的な負荷等による様々なストレスを抱えた「第2の患者」と呼ばれる患者の家族等を対象としている。

##### 【事業開始の経緯・問題意識】

- 遺族等に対する医学的な援助が必要となる理由としては、以下のような点があげられる。
  - 死亡率が高い
  - 精神疾患罹患率(特にうつ病)が高い
  - 自殺率が高い
  - 介入が不安、緊張などを軽減。
- 外来受診した遺族に対して、精神・心理・社会面の問題について対応している。
- 近親者等の死別で悲嘆を抱えている遺族等に対して、知識不足や無考慮等により、有害な援助をしてしまうことがある。そこで、そうした遺族等に対して、遺族外来のサポートを提供している。
- また、遺族等の周囲の人々が「有害な援助」で悲嘆を深くしたり、長引かせてしまうことがないように普及啓発活動を行っている。

#### ＜遺族等に対する援助＞

- 遺族等に対する援助として、周囲の人々が知識不足や無考慮等により、行ってしまふ「有害な援助」の例は以下のとおりである。また、「有用な援助」の例も下記に紹介している。

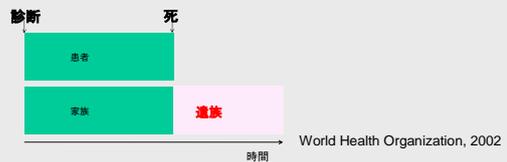
##### ＜有害な援助の例＞

- ・アドバイスをする「新しい趣味でも始めたら？」
- ・回復を鼓舞する
- ・陽気に振舞う
- ・不遜な態度をとる
- ・悲嘆等を過小評価する「あなたより苦しんでいる人はいる」
- ・理解しているような態度をとる「私はあなたが分かる」

##### ＜有用な援助の例＞

- ・同じ境遇の人と接する(集団精神療法)
- ・感情を吐き出す機会を持つ
- ・誠実な関心を示す
- ・そばにいる

- 患者・家族・遺族への援助の流れは、以下のとおりである。



## 5. その他のサポート

### 5. その他のサポート

### ■【事例】一般社団法人⑤A(ワンストップでのサポートに対応する人材の育成)

#### 事例の概要(サービス内容・理念・経緯等)

##### 【サービス内容】

- ライフエンディングのマネジメントに関する認定講座を開設し、「医療」、「介護」、「相続」、「成年後見」、「財産管理」、「供養」等の高齢者が直面する課題について学習し、長寿化に伴う生活の変化への事前準備等を総合的にマネジメントできる人材を養成している。平成23年に試験的に開始しており、受講者に参加してもらい、テキストや講義内容について意見をもらっている。
- ライフエンディングのマネジメントに関する認定講座は、3日間の講義を想定しているが、学習する分野が非常に広範囲に及ぶため、基礎的な部分のみならざるをえない。この講座で知識を身につけることは、高齢者の相談に対応する能力や葬祭業者等の関係主体をコーディネートするための入り口と位置付けている。そうした中でもすぐに学習したことを実践できるよう、「エンディングノートの書き方を高齢者に教えるセミナー」の開催方法を講座に組み込んでいる。

##### 【認定を受けた受講者がコーディネーターとして地域をマネジメント】

- 単に資格試験を受けて、トータルな知識を学ぶだけでも、土業が自分の仕事のなかで高齢者の方にアドバイスするための能力はつく。しかし、それではコーディネーターということではなく、自分の専門領域の中でトータルな知識を持ってビジネスするだけになってしまう。協会として目指しているのは、認定を受けたサポーターが供養業界など関係する各主体と具体的につながりをもって必要な業者を紹介したり、ニーズに応えられるようにマネジメントできるようにすることである。ケアサポートには、地域性もあり、個々のサポーターだけでは対応できないので、どのように全国にネットワークを拡大していけるかが課題である。

#### ＜シニアライフマネジャーのための研究会で実践的な知識を補充＞

- 3日間の講義だけでは、具体的に高齢者をサポートしたり、マネジメント役を担うことを仕事に組み込むことは難しいと考えている。そこで、マネジャーとしての実践力を育成していくために、当研究会でさらに発展的な学習ができるようにしている。
- ここでは、3ヶ月に1回、半日かけて事例研究を中心に講義を行い、1年を1つの単位として考えている。また、講座や研究会で学ぶだけでは限界があるので、次のステップとして実際に仕事を受けていく仕掛けを協会が用意する必要があると考えている。

#### ＜業界で連携してワンストップサポートをする仕組みを模索＞

- シニアライフマネジャーのための研究会の受講者の中でも、特に意欲的な人材と連携しながら、その人材を中核として、地域でのトータルケアを実現するフォーラム的な組織の構築を考えている。総合的にサポートするために、地域単位で異業種の事業者や専門家が加わる業界的なネットワークの確立が望まれる。
- 今後、個々の主体がサポートしていくというより、各主体が連携して、ワンストップでサポートする仕組みを作っていくかなければならないと考えている。関係主体はそれぞれそうした意識を持っているが、業際の垣根を乗り越えることは難しく実際の連携は小規模なものに留まっているのが現状である。